羽犬塚山ノ前遺跡

福岡県筑後市大字羽犬塚所在遺跡の調査
筑後市文化財調査報告書
第48集

2003

筑後市教育委員会

羽犬塚山ノ前遺跡
（はいぬづか やまのまえ いせき）

2003
筑後市教育委員会

序

本書は、平成14年度に行った羽犬塚山ノ前遺跡の埋蔵文化財調査報告書であります。

当市は、古代の幹線道路であった「西海道」が南北に縦断していたことが過去の発掘調査や歴史地理学で明らかにされ、今回の発掘調査で西海道跡の調査が6遺跡、8調査目になりました。これらの成果から、大字羽犬塚から大字鶴田までの約3.3kmがほぼ一直線に繋がる古代道路であったことが考古学によって証明されました。また、道路跡に伴う住居群や墨書土器を確認したことで、古代駅制に伴う駅家「葛野駅家」の存在も窺わせる発見にもなりました。

本報告にあたり、地権者である室園敏、敏一氏、並びに関係者各位に文化財へのご理解、ご協力を賜ったことを深く感謝申し上げます。

平成15年3月

筑後市教育委員会
教育長　牟田口和良

例言

1. 本書は平成14年度に筑後市教育委員会が行った羽犬塚山ノ前遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行った。出土遺物・図面・写真等は筑後市教育委員会で収蔵、保管している。発掘調査及び整理作業の関係者は第Ⅰ章に記している。

3. 本書に使用した図面の遺構実測図は上村英士、小林勇作、柴田剛、立石真二が作成し、遺物の実測、浄書は仲文惠、福井円が行った。

4. 本書に使用した遺構・遺物の写真撮影は上村、小林、柴田が行った。また、墨書土器等の赤外線写真・判読については太宰府市教育委員会、太宰府市市史編纂室に協力を得た。

5. 「Ⅳ.SF220道路状遺構形成土壌の粒径分布について」は筑紫野市教育委員会小鹿野亮氏の協力により実施した。

6. 今回の調査に用いた測量座標は、国土調査法第Ⅱ座標系を基準としており、方位は全て座標北(G.N)である。

7. 本書に使用した遺構の表示は以下の略号による。
SA-柵列　SB-掘立柱建物　SD-溝　SF-道路　SI-竪穴住居　SK-土壙　SP-ピット　ST-墓　SX-不明遺構
また、本文中の「○×○」の表記については両方の可能性があるという意味である。

8. 本書の執筆・編集は上村が行った。

目次

Ⅰ.調査経過と組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

Ⅱ.位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

Ⅲ.調査成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

Ⅳ.SF220道路状遺構形成土壌の粒径分布について・・・・・・・・・・・・・・57

Ⅴ.まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60

遺物実測観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 70

出土遺物一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 76

写真図版

Ⅰ.調査経過と組織

羽犬塚山ノ前遺跡は筑後市大字羽犬塚字山ノ前に所在し、調査区の一部分は大字前津字丑ノマヤになる大字界に所在する（pl.3）。発掘調査に至る経過は、平成13年10月に開発原因者である室園敏氏から開発予定地の埋蔵文化財の取り扱いについて筑後市教育委員会に照会がありこれにより開発関係者との協議を行った。協議の結果、開発予定地が推定西海道跡であることから試掘調査を行い、遺跡が確認されたため開発予定地内の本調査を行うことで合意した。また、発掘調査から報告書までの費用を原因者である室園敏氏に負担いただいた。調査は平成14年4月から9月まで行い、整理及び報告書作成については、平成14年度内に筑後市文化財整理室にて行った。

なお、発掘調査及び整理作業の関係者は次のとおりである。

調査組織

1）平成13年度（事前審査）

総括	教育長	牟田口和良
	教育部長	下川雅晴
庶務	社会教育課長	松永盛四郎
	文化係長	成清平和
	文化係	永見秀徳（事前審査担当）　小林勇作（試掘担当） 柴田剛　立石真二　上村英士

2）平成14年度（調査・報告書）

総括	教育長	牟田口和良
	教育部長	下川雅晴
庶務	社会教育課長	松永盛四郎
	文化係長	成清平和
	文化係	永見秀徳　小林勇作　柴田剛　立石真二 上村英士（調査担当）

3）発掘調査参加者

地元有志

4）整理作業参加者

整理補助員　平塚あけみ　仲文恵

整理作業員　野間口靖子　湯川琴美　野口晴香　横井理絵　妹川玲子　佐々木寿代　福井円

尚、調査及び整理に際しては次の方にご指導、ご教示を賜った。記して心より感謝申し上げます。（順不同、敬称略）

木下良（古代交通研究会）、山中敏文（奈良文化財研究所）、酒寿本雅康（長崎外国語短期大学）、日野尚志、田中正日子（第一経済大学）、狭川真一（元興寺文化財研究所）、馬田稔、小田和利、小川泰樹（福岡県教育庁）、城戸康利、中島恒次郎、山村信榮、三ノ宮正弘、高橋学、宮崎亮一、下川阿容子、森田レイ子、柳智子（太宰府市教育委員会）、太宰府市史編纂室、小鹿野亮（筑紫野市教育委員会）、松村一良、富永直樹、小澤太郎、神保公久（久留米市教育委員会）、西海道古代官衙研究会

II.位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中央部に位置する。市域をJR鹿児島本線と国道209号が縦断し、国道442号が横断する。また、市南部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や、低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畑、東部や南西部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は、国道に沿って市の中心部に形成されている。

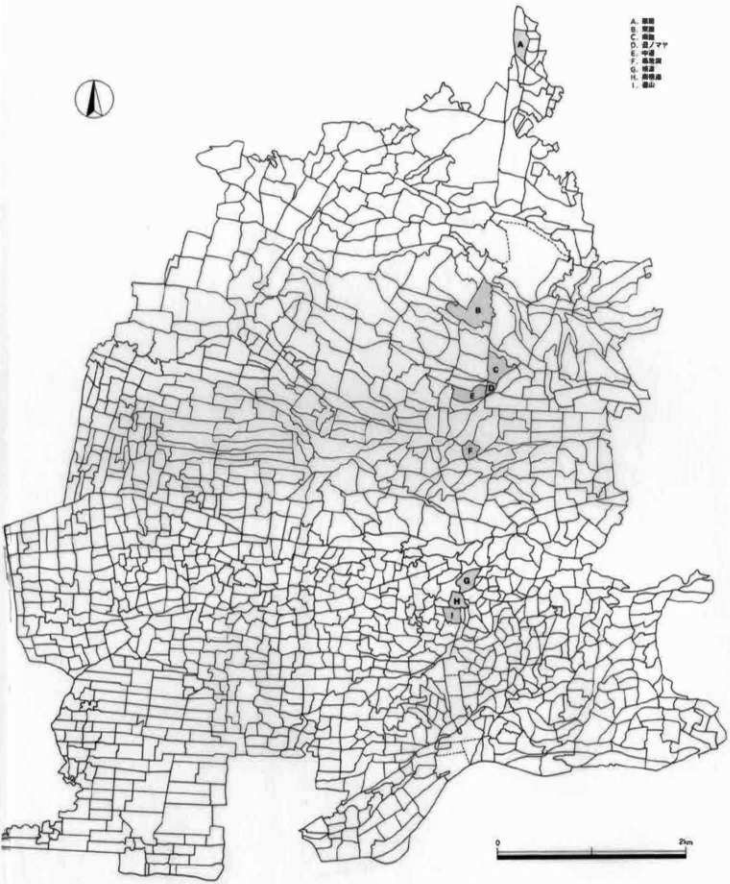
今回報告する羽犬塚山ノ前遺跡は市中央に位置し、八女丘陵裾部が東西に展開する地形である。当遺跡を頂点として北側、南側は谷状地形になり、葡萄や梨、米等の農業地帯であるが、最近の宅地開発等により宅地化が進行している地域でもある。

当遺跡周辺では多くの遺跡が調査されており、南西約200mには、古代の住居群や墨書土器を出土した「羽犬塚中道遺跡」、南約200mには古代の住居跡や道路遺構を検出した「羽犬塚射場ノ本遺跡」、南約900mには古代官道跡を検出した「山ノ井川口遺跡」や瓦器椀を多数出土した「徳久中牟田遺跡」、北約200mには古代の住居群を検出した「前津中ノ玉遺跡」が存在する。また、大字羽犬塚は近世の宿場町として栄え、「坊津街道」と呼ばれる街道跡も残存する地域である。

歴史地理的に概観すると、小字界と大字界の一部が当遺跡から市北部にかけて、ほぼ直線にラインが引かれている。この境界線を西海道跡（官道跡）とする先学諸氏の研究による推定がなされ、その延長線上の市南部で「鶴田中市ノ塚遺跡」「鶴田木屋ノ角遺跡」「鶴田牛ヶ池遺跡」「山ノ井川口遺跡」等の道路遺構が検出されている。このことにより、推定された西海道跡（官道跡）は確実に存在していることが明らかになり、字界である今回の調査で道路遺構を検出したことで、更にその精度が増すこととなった。また、推定ライン上には小字名で「三国路」「中道」「馬洗渕」「横道」「道山」など「道」に関係した小字が残る地域である。

律令では古代駅伝制による「駅」の設置が規定され、筑後国には御井駅、葛野駅、狩道駅の3駅が置かれていたとされる（『延喜式』）。大宰府から久留米市瀧山付近に想定されている「御井駅」までの直線距離が約23Km、その中間地点の佐賀県基山町付近に「基肄駅」が想定されていることから『延喜式』による駅間の距離が30里（約16Km）ではなく約25里（約12Km）であるとされている。「御井駅」から次の「葛野駅」までを約25里（約12Km）で想定すると当市羽犬塚付近（字車路、字丑ノマヤ）になることが先学諸氏の研究で明らかにされている。今回の調査地の一部「丑ノマヤ」の小字名は、「葛野駅家」の想定を考える上での重要な手がかりとなる字名である。

【参考文献】
『筑後市史-第1巻-』　筑後市　1997
『久留米市史-第12巻-』　久留米市　1994
『羽犬塚射場ノ本遺跡』　筑後市文化財調査報告書　第17集　筑後市教育委員会　1995
『徳久中牟田遺跡』　筑後市文化財調査報告書　第19集　筑後市教育委員会　1999
『前津中の玉遺跡』　筑後市文化財調査報告書　第4集　筑後市教育委員会　1987
『前津中ノ玉遺跡II』　筑後市文化財調査報告書　第22集　筑後市教育委員会　1999
『筑後市内遺跡群III』　筑後市文化財調査報告書　第44集　筑後市教育委員会　2002
『筑後市内遺跡群IV』　筑後市文化財調査報告書　第45集　筑後市教育委員会　2002
『筑後東部地区遺跡群VI』　筑後市文化財調査報告書　第36集　筑後市教育委員会　2001
松村一良「筑後地方を縦断する古代駅路」『MUSEUM　KYUSHU第9号』　玉鶴館等建設推進九州会議　1983


A
B
C
D
E
F
G
H
I
0
2km

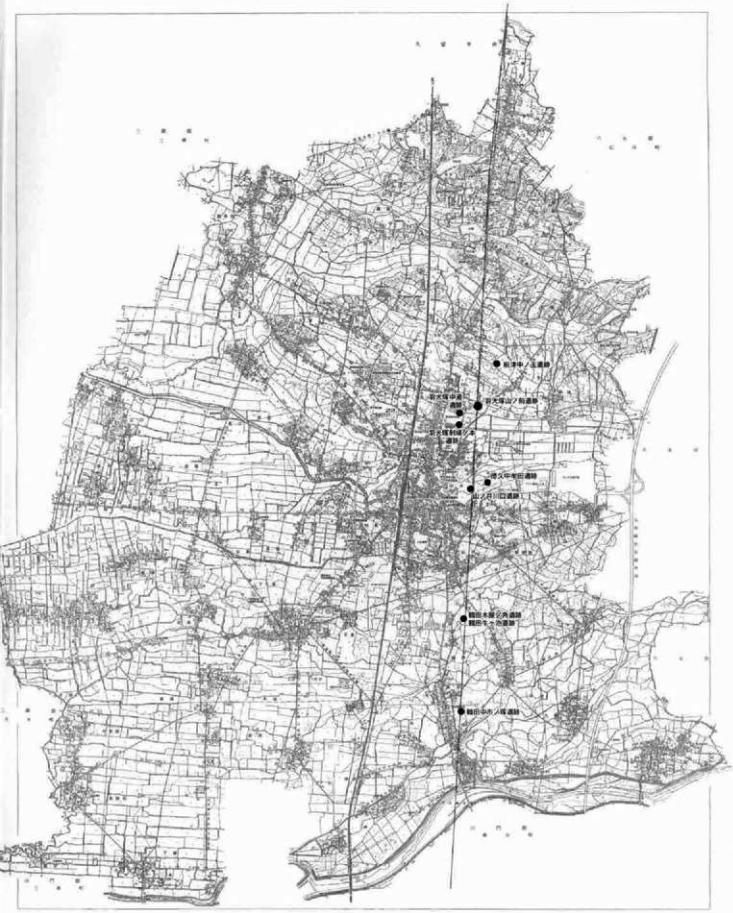


Fig.1　筑後市全図、小字図（1/40000）

Ⅲ.調査成果

(1) はじめに

調査地は筑後市大字羽犬塚字山ノ前107外と大字前津字丑ノマヤであり、大字・小字の境界に所在する。(Fig.3) 標高約19m程の八女丘陵南東端、低位丘陵上に位置する。現況は梨畑であった。調査対象面積は約1908㎡、調査期間は平成14 年4月3日から9月30日迄である。遺構の掘削は表土から遺構面までを (有) 徳光建設に依頼し、遺構面からは地元発掘作業員による手作業の掘削を行い、測量、実測、写真撮影等を行い、記録保存の措置を講じた。調査区は排土置き場の関係上、反転調査を行っている。調査は上村英士が担当し、小林勇作、柴田剛、立石真二の協力を得た。

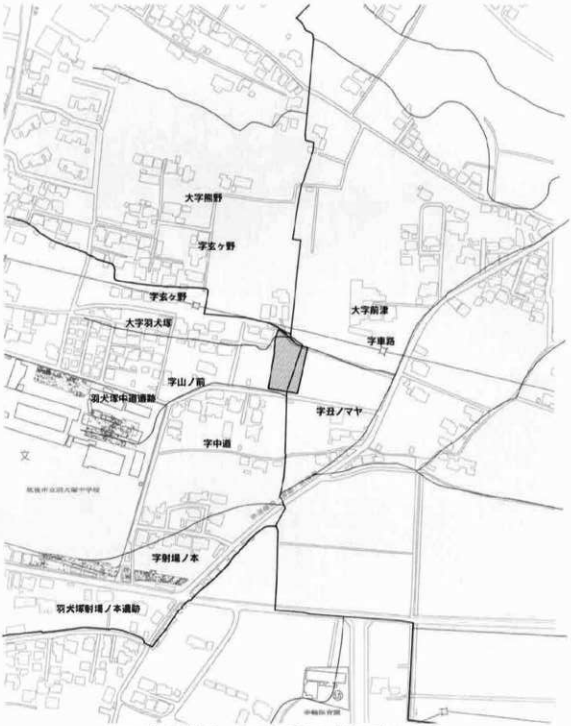


Fig.3 羽犬塚山ノ前遺跡 調査地点位置図 (1/1000)

層位については調査区内で違いがあり以下に分類して記載する。(Fig.4)

1.調査区北側部分

現況から約40cm～60cmの畑土下に淡茶黒色土の包含層が存在し、包含層を除去した面で整地層（中・近世）を確認した。この整地層の東側部分の暗黒灰色土に切り込む形で遺構面を確認し（Ⅰ面）、暗黒灰色土を除去した面と淡黒灰色土（古代）に切り込む形で遺構面を確認した（Ⅱ面）。更に淡黒灰色土等の遺構面を除去すると、淡茶橙色土（地山）に切り込む形で遺構面を確認した（Ⅲ面）。

2.調査区南側（道路遺構検出部分）

現況から20cm～30cmの畑土下に淡茶黒色土の包含層が存在し、淡茶黒色土を除去すると、更に淡黒茶色土（古代）の包含層を確認した。淡黒茶色土の包含層を除去すると、淡茶橙色土（地山）に切り込む形で遺構面を確認した（Ⅲ面）。

3.調査区南側（住居等検出部分）

現況から20cm程度の畑土下に淡灰茶色土の包含層を確認し、淡灰茶色土を除去すると、淡茶褐色土（堆積層）に切り込む形で遺構面を確認した（Ⅲ面）。

遺構は層位から１・Ⅱ・Ⅲ面で形成されており、調査区北側部分では3面（１・Ⅱ・Ⅲ面）、南側部分では1面（Ⅲ面）の生活面を確認しており、１面から近世以降、Ⅱ面・Ⅲ面から近世、古代の遺構を検出している。１面から硬化した連続土壙、Ⅱ面からは道路遺構、ピット等を検出し、Ⅲ面からは道路遺構、掘立柱建物、竪穴住居、土壙、土壙墓、ピット等を検出している。以下、遺構１面から記述する。

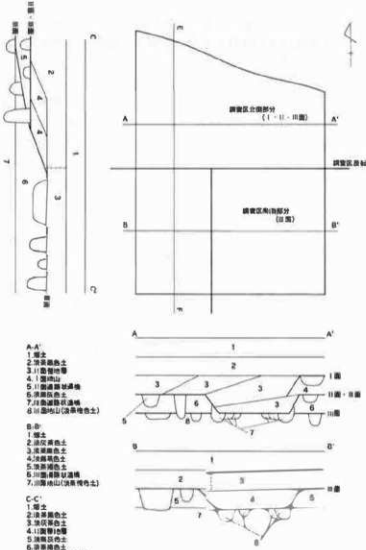


Fig.4　調査区層位模式図

(2) 検出遺構

遺構 I 面

調査区北東端で検出した遺構面で、整地層最上面に遺構は展開する。遺構は硬化面をもつ土壙群を検出している。何れの遺構からも出土遺物が小片のため図示は行っていない。

SX002 (Fig.5～7、Pla.1、2)

楕円形のプランを呈し、埋土は暗黒褐色土の硬化土と淡黒褐色土の軟質土で構成される。長軸約1.3m、短軸約0.59m、深さ約0.14mを測る。遺物は土師器坏片、甕片を出土している。

SX003 (Fig.5～7、Pla.1、2)

SX002の東隣で検出し、楕円形のプランを呈する。長軸約0.49m、短軸約0.23m、深さ約0.19mを測る。埋土は淡褐黒色土と暗黒灰色土の硬化土、淡褐黒色土と淡黒茶色土の軟質土で構成される。遺物は土師器片を出土している。

SX004 (Fig.5～7、Pla.1、2)

SX003北隣で検出し、細長い溝状のプランを呈する。長軸約2.6m、短軸約0.32m、深さ約0.10mを測る。埋土は暗黒褐色土の硬化土と淡黒褐色土の軟質土で構成される。遺物は土師器坏×皿片、甕片、甕把手片を出土している。

SX006 (Fig.5～7、Pla.1、2)

SX004北隣で検出し、細長い楕円形のプランで、北側がテラス状に展開する。長軸約1.62m、短軸約0.61m、深さ0.11mから0.09mを測る。遺物は土師器坏片、坏×皿片、甕片を出土している。

SX007 (Fig.5～7、Pla.1、2)

SX006西隣で検出し、楕円形のプランを呈する。長軸約0.79m、短軸約0.4m、深さ約0.17mを測る。埋土は淡灰茶色の硬化土と淡黒褐色土の軟質土で構成される。遺物は土師器坏×皿片、甕片を出土している。

SX013 (Fig.5～7、Pla.1、2)

SX006北隣で検出し、細長い不定形のプランで、一部テラス状に展開する。長軸約1.9m、深さ約0.03mから0.09mを測る。埋土は淡灰茶色の硬化土と淡黒褐色土の軟質土で構成される。また、直径0.1m程度のピット状の痕跡を確認し埋土は硬化しており、この痕跡は遺構東側で顕著に見られる。

SX014 (Fig.5～7、Pla.1、2)

調査区北東端で検出したピット状の遺構で、埋土である淡褐黒色土が全面硬化している。長軸約0.36m、短軸約0.18m、深さ約0.05mを測る。遺物は土師器坏×皿片、甕片を出土している。

SX016 (Fig.5～7、Pla.1、2)

SX014南側で検出した遺構で、掘り下げ後2つのピット状になる。埋土は淡褐黒色土と淡黒褐色土の硬化土、淡黒茶色土の軟質土で構成される。遺物は須恵器甕片、土師器坏×皿片を出土している。

SX019 (Fig.5～7、Pla.1、2)

SX016北隣で検出したピット状の遺構で、埋土は淡褐黒色土が全面硬化している。遺物は土師器片を出土している。

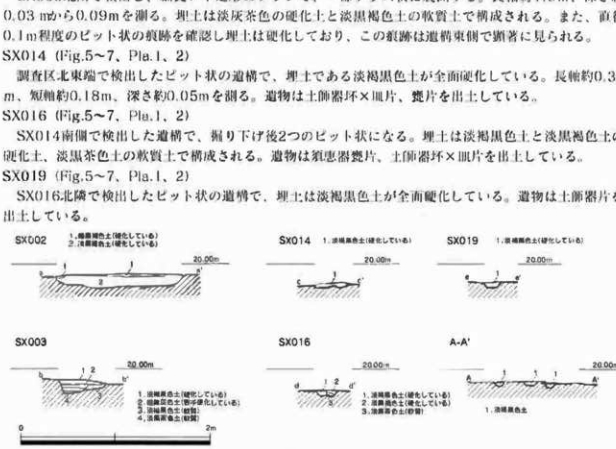


Fig.5 I面検出遺構 土層図 (1/40)

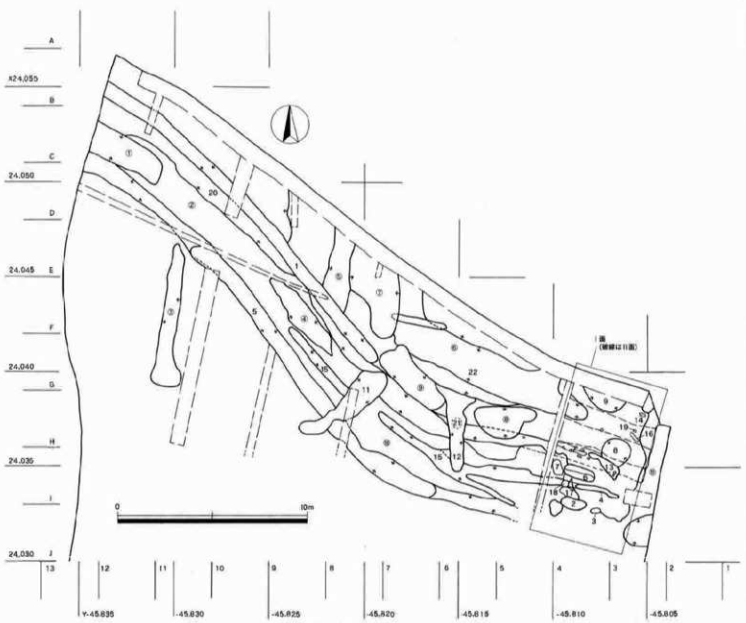


Fig.6　Ⅰ面・Ⅱ面遺構略測図（1/200）

S-番号	遺構番号	備考（旧→新）	地区	面
1	SD001	SF010北側溝　20→1		Ⅱ
2	SX002	硬化面をもつ土壙	J2	Ⅰ
3	SX003	硬化面をもつ土壙	J2	Ⅰ
4	SX004	硬化面をもつ土壙	I3	Ⅰ
5	SD005	SF010南側溝		Ⅱ
6	SX006	硬化面をもつ土壙	J2	Ⅰ
7	SX007	硬化面をもつ土壙	J2	Ⅰ
8		撹乱	H3	Ⅰ
9		撹乱	H3	Ⅰ
10	SF010	道路状遺構		Ⅱ
11		不明遺構　10→11	H7	Ⅱ
12		不明遺構　11→12	I5	Ⅱ
13	SX013	硬化面をもつ土壙	I3	Ⅰ
14	SX014	硬化面をもつ土壙	I3	Ⅰ
15	SX015	SF010路面帯状硬化面		Ⅱ
16	SX016	硬化面をもつ土壙	H2	Ⅰ
17		硬化面をもつ土壙	I3	Ⅰ
18		硬化面をもつ土壙	I3	Ⅰ
19	SX019	硬化面をもつ土壙	H2	Ⅰ
20	SD020	SF010北側溝　20→1		Ⅱ
21		ピット　21→12	I5	Ⅱ

Tab.1　Ⅰ面・Ⅱ面遺構番号台帳

整地番号	土色	整地番号	土色	整地番号	土色
①	黒灰色土（硬化土）	⑤	黒茶色土（軟質土）	⑨	褐茶色土（若干硬化）
②	茶黒色土（軟質土）	⑥	明茶黒色土（若干硬化）	⑩	茶褐色土（若干硬化）
③	茶褐色土（硬化土）	⑦	淡黒褐色土（強い硬化）	⑪	淡灰色土（軟質土）
④	茶褐色土（強い硬化）	⑧	明黒茶色土（硬化土、小礫多い）		

Tab.2　整地土色番号台帳

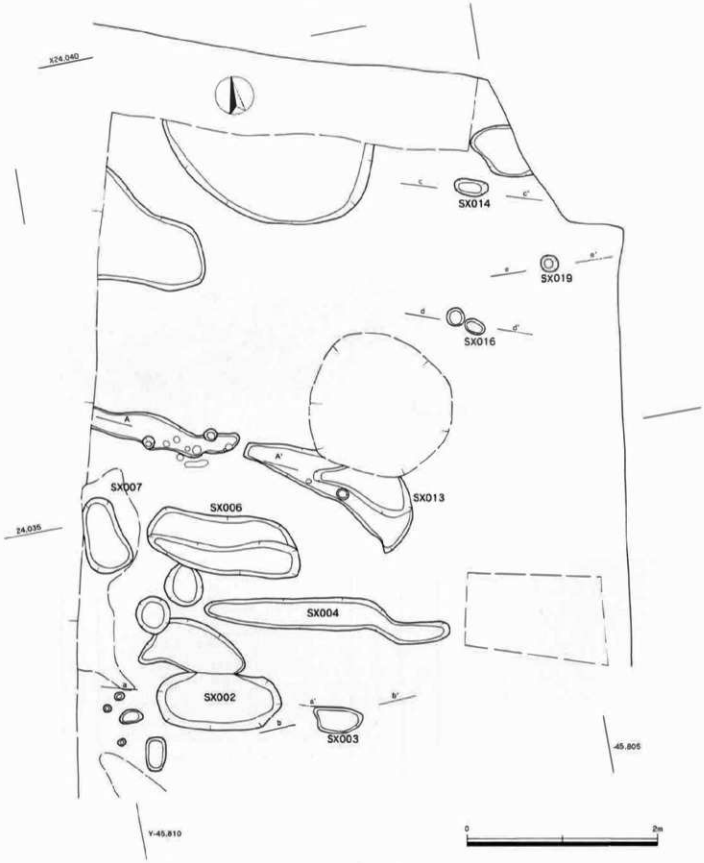


Fig.7　1面　遺構実測図（1/40）

遺構H面

層位模式図に示しているが、H面については調査区北側部分のみで検出している。これは先に述べた通り調査地中央を頂点とした丘陵上に調査区が立地しているためで、北側部分が斜面になり、古代から近世にかけて整地を行っている状況を確認しており、その部分から遺構を検出している。

道路状遺構

調査区北側から検出した、北西から南東に走る道路状遺構（SF010）である。以下に各痕跡（側溝・路面等）について報告する。

北側側溝

SD001（Fig.6、8、9、Pla.2～5）

調査区西端からから検出し、中央部分で途切れる。SD020を切る掘り直しの溝である。検出長約20.0m、幅約0.7mから0.8m、深さ約0.4mを測る。溝断面はU字ないしは逆台形を呈する。遺物は須恵器坏片、甕片、土師器坏×皿片、甕片が出土している。

SD020（Fig.6、8、9、Pla.2～5）

SD001に切られる溝で調査区西端から東端まで検出している。調査区中央で東西方向に若干方位を変えており、検出長約36m、幅約0.7mから1.5m、深さ約0.2mから0.8mを測る。溝断面は逆台形を呈する。遺物は須恵器坏片、甕片、土師器小皿片、坏片、甑片、甕片、白磁片、瓦質捕鉢片、鉄滓を出土している。

南側側溝

SD005（Fig.6、8、9、Pla.2～5）

SD001、SD020に対応する形で検出した溝で、調査区東端で後世の削平を受けている為、途切れる。検出長約30m、幅約0.7mから1.3m、深さ約0.1mから0.24mを測る。溝断面はU字を呈する。遺物は須恵器坏片、蓋片、甕片、土師器坏片、小皿片、甕片、染付皿×碗片、磁器碗片、粘土塊、鉄滓を出土している。

帯状硬化面

SX015（Fig.6、8、9、Pla.2～5）

調査区中央部の路面中央から側溝に平行する形で検出し、調査区東側では2本に分岐する帯状硬化面である。路面からは約0.05mから0.10m程逆台形に近い形で窪んでおり、側面から底部は硬化している。

SF010（Fig.6、8、9、Pla.2～5）

SD001、SD020とSD005間が路面である。SD001とSD005の溝心々幅約3.3mから3.5m、SD020とSD005の溝心々幅約3.0mから3.3mを測る。路面は全面的に硬化しており、SX015の帯状硬化面は更に硬化の度合いが強くなる。地山から0.2mから0.4m程度の土盛りを行い路面形成をしている。路面と考えられる面には直径約0.1mから0.15mの円形や楕円形の硬化痕跡を無数に残しており、その埋土の一部は黒色粘質土と灰色粘質土が交互に渦巻くような痕跡である。また、この痕跡は路面以外の部分でも確認している。

溝状遺構

SD022（Fig.6、8、9、Pla.2～5）

調査区東側で検出し、SF010に平行するが遺構西端で北側に折れ曲がり調査区外へ延びる。北側へ折れ曲がる部分については切り合い関係は不明であるが別の遺構として（S-25）取り扱っている。検出長約13.45m、幅約0.5mから2.7m、深さ約0.17mから0.51mを測る。遺構東側は溝であるが、西側で溜まり状の遺構になる。遺物は縄文土器片、須恵器坏片、甕片、壺片、土師器小皿片、坏×小皿片、甕片、黒色土器片、染付片、丸瓦片を出土している。

整地層（Tab.2）

道路遺構等を検出する際に確認した整地層である。10種類程度に分類している。遺物は須恵器坏片、甕片、土師器小皿、坏片、甕片、瓦質捕鉢片、鉄滓を出土している。

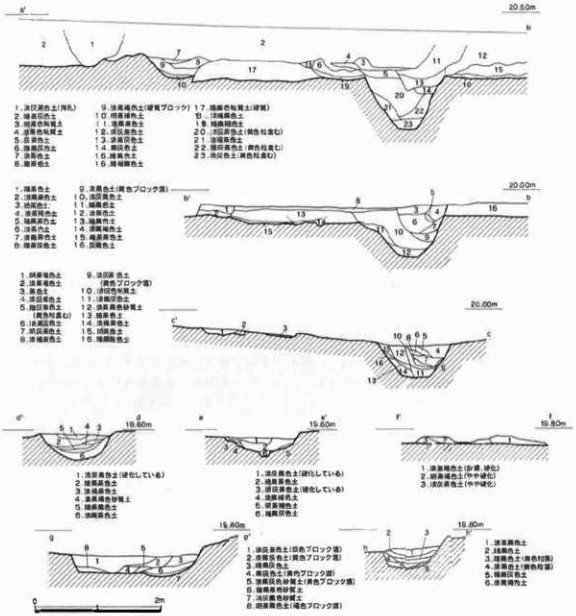


Fig.8 SF010 SX022土層図 (1/60)

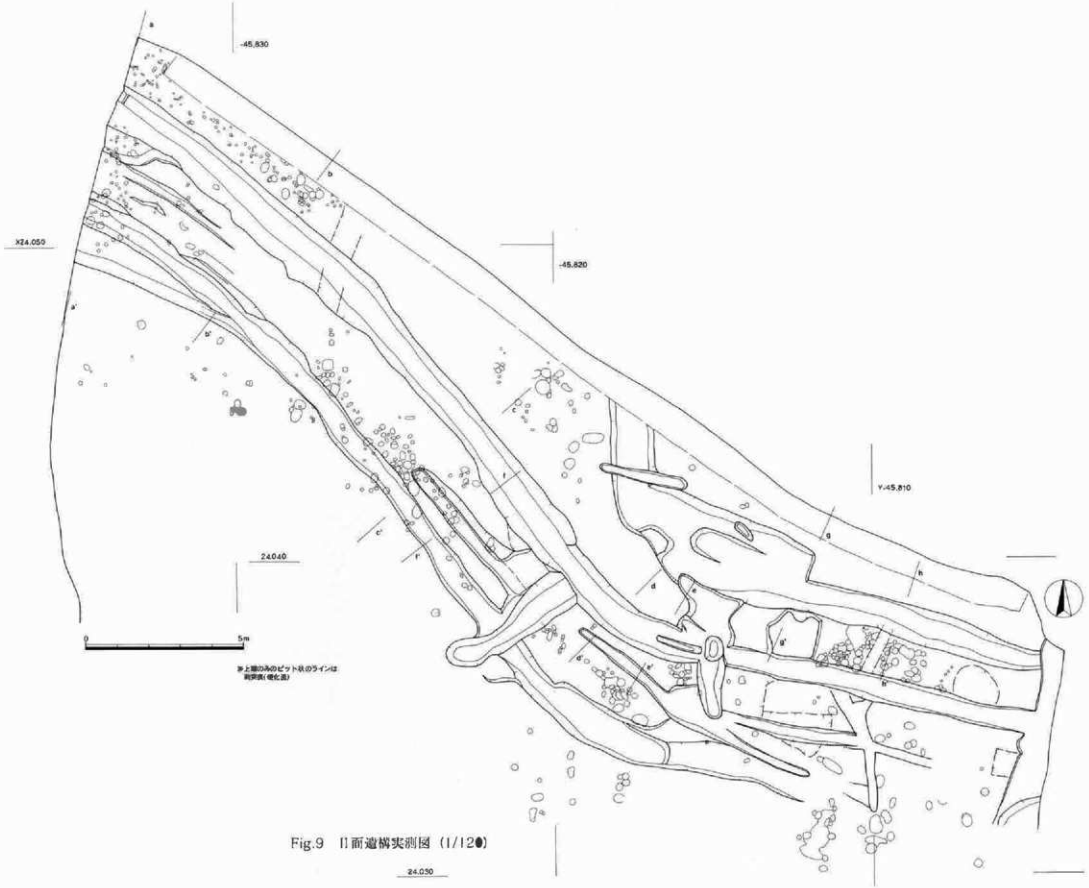


Fig.9　H面遺構実測図（1/120）

遺構面

層位模式図に示しているが、面については調査区全面で検出している。調査区北側では1面で検出した淡黒灰色土、2面では淡茶褐色土、淡茶橙色土に遺構は切り込んでいる。また、遺構略測図番号については反転調査を行っているため、道路側溝など連続して続く遺構も別々にS番号を付している。

柵列

SA190 (Fig.10、Pla.6、7)

調査区南西端で検出した柵列状の遺構である（ピットa～c）。ピット間総距離は約2.8m、各ピット間は約1.4mである。埋土からは柱痕と考えられるものは検出していない。方位はN-5°42′38″-Eである。また、これらは調査区外に展開し掘立柱建物になる可能性も考えられる。遺物はピットbから土師器片、ピットcから土師器甕片を出土しているが、小片のため図示していない。

SA195 (Fig.10、Pla.6、7)

SA190南隣で検出した柵列状の遺構である（ピットa～c）。ピット間総距離は約2.2m、各ピット間はa～b 間が約1.05m、b～c 間が約1.15mである。埋土カ は柱痕と考えられるものは検出していない。方位は、ほぼ座標北を示す。また、これらは調査区外に展開し掘立柱建物になる可能性も考えられる。遺物はピットa から土師器坏片、ピットc から土師器坏片を出土しているが、小片のため図示していない。

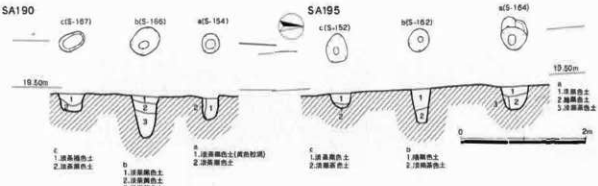


Fig.10 SA190、195 遺構実測図 (1/60)

掘立柱建物

SB200 (Fig.12、Pla.6、7)

調査区中央部西側で検出した1間×1間の南北棟である。a—b 間推定距離が約1.7m、b—c 間が約3.4m、南北軸がN-14°2′10″-Wを測る。建物面積は約5.78㎡（約1.75坪）。各ピットは楕円形を呈し、深さ約0.34mから0.59mを測る。d ピットから柱痕と考えられる痕跡を確認している。遺物はb ピットから須恵器甕片、土師器坏×皿片、甕片、c ピットから須恵器甕片、d ピットから土師器坏×皿片を出土している。

SB205 (Fig.12、Pla.6、7)

SB200北隣で検出した南北棟である。ピット位置が安定しないが、a —c 間約3.0m、b — c 間約4.98m、南北軸がN-0°57′17″-Wを測る。建物面積は約14.94㎡（約4.52坪）。各ピットは円形ないしは楕円形を呈し、深さ約0.19mから0.52mを測る。遺物はc ピットから土師器坏片、粘土塊、d ピットから土師器坏×皿片、甕片、e ピットから土師器坏片、甕片、f ピットから土師器坏片を出土している。

SB210 (Fig.13、Pla.6,7)

SB205東隣で検出した南北棟である。ピット位置が安定しないが、a —c 間約4.18m、c —f 間約6.8m、南北軸がN-7°0′59″-Wを測る。建物面積は約28.424㎡（約8.61坪）。各ピットは円形ないしは楕円形を呈し、a ピットはテラスを設けており、深さ約0.11mから0.40mを測る。遺物はa ピットから土師器坏片、甕片、b ピットから土師器坏片、c ピットから土師器坏片、d ピットから土師器片、f ピットから土師器坏片、g ピットから土師器坏片、甕片、h ピットから土師器坏片、i ピットから土師器坏片、甕片、l ピットから土師器片を出土している。

旧→新、＝同じ遺構と考えられる

S番号	遺構番号	備考	地区
23		ピット	D9
24		ピット	F10
25	SD025	溝　137→25→124	F8
26		ピット	F10
27		ピット	F10
28		ピット	F10
29		ピット	F10
30	SD030	道路内側溝70→135→55→35→30	
31		ピット	G11
32		ピット	G11
33		ピット	G11
34		ピット	G11
35	SD035	道路内側溝70→135→55→35→30	
36		ピット	G11
37	SP037	ピット	G10
38		ピット	H10
39		ピット	G11
40	SX040	竪穴状遺構or土壙	I10
41		ピット	H11
42		ピット	H11
43	SP043	ピット	H10
44		ピット	H11
45	SK045	土壙	I11
46		SB210ピット	H10
47		SB205ピット　103→47	I11
48		ピット	I10
49		ピット	I10
50	SD050	道路側溝50→160、60→75、65→60→50	
51		SB215ピット	I8
52		SB210ピット	J9
53		SB215ピット	I9
54		ピット	J8
55	SD055	道路内側溝70→135→55→35→30	
56		ピット	J9
57		ピット	K8
58		ピット	K10
59		SB210ピット	K10
60	SD060	道路側溝→185、60→75、65→60→50	
61		ピット	K10
62		ピット	K10
63		ピット	J9
64	SK064	土壙	I9
65	SD065	道路側溝65→75、65→60→50	
66		ピット	G9
67		ピット	G11
68		ピット　132→68	H10
69		ピット	H11
70	SD070	道路内側溝→165、70→135→55→35→30	
71		ピット	I11
72		ピット	K12
73		ピット	K12
74		ピット	J10
75	SX075	浅溝・溜まり状遺構50、60、65→75	M4
76		SB215ピット	J9
77		ピット	K10
78		ピット	K10
79		ピット　87→79	L11
80	SD080	溝状遺構　90→80	
81		ピット　82→81	K10
82		ピット　82→81	K10
83		ピット	H10
84		ピット	H9
85	SI085	竪穴住居　95→85	I12
86		ピット	R3
87		SB200ピット　87→79	L11
88		SB210ピット	K10
89		ピット	L9
90	SX090	土壙?土坑状遺構?　100→90→80	
91		SB210ピット　116→91	K9
92		ピット　146→144→111→92	K10
93		ピット	I8
94		ピット	I10
95	SI095	竪穴住居　95→85、95→100	I12
96		ピット	G10
97		ピット	F9

旧→新、＝同じ遺構と考えられる

S番号	遺構番号	備考	地区
98		ピット	H8
99	SP099	ピット	I9
100	SX100	竪穴状遺構　95→100	I11
101		SB200ピット	I11
102		ピット	K11
103		SB210ピット　103→47	I11
104		ピット	J4
105	SX105	溝状遺構	I9
106		SB205ピット	I12
107		SB205ピット	J11
108		SB205ピット	K12
109		ピット	K9
110	SI110	竪穴住居　115→110	I13
111		SB200ピット　146→144→111→92	K10
112		ピット	J10
113		SB210ピット　143→113	J11
114	SP114	ピット	H10
115	SI115	竪穴住居　115→110	K14
116		ピット　116→91	K9
117		ピット	K9
118		ピット	J8
119		ピット	I10
120	SP120	土師器	I12
121		ピット	I10
122		ピット	H11
123		ピット	H10
124	SX124	溝状遺構　137→25→124	L7
125	SK125	土壙	T11
126		ピット	L9
127		溝状遺構	L9
128		ピット	K2
129		ピット	K2
130	SX130	土壙?土坑状遺構?　155→130	K8
131		ピット	I9
132		ピット　132→68	H10
133	SX133	道路東側溝内土壙	M5
134	SX134	道路東側溝内土壙	M5
135	SD135	道路内側溝→175、70→135→55→35→30	
136	SX136	道路東側溝内土壙	N5
137		土壙　137→25→124	K7
138	SX138	道路東側溝内土壙	M5
139		ピット	J1
140	SK140	土壙	S9
141		ピット　141→142	J9
142		SB210ピット　141→142	J9
143		ピット　143→113	J11
144		ピット　146→144→111→92	K11
145	SK145	土壙	T13
146		SB205ピット　146→144→111→92	K11
147	SP147	ピット	U13
148		ピット	V13
149		ピット	U14
150	SK150	土壙　155→150→171、174→150	O9
151			U14
152		SAP80ピットc	T13
153	SP153	ピット	S13
154		SA195ピットa	V10
155	SD155	道路内側溝→35、55　155→150、171→150	
156		ピット	V10
157		ピット	P13
158		ピット	U11
159	SP159	ピット	U13
160	SD160	道路東側溝→50　160→90、185→160	
161		ピット	V10
162		SA190ピットb	S14
163		ピット	N9
164		SA190ピットa	S14
165	SD165	道路内側溝→70	
166		SA195ピットb	U13
167		SA195ピットc	U13
168		ピット	V13
169		ピット	P9
170		溝状遺構	
171		ピット　171→150	P9
172		溝状遺構	U6

旧→新、＝同じ遺構と考えられる

S番号	遺構番号	備考	地区
173		溝状遺構	S5
174		不明遺構　174→150	O9
175	SD175	道路内側溝→135	
176		ピット	Q5
177		SI085内ピット	U12
178	SP178	SD165内ピット	U9
179		溝状遺構	T6
180		溝状遺構	
181		SI085内ピット	T11
182		ピット	U14
183		ピット	Q11
184		ピット	P10
185	SD185	道路東側溝→60　185→160	
186		ピット	K9
187		ピット	V5
188		ピット	O4
189		ピット	P4
190	SA190	柵列S-152・162他	
191		ピット	T13
192		ピット	V12
193		欠番	
194		欠番	
195	SA195	柵列S-154他	
200	SB200	111、101、87他	
205	SB205	106、47、107、146、108他	
210	SB210	103、46、52、142、91、59、88、62、113他	
215	SB215	51、53、76他	
220	SF220	道路状遺構	
225	SD225	東側側溝	
230	SX230	帯状硬化面	
235	SX235	帯状硬化面	
240	SX240	道路土壙	

Tab.3　III面遺構番号台帳

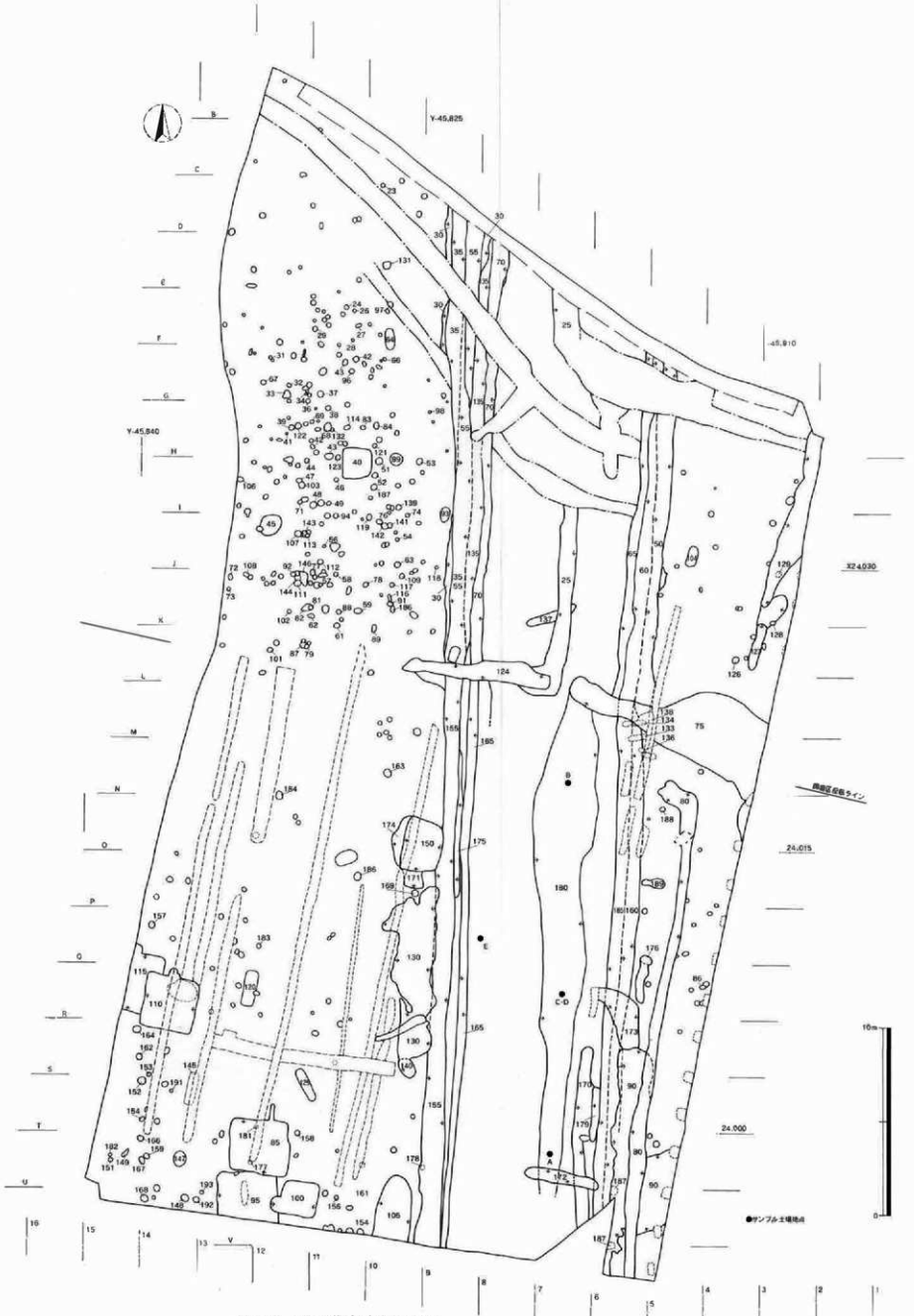


Fig.11　II面遺構略測図（1/200）

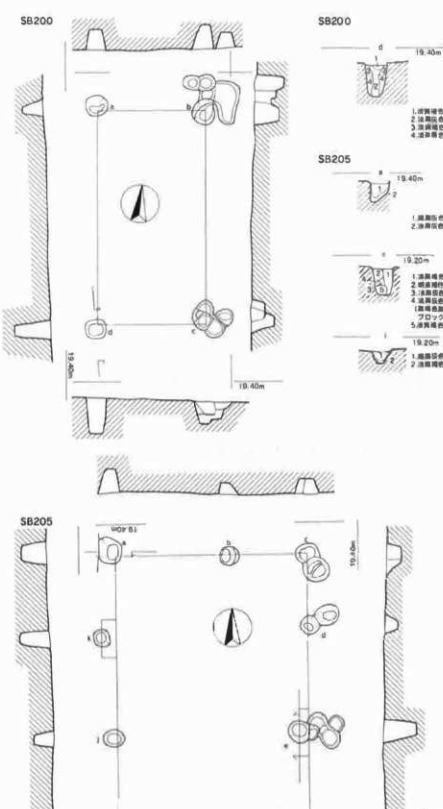


Fig.12 SB200、205 遺構実測図 (1/60)

SB215 (Fig.13、Pls.6、7)

SB210東隣で検出した1間×1間の南北棟である。a—c 間約2.22m、b—c 間約3.3m、南北軸がほぼ座標北を測る。建物面積は約7.33㎡（約2.22坪）。各ピットは楕円形ないしは楕円形を呈し、深さ約0.18mから0.42mを測る。遺物はaピットから土師器坏片、bピットから土師器坏片、甕片、dピットから土師器坏片を出土している。

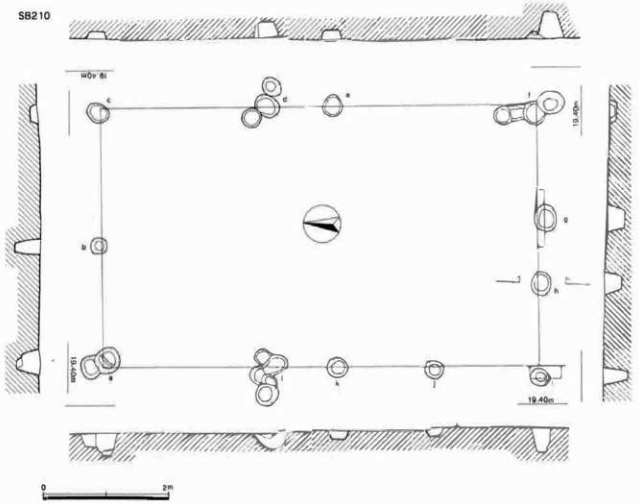
竪穴住居

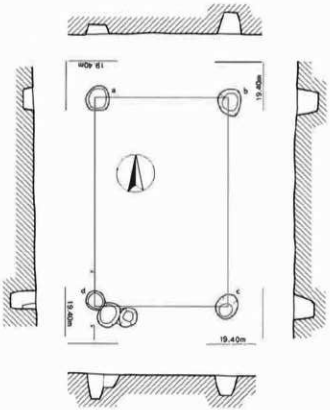
SI085 (Fig.14、Pls.10、11)

調査区南端で検出し、SI095を切る竪穴である。東西長約3.2m、南北長約2.94m、床面迄の深さ（以下、床面深さ）約0.12m、掘り方迄の深さ（以下、掘り方深さ）約0.38mを測る。南北軸はN-2° 17′ 26″ -Eである。一部撹乱を受けており、カマド、柱穴、屋内土壙等は検出していない。床下の掘り方については過掘の可能性がある。遺物は覆土から須恵器甕片、土師器坏片、皿片盃片、甕片、竈片、粘土塊、貼り床及び床下（以下、床面下）から須恵器坏片、壺片、土師器坏片、蓋片、甕片を出土している。

SI095 (Fig.15、Pls.10～12)

SI085南隣で検出し、調査区外へ展開する竪穴である。東西長約3.19m、床面深さ約0.19m、掘り方深さ約0.27mを測る。南北軸はN-1° 17′ 20″ -Wである。カマド、柱穴は検出していないが、屋内土壙、住居内土壙を東隅で検出した。屋内土壙は貼り床下で検出し、深さ約0.11mを測る。住居内土壙は東壁に掘り込む形で検出し、深さ約0.37mを測る。床面付近からは完形に近い甕3個を出土し、内2個は





竈内部に小型の甕を納め込んだ状態出土している。遺物は覆土から土師器坏片、皿片、蓋片、椀片、甕、甑、磁器片、耳環、粘土塊、羽恵器、床面から甕、床面下から土師器坏片、住居内土壙から土師器坏片、粘土塊を出土している。

SI110 (Fig.15、Pla.12～14)

調査区西端で検出し、SI115を切る竪穴である。南北長約2.91m、東西長約2.81m、床面深さ約0.17m、掘り方深さ約0.22mを測る。南北軸はN-14°55′53″-Eである。北壁中央部でカマドを、東北隅で屋内土壙を検出している。カマドは撹乱による削平を受けており、西側が若干残存し、赤色焼土を多く含む埋土である。また、カマド前（南床面）では白色粘土を検出している。床面では削り出し高台坏に蓋をするような形で坏が伏せ置かれ

Fig.13 SB210、215 遺構実測図 (1/60)

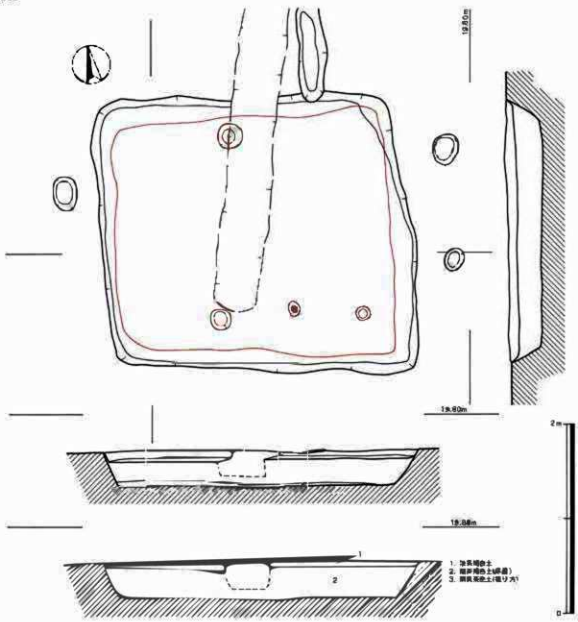


Fig.14 SI085 遺構実測図 (1/40)

た状態を確認し、共に焼土塊は床下で検出し、長軸約1.28m、短軸約1.13m、テラス部分深さ約0.21m、最大深さ約0.36mを測る。遺物は覆土から土師器皿片、甕片、甑片、カマドから土師器甕片、粘土塊、床下から土師器坏片、甕片を出土している。

SI115 (Fig.16、Pls.12～15)

SI110西で検出し、調査区外へ展開する竪穴である。南北長約3.18m、床面深さ約0.19m、掘り方深さ約0.23mを測る。南北軸はN-14° 2′ 10″-Eである。北壁でカマドを検出しており、壁面と焚き口付近で白色粘土を検出している。カマドは床面より一段掘り窪められ、赤色焼土を多く含む埋土である。床面では白色粘土を部分的に検出しており、東壁際の白色粘土下（床面）では土師器皿を出土している。柱穴や屋内土壙等は検出していない。遺物は覆土から須恵器坏片、土師器坏片、皿片、高坏片、甑片、カマドから須恵器坏片、土師器坏片、甕片、丹塗りの甕片を出土している。

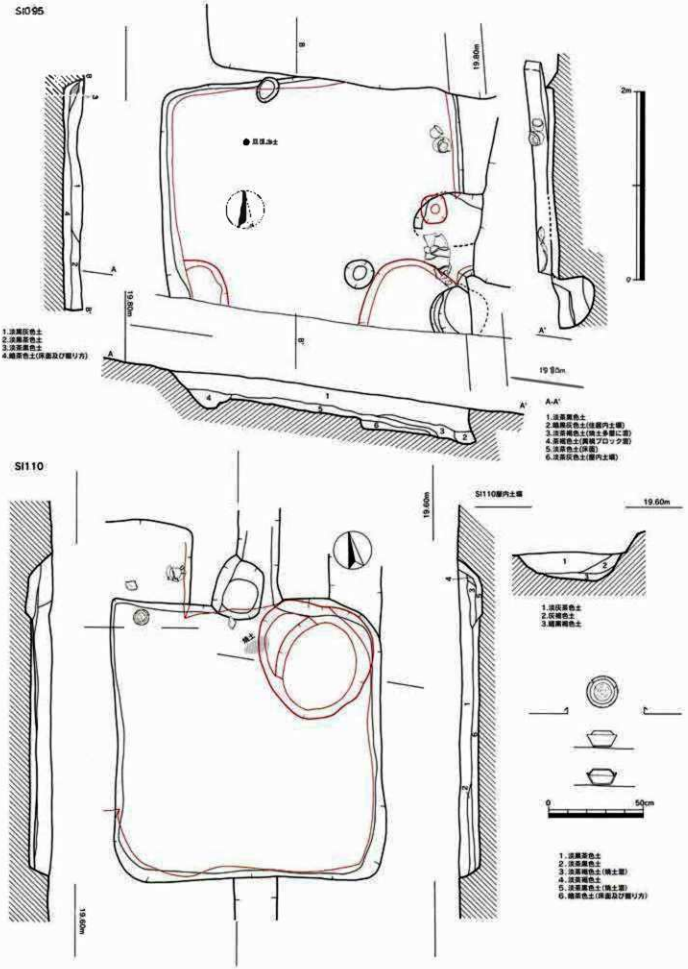


Fig.15 SI095、SI110 遺構実測図 (1/40) (柵)周遺物1/20

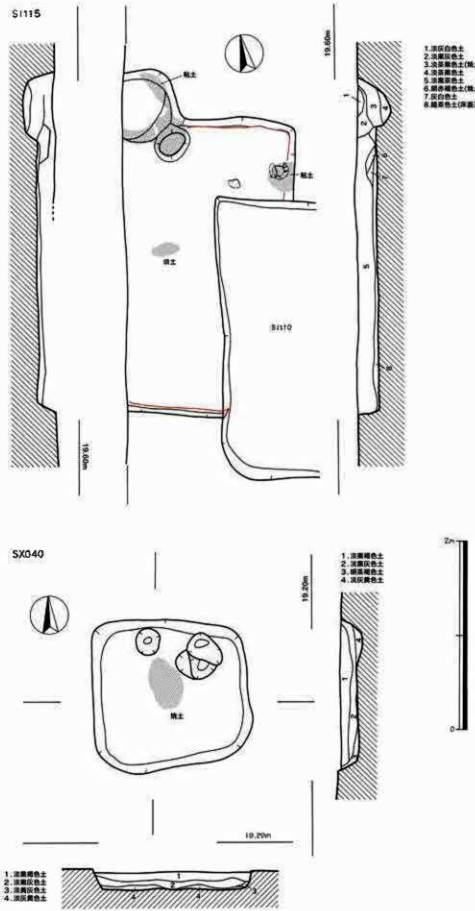


Fig. 16 SI115, SX040遺構実測図 (1/40)

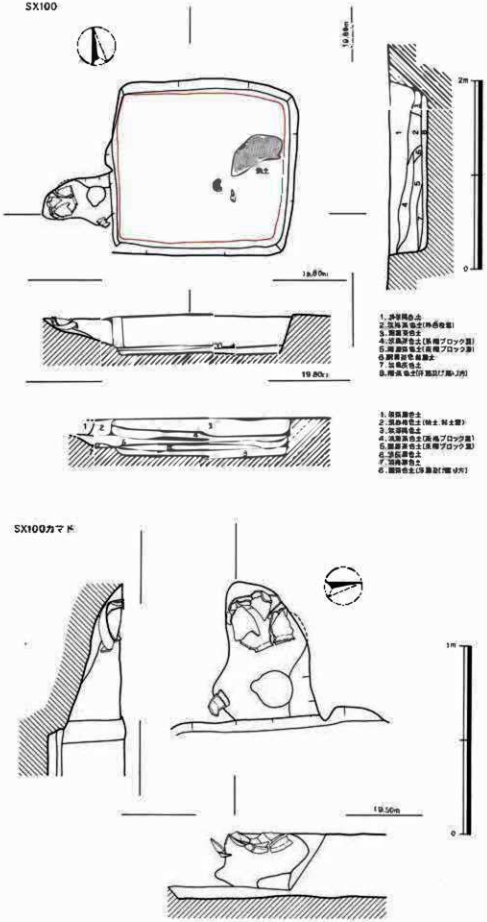


Fig.17　SX100、カマド遺構実測図（1/40、カマド1/20）

竪穴

SX040（Fig.16）

調査区西北で検出した小型の竪穴である。南北長約1.61m、東西長約1.64m、床面深さ約0.25mを測る。南北軸はN-3°21′59″-Eである。床面は部分的に硬化しており、中央部分に被熱の為と考えられる赤茶色を呈した部分を確認している。遺物は須恵器壺片、甕片、土師器坏片、椀片、甕片を出土している。

SX100（Fig.17、Pla.16）

S1095を切る小型の竪穴である。南北長約1.86m、東西長約1.95m、床面深さ約0.36m、掘り方深さ約0.41mを測る。南北軸はN-11°10′54″-Eである。床面は被熱の為と考えられる赤茶色を呈した部分が多く残存している。西壁から突出する形でカマドを検出しており、焚口に近い部分で完形の甕を出土している。また、この甕についてはカマド部分とS1095との切り合い関係が不明瞭であった為、S1095出土甕とセットでカマド内にあった可能性が考えられる。遺物は覆土から須恵器蓋片、甕片、壺片、土師器坏、皿、甕片、甑片、鉢片、土師器坏、粘土塊、床面から土師器坏、カマドから土師器坏片、甕×甑片を出土している。

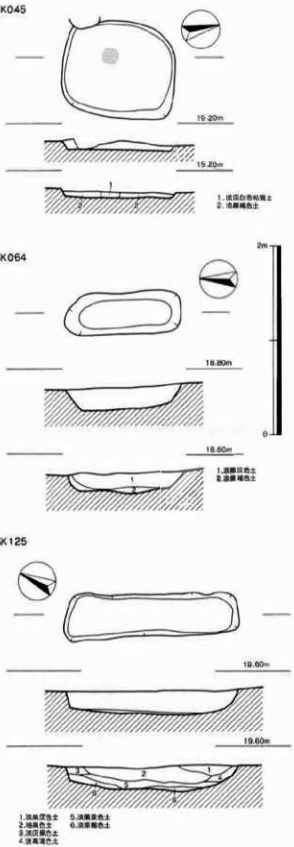


Fig.18 SK045、064、125遺構実測図 (1/40)

土壙

SK045 (Fig.18、Pla.16)

調査区中央西側で検出した隅丸方形の土壙である。南北長約1.18m、東西長約1.02m、最大深さ約0.15mを測る。中央部に直径約0.18mの白色粘土を確認している。遺物は坏片、器師[illegible]、甕片を出土している。

SK064 (Fig.18、Pla.17)

調査区北側で検出した土壙である。南北長約1.22m、東西長約0.45m、最大深さ約0.26mを測る。埋土は淡黒灰色土と淡黄褐色土である。遺物は土師器坏片（墨書土器）、甕片、粘土塊を出土している。

SK125 (Fig.18、Pla.17)

SI085北東側で検出した隅丸長方形の土壙である。長軸約1.83m、短軸約0.44m、最大深さ約0.27mを測る。長軸はN-25°38′27″-Wである。遺物は須恵器坏片、土師器坏片、蓋片を出土している。また、この遺構は北側で検出したST120に近く、平面プランが近似していることから土壙墓の可能性が考えられる。

SK140 (Fig.18)

調査区南側、道路西側与西隣で検出した楕円形の土壙である。SX130との切り合い関係は不明瞭である。長軸約1.02m、短軸約0.76m、最大深さ約0.54mを測る。壙底は中央部分が高く両端に楕円形のピットが並ぶ不定形な状態である。遺物は須恵器甕片、土師器、坏×皿片を出土しているが細片の為、図示していない。

SK145 (Fig.18)

SI085北西側で検出したほぼ長方形の土壙である。長軸約1.48m、短軸約0.59m、北側テラス部分深さ約0.29m、最大深さ約0.36mを測る。長軸はN-12°5′41″-Eである。遺物は出土していない。方位とプランからST120に近似しており、土壙墓の可能性が考えられる。

SK150 (Fig.18、Pla.16)

調査区中央、道路西側溝を[illegible]楕円形の土壙である。長軸約2.79m、短軸最大幅約1.71m、短軸最小幅約1.57m、最大深さ約0.43mを測る。遺物は須恵器甕片、壺片、土師器坏×皿片、甕片、土錘片を出土している。

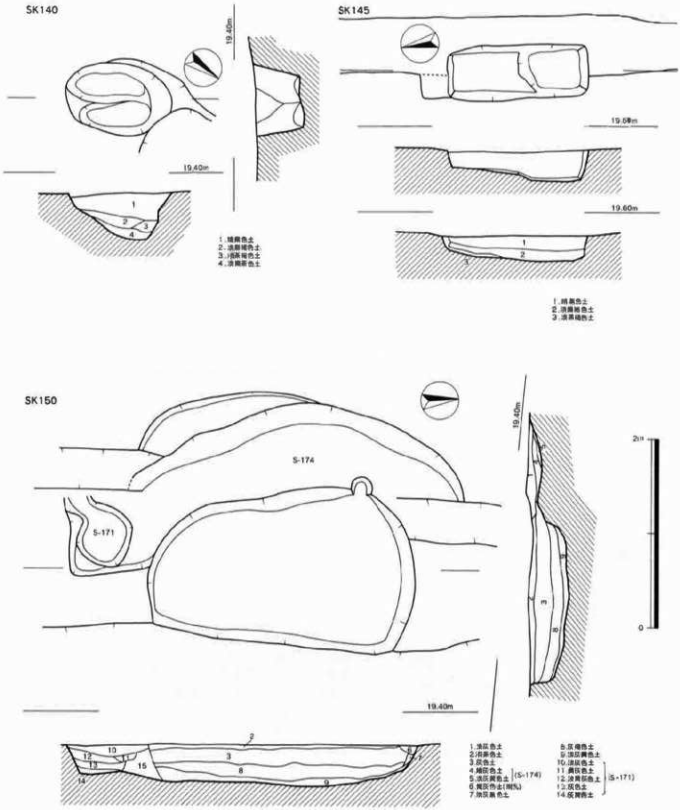


Fig.19 SK140、145、150遺構実測図 (1/40)

土壙墓

ST120（Fig.20、Pla.18）

SH10東隣で検出した土壙墓と考えられる遺構である。プランは隅丸長方形を呈し、長軸約1.94m、短軸約0.68m、深さ約0.32mを測る。長軸はN-7°35′40″-Eである。壙底はほぼフラットで北西隅に鉄製刀子を出土している。遺物は須恵器甕片、土師器片、磁器片を出土している。

Fig.20　ST120遺構実測図（1/40）

道路状遺構

SF220（Fig.22・23、Pla.19～29）

調査区を縦断する西海道跡（官道跡）と考えられる。検出遺構は、東西側溝、路面、連続土壙、帯状硬化面等である。

全体的な概要としては、調査区北半分では東側溝と考えられる溝を4本、西側溝と考えられる溝を5本、調査区南半分では東側溝3本、西側溝3本検出している（掘り直しを含め溝と判断したもの）。調査区南北で溝本数に違いが見られる現象については、1.調査区北半分は北へ下がる斜面であること。2.調査区南半分は丘陵頂点部分であり道路部分の地山をカット（切り通し）して造成していること。3.部分的な掘り直しを行っていること、等から側溝の造成に相違があったのではないかと考えられる。道路面については調査区北半分では路面は削平されており、南半分では硬化した路面と考えられる部分を検出している。ここで使用する「路面」の用語の定義については「両側溝間で検出された硬化面」とし、道路状遺構報告で使われる「路床」「路盤」等の分別や想定される側溝の対応パターン、路面状況から得られた構造的問題等についてはⅤまとめで述べる。

以下に各側溝と付帯するパーツについて記述する。尚、各側溝については切り合い関係上、新しいものから順次報告する。

西側側溝

SD030（Fig.23　Pla.18、19）

調査区北側部分でのみ検出した不定形な溝である。検出長約7.9m、西A地点（付図参照）で幅約2.28

m、深さ約0.31mを測る。埋土は、他の溝が黒茶色系の埋土に対して淡褐灰色土であり、硬化層は確認していない。溝断面は緩やかなU字を呈し、溝底部はフラットで完掘後、SD035・055を検出している。遺物は土師器甕片を出土しているが小片のため図示していない。

SD035 (Fig.23、Pla.18～23)

SD030完掘後、SD055を切る形で検出した溝である。溝は調査区を縦断し、中央部から南側にかけてはSD055と同一化しており分層が困難であった。検出長約55.2m、西A地点で残存幅約0.78m、深さ約0.14mを測る。北側で単独に検出した部分は全体のラインから若干西に張り出しており、溝底部は斜面である地形に従って北へ下がる状況で地山は小礫層である。溝断面は逆台形ないしはU字を呈し、埋土に硬化層が一部で確認できた。遺物は須恵器坏片、甕片、土師器坏片、蓋片、高坏片、甑片、甑片、黒色土器椀片、滑石製紡錘車、鉄滓を出土している。

SD055 (Fig.23、Pla.18～23)

調査区をほぼ直線に縦断する溝である。検出長約55.2m、西A地点で残存幅約0.98m、深さ約0.29mを測る。北側で単独に検出した溝底部は斜面である地形に従って北へ下がり、溝断面は逆台形に近い形を呈し、埋土から褐黄色土の硬化層を確認している。溝底部の地山は小礫層である。遺物は土師器坏片、甕片、甑片を出土している。

SD135 (Fig.23、Pla.18～23)

調査区中央から北側でSD035・055に切られ、部分的に残存する溝である。残存検出長約29.9m、西A地点で残存幅約0.35m、深さ約0.4m、西B地点で残存幅約0.48m、深さ約0.16mを測る。調査区北側では斜面である地形に従って北へ下がり、溝断面は逆台形を呈していたと考えられる。調査区中央でSD035・055と同一化している。埋土中に硬化層は確認していない。遺物は完形の土錘のみである。

SD070 (Fig.23、Pla.18～23)

検出した西側溝の中で最も古いと考えられる溝である。調査区縦断し、北半分では他の溝と切り合い関係にあるが、調査区南側では単独の溝である。検出長約53.6m、西A地点で残存幅約1.0m、深さ約0.57m、西B地点で残存幅約0.44m、深さ約0.22m、西C地点で幅約0.54m、深さ約0.18m、西D地点で幅約0.42m、深さ約0.06m、西E地点で幅約0.31m、深さ約0.20mを測る。調査区北側では斜面である地形に従って北へ下がり、溝断面は逆台形ないしはU字を呈する。調査区中央から南側部分では溝底部をテラス状に高低差を設けた連結土壙状を呈し、溝のラインが一定していない。また、路面の硬化面が溝を覆う部分も確認している。遺物は須恵器甕片、土師器坏片、砥石片を出土している。

東側溝

SD225 (Fig.23、Pla.24～26)

東側溝の中で一番新しい溝である。調査区を縦断し、検出長約45.4m、東A地点で深さ約0.21m、東B地点で幅約1.19m、深さ約0.19m、東C地点で幅約1.31m、深さ約0.13m、東D地点で幅約0.66m、深さ約0.06m、東E地点で幅約1.36m、深さ約0.11mを測る。溝断面は緩やかなU字を呈し、埋土は淡灰茶色でSD030埋土の淡褐灰色に近似し、若干の硬化を伴っている。また調査区北部、中央部分の溝底部で小礫、土器片混の突き固め痕跡と考えられる連続土壙を検出している。遺物は出土していない。

SD050 (Fig.23、Pla.24～26)

SD225完掘後、SD050、060を検出し、切り合い関係はSD050が切っている。調査区を縦断し、検出長約45.4m、東A地点では深さ約0.35m、東B地点では残存幅約0.42m、深さ約0.32m、東C地点では残存幅約0.50m、深さ約0.20m、東D地点では残存幅約0.57m、深さ約0.25m、東E地点では残存幅約0.73m、深さ約0.33mを測る。調査区北側では斜面である地形に従って北へ下がり、溝断面は逆台形を呈し、埋土の黄茶色土、褐茶色土に硬化が見られる。遺物は須恵器蓋片、小壺片、甕片、土師器坏片、坏×皿片、甕片、甑片を出土している。

SD060 (Fig.23、Pla.24～26)

SD050に切られるが調査区を縦断する溝である。検出長約46.0m、東A地点で深さ約0.40m、東B地点で残存幅約0.72m、深さ約0.24m、東C地点で残存幅約0.68m、深さ約0.21m、東D地点で残存幅約

0.82m、深さ約0.23m、東E 地点で残存幅約0.81m、深さ約0.27mを測る。調査区北側では斜面である地形に従って北へ下がり、溝断面は逆台形を呈し、埋土最上層である灰茶色土は硬化が見られる。遺物は土師器甕片、土錘を出土している。

SD065（Fig.23、Pla.24～26）

調査区北半分のみで検出した溝でSX075以南では検出していない。切り合い関係上、東側溝で最も古い溝である。検出長約18.3m、東A 地点で深さ約0.50m、東B 地点で残存幅約0.60m、深さ約0.18m、東C 地点で残存幅約1.07m、深さ約0.33mを測る。溝断面は緩やかな U 字を呈していたと考えられ、埋土は黒色土で硬化層、遺物共に確認していない。

側溝内連続土壙

道路状遺構報告で使われる「波板状の連続土壙」であると考えられる。

SX133（Fig.21）

調査区中央部のSD225完掘後、SD050上で検出した東西に長軸を持つ土壙である。長軸約1.29m、短軸約0.38m、深さ約0.07mを測る。埋土に意図的混入と考えられる小礫や土器片を確認しているが、硬化層は認められなかった。遺物は須恵器甕片、瓦片、土師器甕片を出土しているが小片のため図示していない。

SX134（Fig.21）

SX133北隣で検出した東西に長軸を持つ土壙である。長軸約1.77m、短軸約0.38m、深さ約0.12mを測る。埋土の状況はSX133と同様である。遺物は須恵器甕片、土師器甕片を出土しているが小片のため図示していない。

SX136（Fig.21）

SX133南隣で検出した楕円形の土壙である。長軸約0.54m、短軸約0.30m、深さ約0.03mを測る。埋土の状況はSX133と同様である。遺物は土師器小片を出土しているが小片のため図示していない。

側溝内土壙

SX138（Fig.21）

SX133、134完掘後、SD050検出時に確認した土壙である。SD050との切り合い関係は不明である。埋土の状況はSD050とは若干異なる。遺物は出土していない。

帯状硬化面

調査区南半分で検出した路面（硬化面）に帯状に窪んだ硬化痕跡を確認している。

SX230（付図、Pla.28）

道路面東側を南北に走る帯状硬化である。残存検出長約16.3m、幅約0.32～0.42m、深さ約0.02m～0.05mを測る。埋土は砂、小礫、土師器微細片が充填されているが、これらの埋土は帯状硬化面以外の路面でも確認している。

SX235（付図、Pla.28）

道路面西側を南北に走り、途中で分岐して西側溝（SD070）に合流する帯状硬化面である。検出北端から北では路面（硬化面）が削平により残存していない部分であるが、連続土壙を検出している。残存検出長約14.4m、幅約0.32m～0.69m、深さ約0.01m～0.06mを測る。埋土の状況はSX230と同様である。

連続土壙

SX240（Fig.22、Pla.29）

道路面上の路面（硬化面）が削平により残存していない部分で検出した連続土壙群である。道路状遺構の報告で使われる「波板状の連続土壙」であると考えられ、検出された土壙の南側では路面（硬化面）が残存しており帯状硬化面を検出している。土壙はa～iまで確認しており、プランは円形、楕円形、細長い楕円形等不定形な状況であった。検出長軸約0.55m～1.54m、短軸約0.27m～0.62m、深さ約0.03m～0.17m（Tab.4参照）を測る。埋土に硬化層は確認していない。遺物は出土していない。路面（硬化面）との先後関係については断定は出来ないが、路面（硬化面）が調査区北側へ続いていたことを想定

するならば、土壙は路面下層であると考えられる。しかし、検出された部分が小規模で、南側断面（延化面）を除去した段階では下層からは土壙を検出していない等、不明な点が残る。

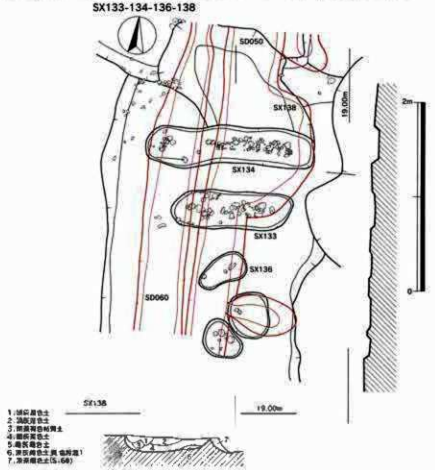


Fig.21　SX133、134、136、138遺構実測図（1/40）

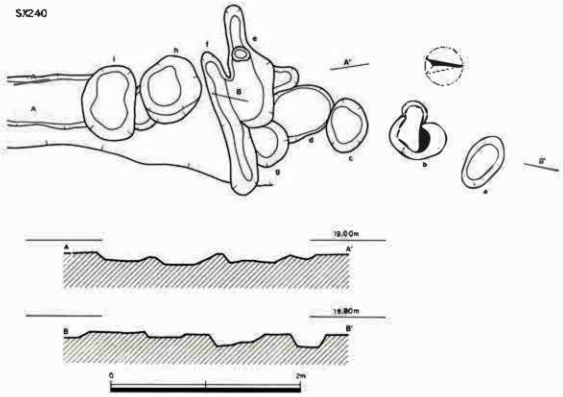


Fig.22　SX240遺構実測図（1/40）

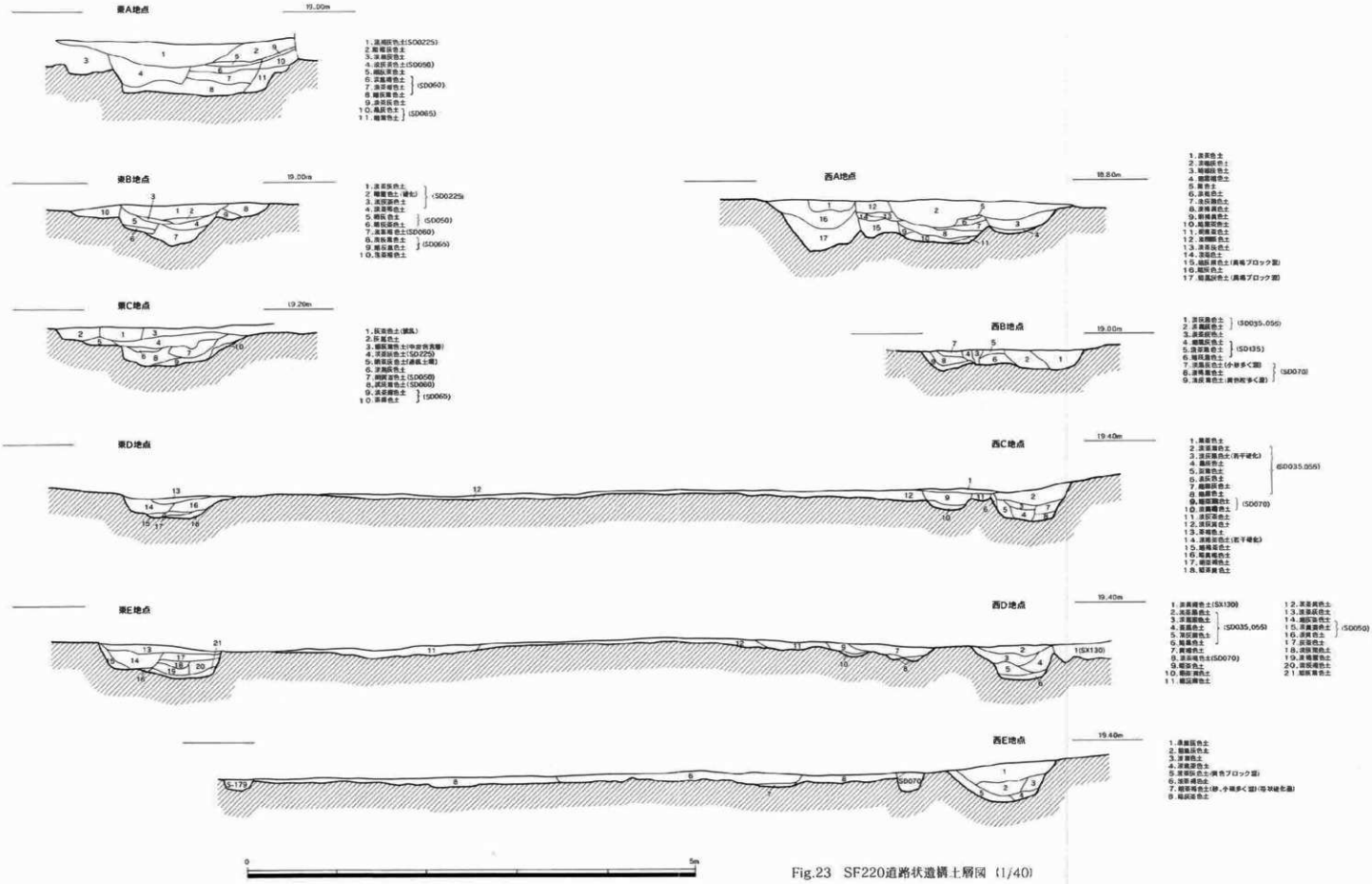
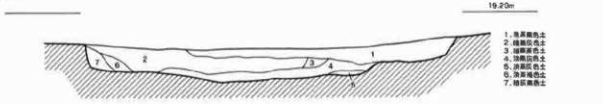


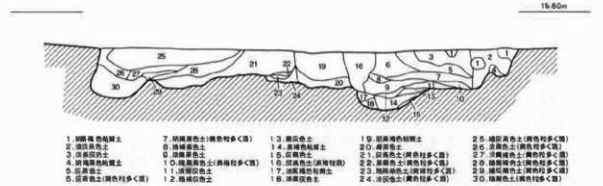
Fig.23 SF220道路状遺構土層図 (1/40)

SD025

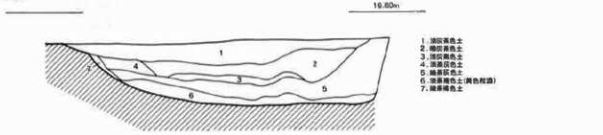
SX075



SX090



SX105



SX124集石部分

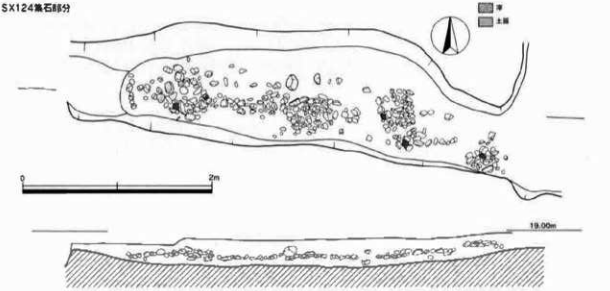


Fig.24 SD025、SX075、090、105、124遺構実測図 (1/40)

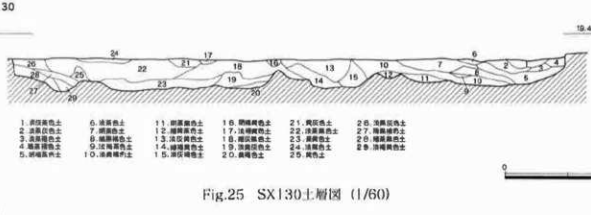


Fig.25　SX130土層図（1/60）

溝

SD025（Fig.24、Pla.29）

調査区北半分で検出したSF220 道路面中央を南北に走る溝である。北端のSX022との切り合い関係は不明である。また溝は調査区中央で西に曲がりSX124に切られる。北側で検出長約3.4m、幅約1.32m、深さ約0.39m、南側で検出長約9.3m、幅約0.82m、深さ約0.06～0.15mを測る。遺物は須恵器坏片、甕片、壺片、土師器坏片、小皿片、甕片を出土している。出土遺物から中世以降の遺構と考えられるが、SF220 道路状遺構に付帯する側溝の可能性や、道路状遺構の名残による地割りに関連する溝の可能性も考えられる。

SD080（付図、Pla.29）

調査区東側で検出したSX090を切る溝である。南端で調査区外へ延び、北端で西に曲がるが途切れる。検出南北長約27.1m、幅約0.64m、深さ約0.06m～0.16mを測る。遺物は須恵器甕片、土師器坏片、甕片、土鍋片を出土している。

溜まり状遺構

SX075（Fig.24、Pla.30）

調査区中央で東西に延びる遺構である。SF220を切り完掘時にSX124と繋がる。西側が溝状に、東側で幅が広がり溜井状になる。壙底は礫層で漏水によると考えられる遺構側面の抉れを確認している。東西検出長約10.7m、南北最大幅約3.9m、南北最小幅約0.9m、最大深さ約0.49mを測る。遺物は須恵器坏片、蓋片、甕片、土師器坏片、小皿片、瓦質土器擂鉢片、鉄滓を出土している。

SX124（Fig.24、Pla.30）

調査区中央でSF220 西側溝を切る東西に長い溝状の遺構である。遺構中央部で埋土に多量の礫と土器片、鉄滓を検出している。東側でSX075と合流しており、切り合い関係は不明である。遺物は須恵器坏片、甕片、壺片、土師器坏片、小皿片、甕片を出土している。

土取り遺構

SF220 東側溝を切るSX090、西側溝を切るSX130 を検出している。共に切り合い上、最終段階の側溝の一部分を切る。時期や性格については、側溝を大きく越えていない事や、壙底の状態が近似する事、出土遺物の時期幅が同様であること等から側溝埋没後（廃絶後）から近い時期に土取りを行った遺構と考えられる。

SX090（Fig.24、Pla.31）

調査区東南端で検出した不定形な遺構であり、SF220東側溝を切る。壙底の凹凸が激しく土採取を目的とした採掘抗跡と考えられる。壙底で完形の土師器坏を出土している。遺物は須恵器坏片、甕片、土師器坏片、皿片、椀片、蓋片、甕片を出土している。

SX130（Fig.25）

調査区中央、SF220 西側溝を切る不定形な遺構である。南北長約9.1m、東西長約2.9mを測る。SX090と同様で壙底の凹凸が激しく土採取を目的とした採掘抗跡と考えられる。

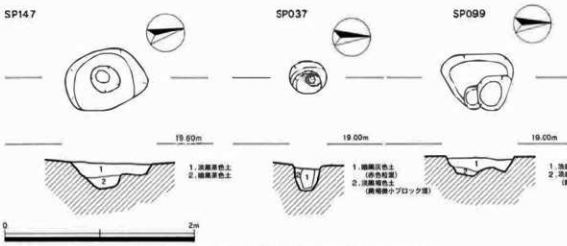


Fig.26　SP147、037、099遺構実測図（1/40）

溝状遺構

SX105（Fig.24）

調査区南端で検出した遺構で調査区外に延びると考えられる。検出南北長約3.41m、東西長約1.75m、最大深さ約0.71mを測り、東西断面はU字状を呈する。遺物は須恵器坏片、甕片、土師器坏片、小皿片、白磁片を出土している。また、出土遺物の殆どが小片や微細片である。

ピット

SP147（Fig.26）

調査区西南端で淡茶褐色土に切り込む形で検出した楕円形のピットである。長軸約0.86m、短軸約0.63m、最大深さ約0.27mを測る。柱痕は検出していないが、中央に直径0.37mのピットを検出している。埋土は淡黒茶色土と暗黒茶色土から成る。遺物は須恵器甕片、土師器坏片、蓋片、甕片を出土している。

SP037（Fig.26）

調査区北側で整地層である淡黒灰色土に切り込む形で検出したほぼ円形のピットである。長軸約0.38m、短軸約0.34m、最大深さ約0.29mを測る。西側がテラス状になり、中央で直径0.18mの赤色粒を含む暗黒灰色土の柱痕を検出している。遺物は土師器（墨書）坏片、甕片を出土している。

SP099（Fig.26）

調査区中央のSK040東側で検出した不定形なピットである。長軸約0.76m、短軸約0.60m、深さ約0.19mを測る。他のピットとの切り合い関係は不明である。埋土は黄灰色土を含む淡黒灰色土である。遺物は土師器坏片、皿片、蓋片である。

(3) 出土遺物（法量は表に掲載）

遺構Ⅱ面

SD020（Fig.27、Pla.32）

須恵器

坏（1）体部が直線的に開く坏で、高台が底部と体部の境に外に踏ん張る形で付く。体部内外面ヨコナデ、底部内面を不定方向のナデ、底部外面は回転ヘラ切り痕が残る。焼成、還元共に良好である。

瓦質土器

擂鉢（2）口縁部片で内面にヨコナデ後、2条の擂り目が残存する。外面は淡灰色、内面は淡灰黄色を呈し、外面の調整は磨耗により不明である。

SD005（Fig.27、Pla.32）

土師器

小皿（3・4）共に底部回転糸切りの小皿片である。体部内外面をヨコナデ調整する。胎土はきめ細かく、焼成良好である。

磁器

白磁碗（5）底部外面まで施釉するが、外底内部が部分的に露胎になる。小さい貫入が入り、素地はき

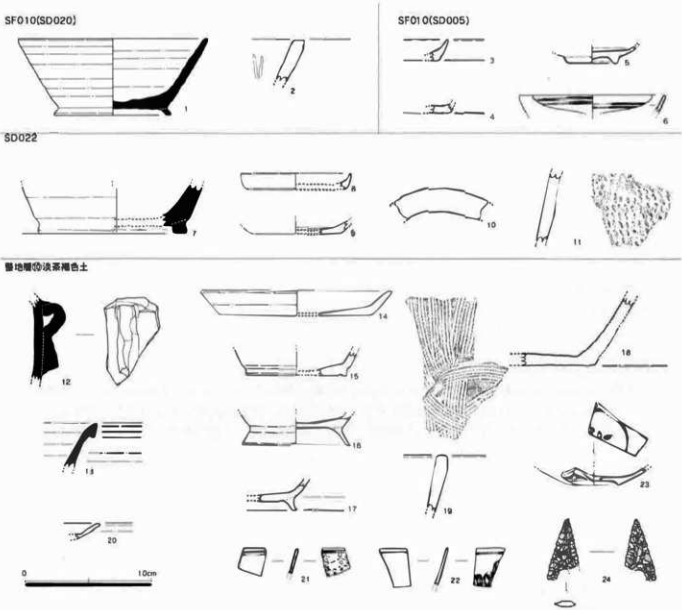


Fig.27　SF010（SD005、020）、SD022、整地層　出土遺物実測図（1/3）（石鏃1/2）

め細かい。

染付碗（6）体部内外面に文様を施し、釉は薄い緑灰色で細かい気泡が入る。素地は白灰色できめ細かい。

SD022（Fig.27、Pla.32）

須恵器

甕（7）底部片で高台が付き、体部外面は青灰色でヨコナデ、内面は灰色で不定方向のナデである。焼成、還元共に良好。

土師器

小皿（8・9）共に回転糸切りの小皿片である。8は淡白橙色を呈し内外面ヨコナデ、9は淡茶色を呈し体部内外面ヨコナデ、内底は不定方向のナデである。共に焼成やや良好である。

瓦

丸瓦（10）外面にミガキに近い工具痕、内面は細かい布目痕が残る。

縄文土器（11）押型文土器片で外面に楕円文を斜方向に施す。内面はナデ。

整地層⑩淡茶褐色土（Fig.27、Pla.32）

須恵器

壺（12・13）12は肩部片で耳一対く。内外面共に暗灰青色を呈し接合時のナデが残る。2mm以下の小砂粒を含み、焼成、還元良好である。13は口縁片で調整はヨコナデ、焼成、還元良好である。

土師器

皿（14）体部内外面ヨコナデ、底部は回転ヘラ切り後、ナデを施す。

椀（15～17）15は削り出し高台の坏片で赤茶色を呈し、内面はヨコナデ、底部から体部にかけて回転ヘラ削り痕が残る。16・17は椀片で長く外に張る高台を張り付ける。

瓦質土器

擂鉢（18）内面に擂り目が残る。

鉢（19）胎土はよく精選されている。

磁器

白磁皿（20）口禿の白磁皿片である。

染付碗（21～23）内外面に文様を施す。

石器

石鏃（24）黒曜石の石鏃で両脚部が一部欠損する。重さ1.6ｇである。

遺構Ⅲ面

掘立柱建物

SB200（Fig.28）

土師器

甕（25）bピットから出土した口縁部片である。口縁部ヨコナデ、外面頸部下にハケ目が残る。

SB210（Fig.28、Pla.32）

土師器

坏（26・27）26はfピット出土の坏片で底部処理は回転ヘラ切り、体部中位から若干内湾する。27はcピット出土の坏片で内・外面共にヨコナデ調整。

SB215（Fig.28）

土師器

坏（28）底部片で内面ヨコナデ、体部はヘラ削り、底部処理は磨耗のため不明。

竪穴住居

SI085（Fig.28、29、Pla.32、33）

須恵器

坏（29）底部は回転ヘラ切り後、ナデを施す。内面に粘土紐痕跡、板状圧痕が残る。

甕（30）外面はハケ目後、平行叩き、内面は同心円状、平行の当て具痕が残る。

土師器

蓋（31～33）天井部回転ヘラ削りで口縁端部を断面三角形に仕上げる。33はつまみ痕跡有り。

坏（34～42）34～40の底部は回転ヘラ削りで体部と底部の屈曲部に面取りを施す。体部は内湾気味に開き、口縁部で若干内湾する。41は底部を回転ヘラ切り後、ナデ調整し、体部は直線的に開き、外面に稜が多く残る。42は底部回転ヘラ切りで体部は直線的に開く。

皿（43～45）43は底部回転ヘラ削りで体部と底部の屈曲部に面取りを施し、体部は内湾気味である。44、45は底部回転ヘラ切りで体部が直線的に開く。

椀（46～48）削り出し高台の椀である。46は体部が斗上方向に開き底部回転ヘラ削り、体部外面中位から下を工具によ削りに近いナデを施す。高台外縁は深く削るが内側は浅く削る。胎土は精選されており、内外面共に淡橙色を呈する。47は体部内外面をヨコナデ、内底を不定方向のナデを施す。体部中位から口縁部にかけて若干開き気味の器形を成し、胎土は精選されている。48は底部片で内面に成形時に施されたと考えられる線刻状の文様が残る。

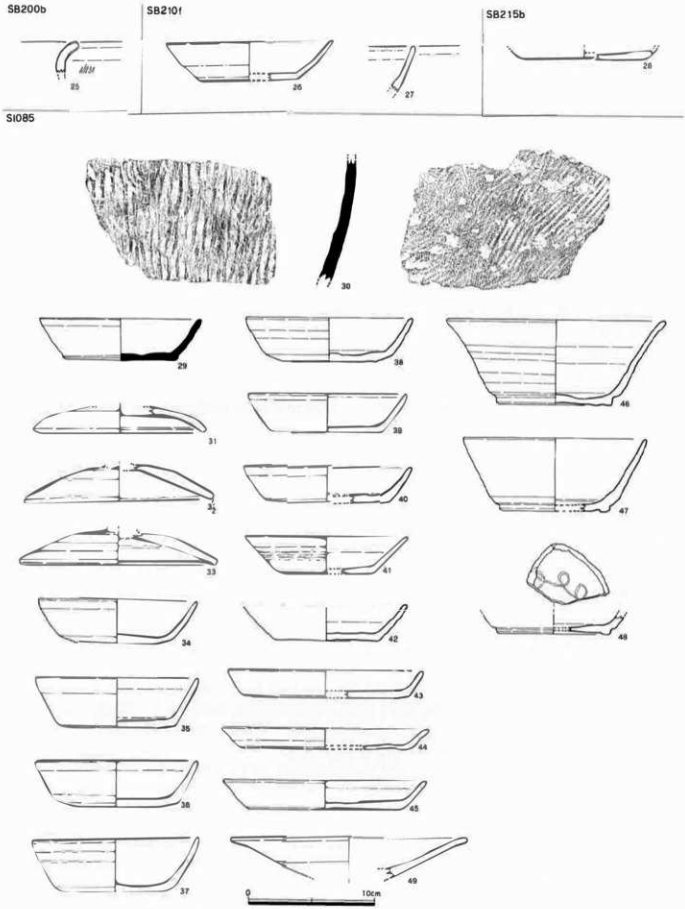


Fig.28 SB200、210、215、SI085 出土遺物実測図 (1/3)

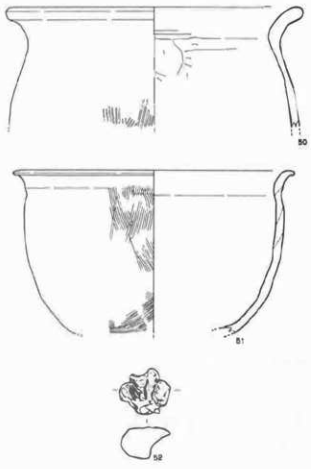


Fig.29　SI085　出土遺物実測図（1/3）

高坏（49）坏部片で蓋の可能性も考えられる。
甕（50・51）50は体部外面ハケ目、内面ヘラ削り、口縁部はヨコナデ調整。51は浅い甕で体部外面ハケ目、内面は工具による削りに近いナデを施す。頸部から体部にかけて土器断面に粘土紐痕跡が残る。鉢の可能性も考えられる。

土製品

粘土塊（52）淡橙色を呈し、藁のような径1.5mm程の植物痕跡が残る。

SI085貼床下（Fig.30）

須恵器

坏（53）口縁部が若干内湾する。調整はヨコナデ、青灰色を呈し焼成、還元良好である。

土師器

蓋（54）内外面ヨコナデ、天井残存部に回転ヘラ削りが残る。

坏（55）体部が外に開く器形を成し、外面にはヨコナデ時の疵が多く残存する。淡橙色で焼成良好。

SI095（Fig.31、Pla.34）

土師器

蓋（56）天井部回転ヘラ削り、口縁内外面ヨコナデ、口縁端部を断面三角形に仕上げる。

皿（57～59）57は外面に赤色顔料を塗布し、口縁端部に面取りを施す。底部外面は工具によるナデ、若しくは手持ちヘラ削りと考えられる。58は底部は回転ヘラ削り後、ナデを施す。内底は工具によるナデが残る。胎土はよく精選されている。59の底部処理は手持ちヘラ削りである。

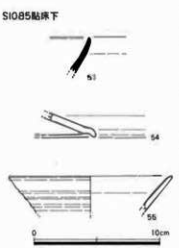


Fig.30　SI085貼床下
出土遺物実測図（1/3）

椀（60）淡橙色を呈し、高台を貼り付ける。

甕（61～64）61～63は口縁部が最大径を測り、外面は縦方向のハケ目、内面はヘラ削り、61のみ外面底部付近に削り痕跡が残る。64は胴部が最大径を測ると考えられ、胎土は粗く口縁部に指頭痕が残る。甑（65）ほぼ完形の把手付きの甑で外面を縦方向のハケ目、内面を縦方向のヘラ削りで調整する。外面に黒斑が残り、焼成良好である。

金属製品

耳環（66）金銅製と考えられ、緑青が激しく腐食が進行している。

SI095貼床下（Fig.31、Pla.34）

土師器

坏（67）内外面ヨコナデ、胎土はよく精選されており、角閃石を含む。

SI095住居内土壙（Fig.31、Pla.34）

土師器（68～71）

坏（68）体部中位に屈曲をもち、底部は工具による削りに近いナデを施す。

胎土に角閃石を含む。
皿（69）底部は手持ちヘラ削りである。胎土に角閃石を含む。
鉢（70）はラッパ状に開き、口縁部ヨコナデ、体部内外面は工具によるナデ、外面にハケ目が残る。胎土は粗く角閃石を含む。
甕（71）は甕口縁部片で内外面ヨコナデ、外面の一部にハケ目が残る。焼成不良である。
SI110（Fig.32、Pla.34）
土師器
皿（72～74）72の底部は回転ヘラ削り、底部と体部の境に面取りを施す。73は底部を回転ヘラ切り、74は磨耗のため調整は不明。何れも胎土はよく精選されている。
甕（75・76）何れも磨耗のため調整は不明であるが、76の体部内面にヘラ削り痕が残る。
SI110床面（Fig.32、Pla.35）
土師器
坏（77）完形の坏で底部は回転ヘラ削りで底部外面に墨書の痕跡が残る。文字は最低二文字が考えられ、上の文字が「天」「大」「夫」「左」等が推定され、下の文字が「善」「竜」等の文字が推定されるが判読、解釈には至っていない。
椀（78）削り出し高台の椀で底部外面には墨書の痕跡が残る。文字は最低二文字以上が考えられ、上の文字が判読不能で、下の文字が「女」「長」の文字が推定される。
SI110貼床下（Fig.32、Pla.35）
土師器
坏（79）口縁端部の器肉が体部に比べ極端に薄くなる。内外面共にヨコナデ調整である。
SI110屋内土壙（Fig.32、Pla.35）
土師器
皿（80）暗橙色を呈し、胎土はよく精選されている。内面ヨコナデ、外面は磨耗により不明。
甕（81）内面に斜方向のヘラ削りを施す。口縁部内外面はヨコナデ。
SI115（Fig.33、Pla.35）
須恵器
坏（82）内外面ヨコナデ、暗灰色を呈し焼成、還元やや良好である。
土師器
坏（83・84）83は底部は回転ヘラ削り、全体的に器肉が薄く胎土はよく精選されており、内底に線刻で「米」の文字を描く。84は底部と体部最下半に回転ヘラ削りを施し、体部が若干内湾する器形を成す。胎土はよく精選されている。
皿（85）底部を回転ヘラ削り、口縁端部を若干外方向につまみ出す。
鉢（86）は鉢片と考えられ、体部外面上半をハケ目、下半をヘラ削り、内面は工具による削りに近いナデを施す。口縁内外面はヨコナデ。
SI115カマド（Fig.33、Pla.35）
須恵器
坏（87）内外面ヨコナデによる稜が多く残り、外面には自然釉が付着する。焼成、還元良好。
土師器
坏（88）調整は磨耗により不明。体部下半に強い稜が2条残る。

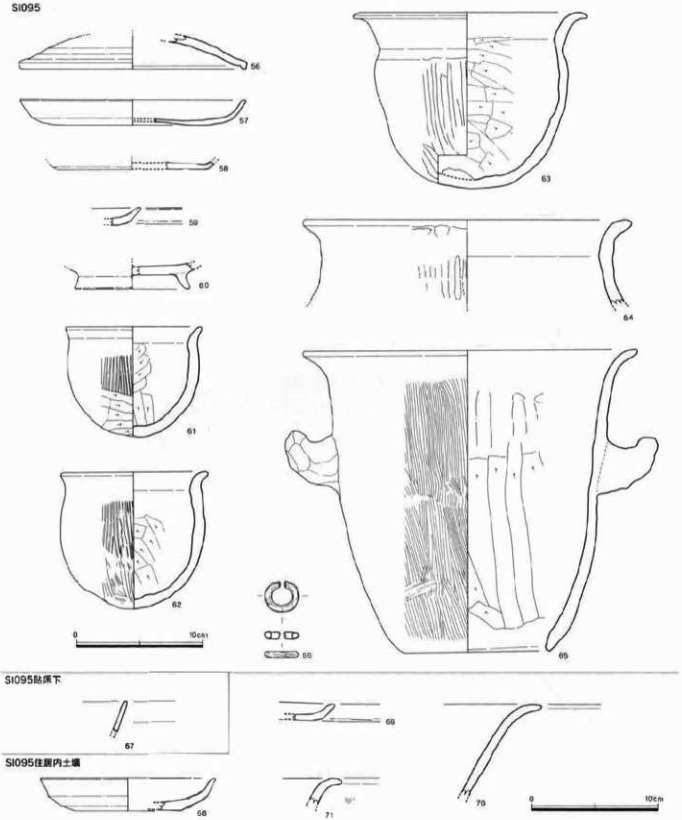


Fig.31　SI095、貼床下、住居内土壙　出土遺物実測図（1/3）

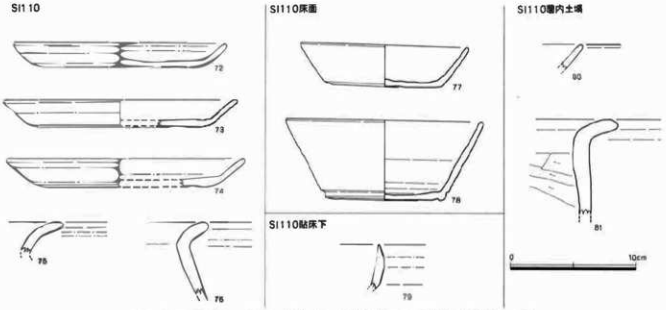


Fig.32　SI110、床面、貼床下、屋内土壙　出土遺物実測図（1/3）

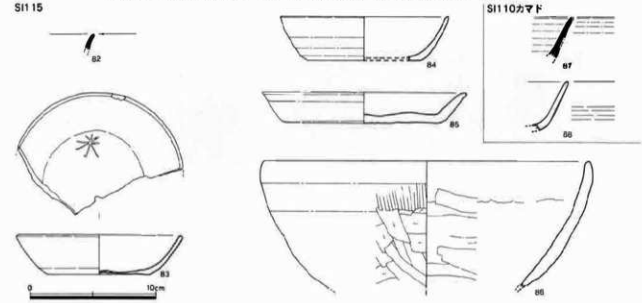


Fig.33　SI115、カマド　出土遺物実測図（1/3）

竪穴

SX040（Fig.34、Pla.35）

須恵器

壷（89）口縁部片で内外面共にヨコナデ、暗灰茶色を呈し、焼成、還元良好である。

土師器

坏（90）底部回転ヘラ切り、体部は直線的に開き、中位に穿孔が確認できる。

椀（91）細い高台が張り付き、内外底はヨコナデ、胎土に角閃石が含まれる。

SX100（Fig.35、Pla.35、36）

壷型土器（92）弥生前期の壷底部片と考えられる。外底に葉脈が確認できるが人為的に描かれた可能性がある。

須恵器

蓋（93）内外面共にヨコナデ、明灰色を呈し、焼成、還元良好である。

土師器

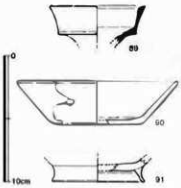


Fig.34　SX040出土遺物実測図（1/3）

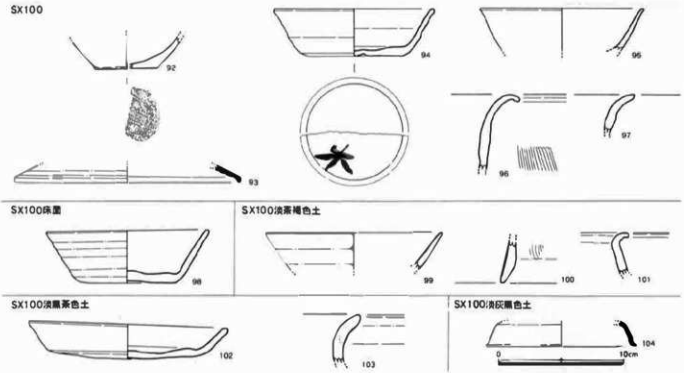


Fig.35　SX100　床面　淡茶褐色土　淡黒茶色土　淡灰黒色土　出土遺物実測図（1/3）

坏（94）底部は回転ヘラ削り、体部と底部の境に面取りを施す。外底に墨書が残り「本」の文字が確認できる。

椀（95）口縁部が外方向に若干開く。調整は磨耗のため不明。

甕（96・97）96は体部外面ハケ目、内面はナデを施す。97は頸部下に縦方向のナデ、内面に工具によるナデ、口縁部内外面はヨコナデ調整である。

SX100床面（Fig.35、Pla.36）

土師器

坏（98）底部回転ヘラ削り、体部が直線的に開く。口唇部に面取りを施す。

SX100淡茶褐色土（Fig.35、Pla.36）

土師器

坏（99）淡橙色を呈し、内外面共にヨコナデ調整。

甑（100）裾部片で端部はヨコナデ、外面にハケ目が残る。

甕（101）内面はヨコナデ、外面は磨耗のため調整不明である。

SX100淡黒茶色土（Fig.35、Pla.36）

土師器

坏（102）底部から体部下半に回転ヘラ削り、内外面はヨコナデ調整である。

甕（103）口縁片で内外面共にヨコナデ、断面に粘土接合痕が残る。

SX100淡灰黒色土（Fig.35、Pla.36）

須恵器

壺蓋（104）灰青色を呈し、焼成、還元不良である。

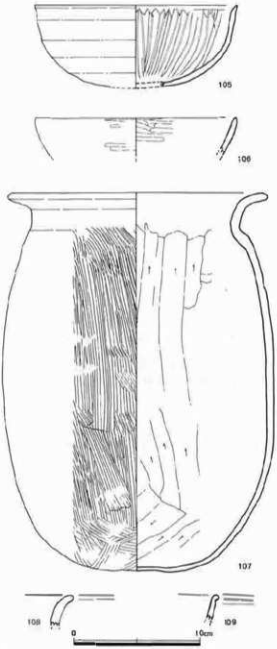
SX100カマド（Fig.36、Pla.36）

土師器

椀（105）半円球状の坏ないしは椀片で、口唇部の内側に面取りを施す。外面は工具によるナデの痕跡が残り、赤色顔料を口唇部内傷まで塗布する。内面は縦方向に暗文が施され、口縁部付近で山形の暗文が巡る。胎土はよく精選されている。

坏（106）暗茶褐色を呈し、内外面に横方向のミガキを施す。

甕（107～109）107はほぼ完形の長胴甕で体部外面は縦方向のハケ目、底部付近で不定方向のハケ目、



内面は縦方向のヘラ削り、底部付近で斜方向のヘラ削りを施す。口縁部内外面はヨコナデ調整。108は口縁部片で調整はヨコナデ。109は甕ないし鉢片で内外面ヨコナデ、外面に工具による沈線が残る。

土壙

SK045（Fig.37、Pla.36）

須恵器

坏（111）内外面共にヨコナデ、内面の一部に不定方向の粗いナデが残る。

土師器

坏（110）内外面共にヨコナデ、外面下半にヨコナデ時の強い稜が残る。淡黄橙色を呈する。

SK064（Fig.37、Pla.36）

土師器

坏（112・113）112は底部回転ヘラ切りで体部内外面ヨコナデ。113は底部に工具によるナデが残り、体部内外面ヨコナデである。

SK125（Fig.37）

土師器

蓋（115）内外面共にヨコナデ、淡橙色を呈する。

坏（114）底部片で回転ヘラ切りである。内底はヨコナデ後、ナデを施す。

SK150（Fig.37、Pla.36）

土師器

椀（116）磨耗のため調整は不明であるが、高台接合時のナデが一部残る。

土鍋（117）口縁端部を玉縁状に仕上げる。

土壙墓

ST120（Fig.37、Pla.36）

金属製品

刀子（118）刀身部と考えられ、切っ先は欠損しているが、中子が若干残存する。

Fig.36　SX100カマド　出土遺物実測図（1/3）

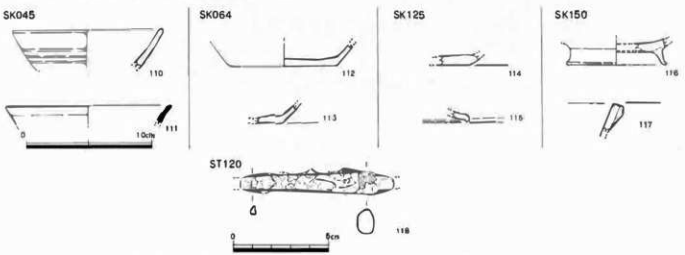


Fig.37　SK045、064、125、150、ST120　出土遺物実測図（1/3）

道路状遺構

SF220西側側溝

SD035（Fig.38、Pla.36、37）

須恵器

坏（119）内外面共にヨコナデ、淡灰色を呈し焼成、還元良好である。

壺（120）肩部片で外面ヨコナデ、内面屈曲部下が当て具後、ナデ、屈曲部上半がヨコナデ調整。淡灰色を呈し、焼成、還元良好である。

土師器

蓋（121）口縁端部を断面三角形に仕上げる。天井部ヘラ削り、内面はヨコナデ調整、外面は磨耗のため不明。

坏（122）底部を回転ヘラ切り後、ナデを施し、内面はヨコナデ。

椀（123）削り出し高台の椀で体部外面にヘラ記号が残る。淡橙色で内面に煤が付着する。

甕（124）鍔部片で外面は磨耗のため調整不明。内面は上半部がヘラ削り、下半部がヨコナデを施す。

黒色土器

椀（125）A類の椀片で内面は不定方向のナデ、外底はヨコナデ、高台部分に接合時のナデが残る。

石製品

紡錘車（126）滑石製の紡錘車でほぼ完形である。中央に直径約1.0cmの孔を穿つ。重さ約60.1gである。

SD055（Fig.38、Pla.37）

土師器

坏（127）体部中位で屈曲し、口縁端部で若干外反する。内面はヨコナデ、外面はナデ調整である。

SD035・055（Fig.38、Pla.37）

須恵器

蓋（128）天井部は回転ヘラ削り、内面はヨコナデ後、不定方向のナデを施す。茶色を呈し、焼成、還元良好である。

坏（129～132）129は淡灰色を呈し、焼成、還元不良である。断面に粘土紐痕跡が残る。130は底部回転ヘラ削り、体部内外面ヨコナデ、内底は不定方向のナデ調整である。口縁部を若干外反させる。131は坏ないしは皿片で底部を回転ヘラ削り後、丁寧なナデを施す。体部内外面ヨコナデ。青灰色を呈し、焼成、還元良好である。132は断面逆台形の高台を貼り付ける。灰白色を呈し、焼成、還元良好である。

皿（133）底部は回転ヘラ切り、体部を若干外反させる。灰茶色で還元不良である。

甕（134～138）134、135は口縁片で内面に自然釉がかかる。136は体部外面に斜方向の平行タタキ、内面に同心円状の当て具痕が残る。137は内外面ヨコナデ。138は胴部片で外面に小さい格子目タタキ、内面に格子状に当て具痕が残る。

土師器

蓋（139）ツマミ片で擬宝珠のツマミが取り付く。

坏（140～144）140は底部回転ヘラ削り、胎土はよく精選されている。141は底部回転ヘラ削り、体部が開き口縁部で若干外反する。142は暗茶色を呈し、胎土はよく精選されている。調整は磨耗のため不明。143は底部片で底部回転ヘラ削り、×印のヘラ記号が残る。144は外面に赤色顔料を塗布する。

皿（145・146）145は底部回転ヘラ切り、内外面ヨコナデである。146は調整は磨耗のため不明。

椀（147）削り出し高台椀で胎土は粗く3mm程度の砂粒を含み、焼成はやや不良である。

高坏（148）脚部外面と坏部内面に横方向のミガキを施す。

鉢（149）口縁端部を内湾させる。外面はヨコナデ後、体部にハケ目を施し、内面は工具によるナデが残る。

甕（150）外面は縦方向のハケ目、内面は横方向の削りを施す。

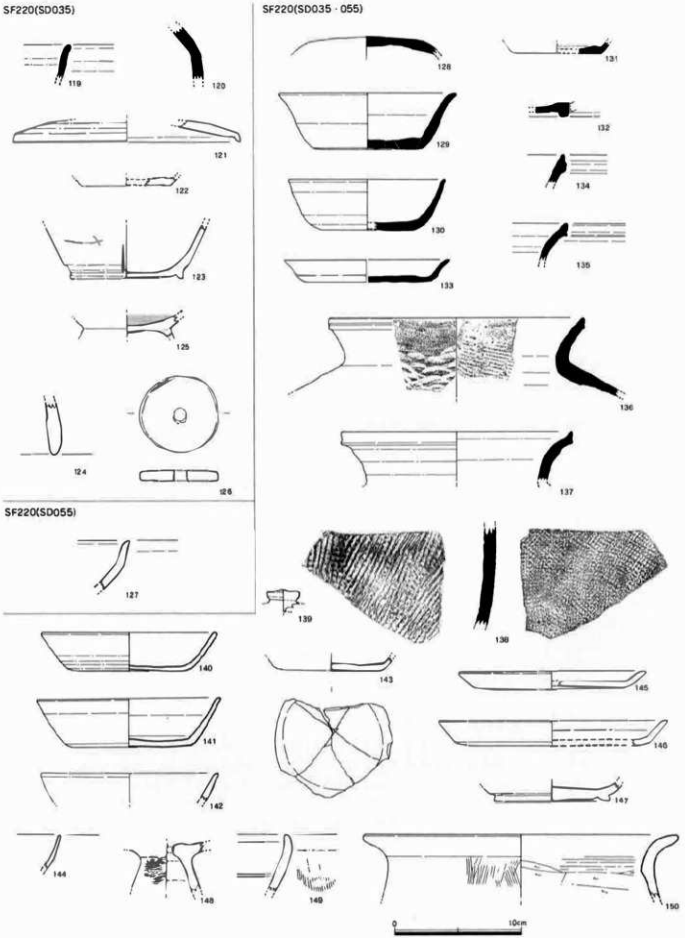


Fig.38 SF220 (SD035、055) 出土遺物実測図 (1/3)

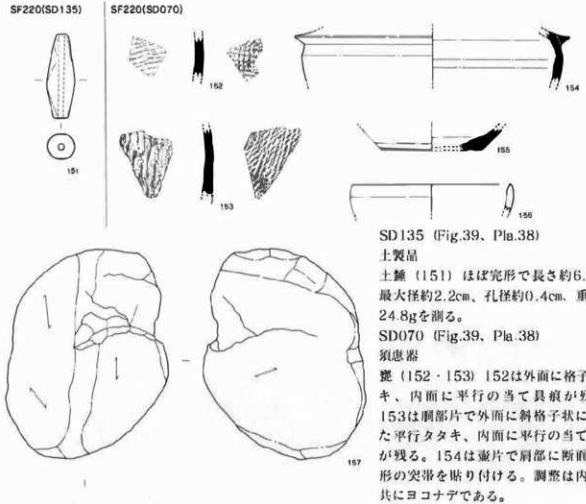


Fig.39　SF220（SD135、070）　出土遺物実測図（1/3）

SD135（Fig.39、Pla.38）

土製品

土錘（151）ほぼ完形で長さ約6.6cm、最大径約2.2cm、孔径約0.4cm、重さ約24.8gを測る。

SD070（Fig.39、Pla.38）

須恵器

甕（152・153）152は外面に格子タタキ、内面に平行の当て具痕が残る。153は胴部片で外面に斜格子状に施した平行タタキ、内面に平行の当て具痕が残る。154は壺片で肩部に断面三角形の突帯を貼り付ける。調整は内外面共にヨコナデである。

壺（155）底部片で、底部を回転ヘラケズリ、内面は不定方向のナデを施す。

土師器

坏（156）内面はヨコナデ、外面は磨耗のため不明。胎土に角閃石が入り、焼成不良である。

石製品

砥石（157）安山岩の砥石と考えられ、3面とも使用されたと考えられる。

SF220東側側溝

SD05● (Fig.40、Pla.38)

須恵器

蓋（158）内外面共にヨコナデ、口縁端部を断面三角形に仕上げる。内面から口唇部外側にかけて重ね焼き痕跡が残る。

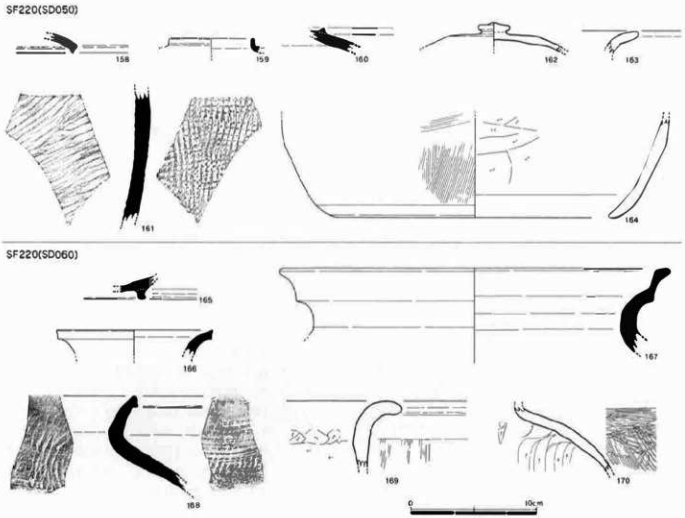
壺（159～160）159は口縁部片で内外面共にヨコナデ、青灰色で焼成、還元良好である。160は外面に断面三角形の突帯を貼り付ける。調整は内外面共にヨコナデ。

甕（161）胴部片で外面に格子目タタキ、内面に平行の当て具が斜方向に施される。

土師器

蓋（162）天井部に擬宝珠のツマミを貼り付ける。外面は回転ヘラ削り、内面は磨耗のため不明である。

甕（163）内外面共にヨコナデ。一部に煤が付着する。



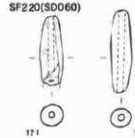


Fig.40 SF220（SD050、060）

甕（164）複内外面ヨコナデ、体部外面ハケ目、内面は横ないしは斜方向の削りを施す。外面に煤が付着する。

SD060（Fig.40、Pla.38、39）

須恵器

坏（165）底部～体部の境に断面台形に近い高台を貼り付ける。内面はヨコナデ、灰色を呈する。

壺（166・167）166は内面に自然釉がかかり、調整は内外面ヨコナデである。167は口縁部が二重口縁で屈曲して立ち上がる。内外面に自然釉がかかり、調整はヨコナデ。

甕（168）口縁端部を断面三角形に仕上げ、外面は平行タタキ、内面に同心円状の当て具痕が残る。

土師器

甕（169）口縁部下内面にヘラ削り、外面に縦方向のハケ目を施す。

壺（170）外面に細かいミガキを施し、内面は縦方向の削りを施す。外面に黒斑が残る。

土製品

土錘（171・172）172は完形で共に長軸に平行する孔が貫通する。

路面（帯状硬化面、突き固め部分）　**遺物**（Fig.41、Pla.39）

須恵器

坏（173・174）173は高台が欠損する。174は底部回転ヘラ切り。明茶灰色を呈し焼成、還元良好。

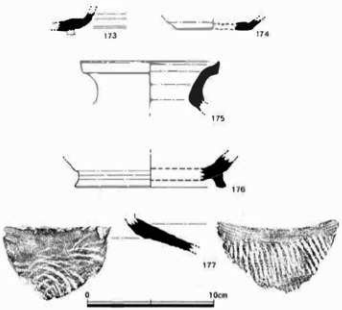


Fig.41　SF220路面（帯状硬化面・突き固め部）覆土出土遺物実測図（1/3）

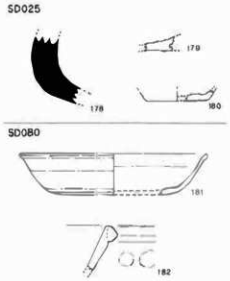


Fig.42　SD025、080　出土遺物実測図（1/3）

壷×甕（175～177）壷ないしは甕片で調整はヨコナデ、淡灰茶色を呈し焼成、還元良好である。176は壷底部片で底部と体部の屈曲部に高台を貼り付ける。177は外面に平行タタキ、内面に同心円状の当て具痕が残る。

溝

SD025（Fig.42、Pla.39）

須恵器

甕（178）頸部片で内外面共にヨコナデ、内面下半に当て具痕が残る。

土師器

坏（179）底部は回転糸切り、割れ断面に糸の巻入痕が残る。淡橙色を呈する。内面はヨコナデ。

小皿（180）底部は回転糸切り、調整はヨコナデ。淡黄色を呈する。

SD080（Fig.42、Pla.39）

土師器

坏（181）底部回転ヘラ削り、体部内外面ヨコナデ。体部は若干内湾するが、口縁部で若干外反する。

土鍋（182）口縁端部を玉縁状に仕上げる。体部に指頭痕が残る。

溜まり状遺構

SX075（Fig.43、Pla.39）

須恵器

壷（183）底部片で底部はナデを施し、体部外面は工具によるナデ、内面は粗い不定方向のナデを施す。

大甕（184）外面に波状文を施す。淡茶赤色を呈する。

土師器

坏（185）底部は回転糸切り、体部内外面ヨコナデ。淡黄茶色を呈する。

小皿（186）底部は回転糸切り、体部内外面ヨコナデ。淡黄橙色を呈する。

瓦質土器

擂鉢（187）外面ハケ目、内面はハケ目後、残存部分で3条の擂り目が確認できる。

SX124（Fig.43、Pla.40）

須恵器

壷（188・189）188は頸部片で内面ヨコナデ、口縁部との屈曲部に指頭痕が残り、外面はヨコナデ、薄く自然釉がかかる。189は肩部片で断面逆台形の突帯を貼り付ける。内外面共にヨコナデ。青灰色で焼成、還元良好である。

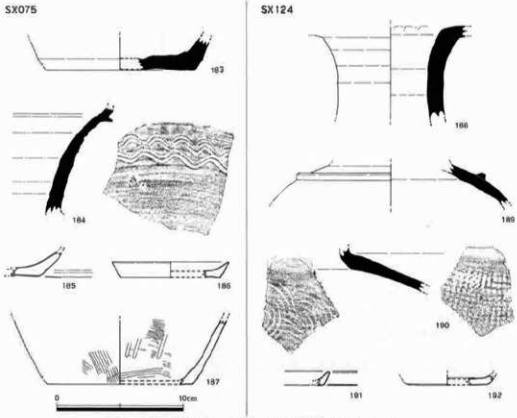


Fig.43　SX075、124　出土遺物実測図（1/3）

甕（190）外面に格子タタキ、内面に同心円状の当て具後、ヨコナデを施す。

土師器

小皿（191・192）共に底部回転糸切り、体部内外面ヨコナデを施す。

土取り遺構

SX090（Fig.44、Pla.40）

須恵器

坏（193・194）193は内外面ヨコナデ。194は高台を貼り付け、内外面ヨコナデ。暗黄茶色を呈する。

甕（195～198）195は外面に格子目タタキ、内面に同心円状の当て具痕が残る。196は底部片で外面にタタキ痕、内面に当て具痕が残る。淡青灰色を呈する。197は甕ないしは壷片で外面に耳状の把手が付くと考えられる。内外面に自然釉がかかり、明灰茶色を呈する。198は外面頸部下にカキ目、内面に当て具痕が残る。口縁部内外面はヨコナデ。淡黄白色を呈し還元不良である。

土師器

蓋（199）擬宝珠のツマミが付く。内面に墨痕着しくは煤らしきものが付着する。

坏（201～209）201、202は底部回転ヘラ削りで体部内外面ヨコナデ。底部と体部の境に面取りを施す。201は体部が直線的で202は若干内湾する。203、204は底部回転ヘラ削り後、ナデを施す。203は体部が若干内湾し、204は直線的に開き、底部が丸みを帯びる。205～207は底部回転ヘラ切り、体部は若干内湾する。208は底部回転ヘラ切りで体部が直線的に開く。209は底部回転ヘラ削りで底部と体部の境に面取りを施す。口縁部で若干外反する。208、209は皿片である。

椀（210）体部が直線的に開き、体部と底部の境に高台が取り付く。体部外面下半から底部外面にかけて回転ヘラ削りを施す。内面はヨコナデ。底部外面に墨書が残り「上妻大」の文字が確認できる。

甕（211）口縁径より胴部径が大きいタイプと考えられ、体部外面縦方向のハケ目、内面は横方向のヘラ削りを施す。

SX130（Fig.45、Pla.41）

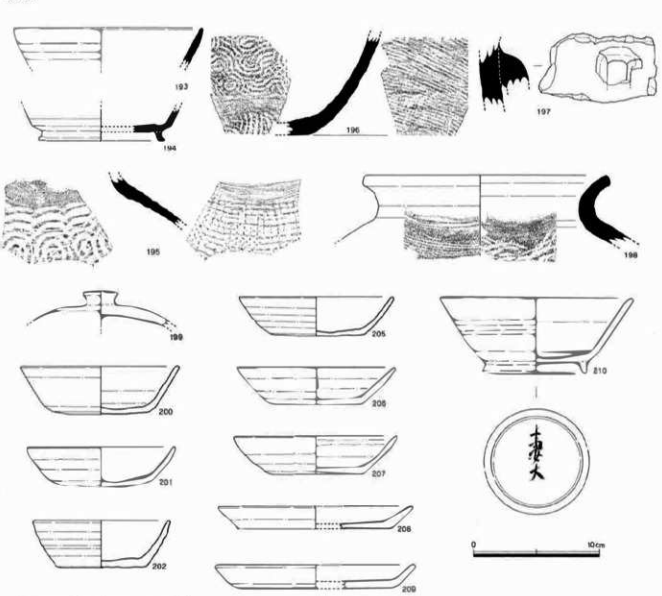


Fig.44　SX090　出土遺物実測図（1/3）

須恵器

蓋（212）内外面ヨコナデ、還元不良で白灰色を呈する。

壺（213・214）213は内外面ヨコナデ、還元不良で灰茶色～暗赤茶色を呈する。214は2箇所に断面三角形の突帯を貼り付ける。肩部突帯の上下に径3㎜～4㎜の穿孔が確認できる。外面に薄く自然釉がかかる。

甕（215）口縁片で内外面ヨコナデ、自然釉が全体に薄くかかる。

土師器

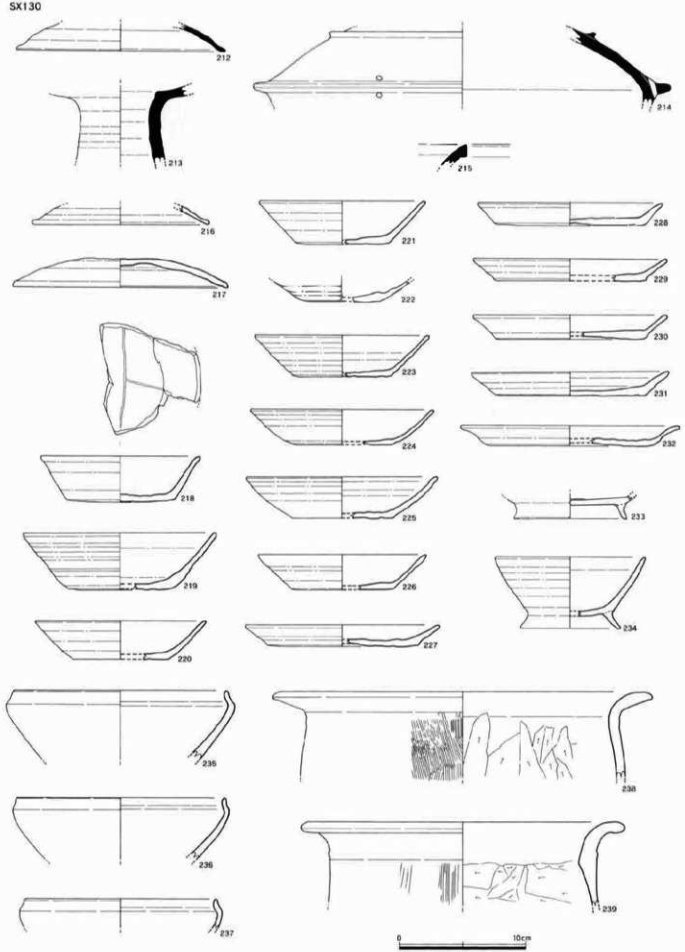


Fig.45 SX130① 出土遺物実測図 (1/3)

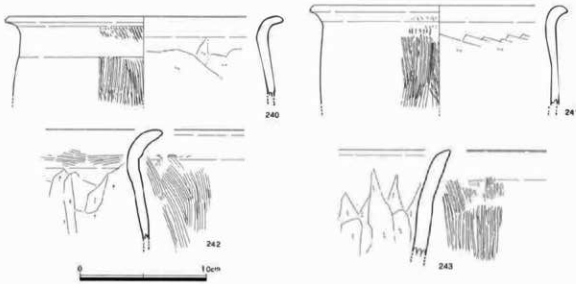


Fig.46 SX130② 出土遺物実測図 (1/3)

蓋 (216・217) 216は内外面ヨコナデ、暗橙色を呈し、焼成良好である。217は天井部回転ヘラ削り、端部を若干摘み出す。淡黄茶色で焼成良好である。

坏 (218～226) 218は底部は回転ヘラ削り、体部は直線的に開き口縁部で若干外反する。内底にヘラ記号と考えられる沈線が卜状に描かれる。219、220は底部回転ヘラ削りを施す。219は体部外面にヨコナデ時の稜が強く残る。220は口縁部が若干外反する。221、222は底部回転ヘラ削り後、ナデを施し体部は直線的に開く。223～225は底部回転ヘラ削り、体部外面にヨコナデ時の稜が強く残る。226は口縁端部が丸みを帯びる。底部切り離しは磨耗のため不明。

皿 (227～232) 227は底部回転ヘラ削り、体部が直線的に開く。228、229は底部回転ヘラ削り後、ナデを施す。228は口縁部を若干外反させる。230～232は底部回転ヘラ切り。230、231は体部が直線的に開き、232は体部を大きく外反させる。

椀 (233・234) 233は底部回転ヘラ切りで細い高台を貼り付ける。234は底部と体部の境に外に張り出す高台を貼り付ける。体部～口縁部ヨコナデ時の稜が残る。内・外面ともにヨコナデ。

鉢 (235～237) 何れも口縁部が内側に屈曲するタイプである。調整は内外面ヨコナデ。

甕 (238～243) 何れも外面にハケ目、内面ヘラ削りを施し、口縁径と胴部径がほぼ同じか胴部径が大きくなるタイプである。238と242は胎土に角閃石を含む。243は無頸の甕ないしは鉢片で外面に縦方向のハケ目、内面に縦方向の削りを施す。

溝状遺構

SX105 (Fig.47、Pla.42)

土師器

小皿 (244・245) 244は外面をヨコナデ、内面は磨耗のため不明。245は底部片で底部は回転糸切り。

ピット

SP147 (Fig.47)

土師器

蓋 (246) 口縁部で屈曲し端部を断面三角形に仕上げる。淡橙色を呈し、焼成良好である。

坏 (247) 直線的に開く体部で内外面ヨコナデ。淡橙色を呈し、焼成良好である。

SP037 (Fig.47)

坏 (248) 坏片で体部が直線的に開き、内外面ヨコナデ調整。

SP099 (Fig.47、Pla.42)

土師器

坏 (249・250) 249は内面ヨコナデ、外面は磨耗のため不明。250は底部回転ヘラ切り、外面には工具

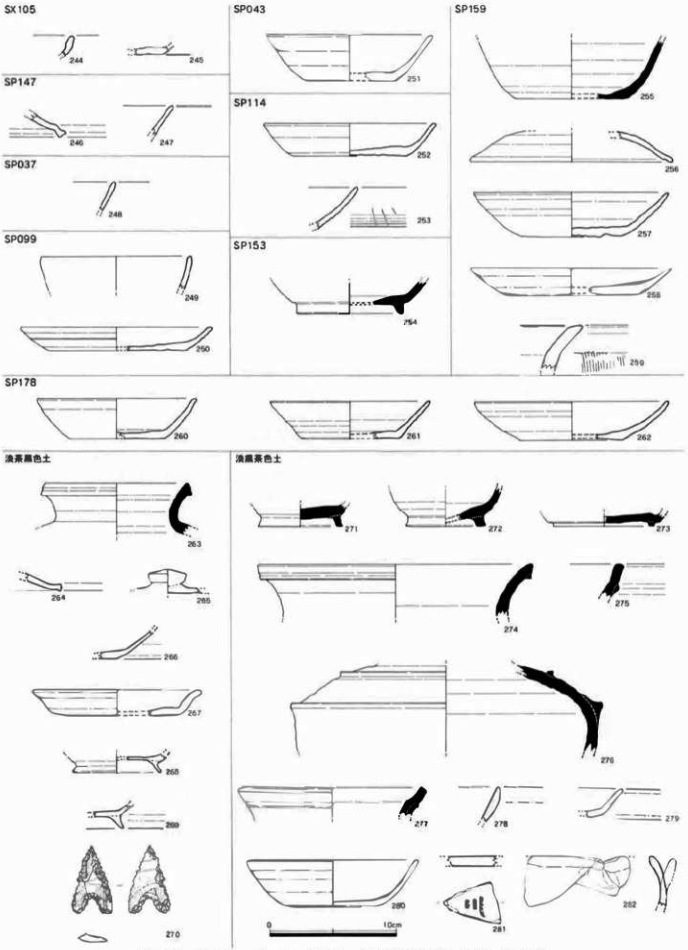


Fig.47　SX105、ピット、その他　出土遺物実測図（1/3）石器1/2

によるナデが残り、体部中位に工具痕である沈線が巡る。内面はヨコナデ。
SP043 (Fig.47)
土師器
坏 (251) 底部回転ヘラ切り、体部外面中位から下はヘラ削りを施す。内面はヨコナデ。
SP114 (Fig.47、Pla.42)
土師器
坏 (252・253) 252は底部回転ヘラ切り、内外面ヨコナデ。胎土はよく精選されている。253は体部片で、内外面ヨコナデであるが体部外面下端にヘラ削り痕が残る。体部外面残存部にはヨコナデ後、縦方向に3状のヘラ状の痕跡が残る。
SP153 (Fig.47、Pla.42)
須恵器
坏 (254) 断面逆台形に近い高台を貼り付ける。淡茶色を呈し、還元やや不良である。
SP159 (Fig.47、Pla.42)
須恵器
壺 (255) 底部は回転ヘラ削り、体部内外面はヨコナデ。淡灰黄色を呈し、焼成、還元良好である。
土師器
蓋 (256) 天井部回転ヘラ削り、内・外面ヨコナデ。淡黄茶色を呈し、胎土はよく精選されている。
坏 (257・258) 257は底部は回転ヘラ切り、内外面ヨコナデ、内底は不定方向のナデ。焼成良好で、胎土はよく精選されている。258は底部回転ヘラ切り、内外面ヨコナデ。胎土はよく精選されている。
甕 (259) 体部外面ハケ目、内面ナデ。口縁部はヨコナデ。
SP178 (Fig.47、Pla.42)
土師器
坏 (260～262) 何れも底部回転ヘラ切り後、ナデを施し、体部内外面ヨコナデ。262は底径が小さく体部が内湾しながら開くタイプで、胎土はよく精選されている。
淡茶黒色土 (Fig.47、Pla.42)
須恵器
甕 (263) 内外面ヨコナデ、淡灰茶色を呈し、胎土に2mm程度の黒色粒子を含む。
土師器
蓋 (264～269) 264は摘部を断面三角形に仕上げる。265は擬宝珠のツマミを取り付ける。
坏 (266) 底部回転ヘラ削り、体部内外面ヨコナデ。明黄茶色を呈し、胎土はよく精選されている。
皿 (267) 底部回転ヘラ切り、体部から口縁部を外反させる。
椀 (268・269) 共につくりが薄く、外に 張り出す細い高台を取り付ける。
石製品
石鏃 (270) ほぼ完形の黒曜石製の石鏃である。
淡黒茶色土 (Fig.47、Pla.42)
須恵器
坏 (271～273) 271、272は体部と底部の境に張り出す形で高台が付き、273は底部の内寄りに断面台形の高台が付く。
甕 (274・275) 共に口縁付近に断面三角形の突帯を貼り付ける。内外面ヨコナデ。青灰色を呈し、焼成、還元良好である。
壺 (276・277) 外面に2箇所断面三角形の突帯を貼り付ける。内面は当て具後、ナデを施す。277は壺ないしは甕片で口縁部を二重口縁の様に粘土を追加して貼り付ける。内外面に自然釉がかかる。
土師器
坏 (278～281) 278は体部外面に斜方向のヘラ削り、口縁部と内面はヨコナデ。279は底部から体部下半に回転ヘラ削り、内面はヨコナデ。280は底部回転ヘラ切り、体部内外面はヨコナデ。淡黄茶色を

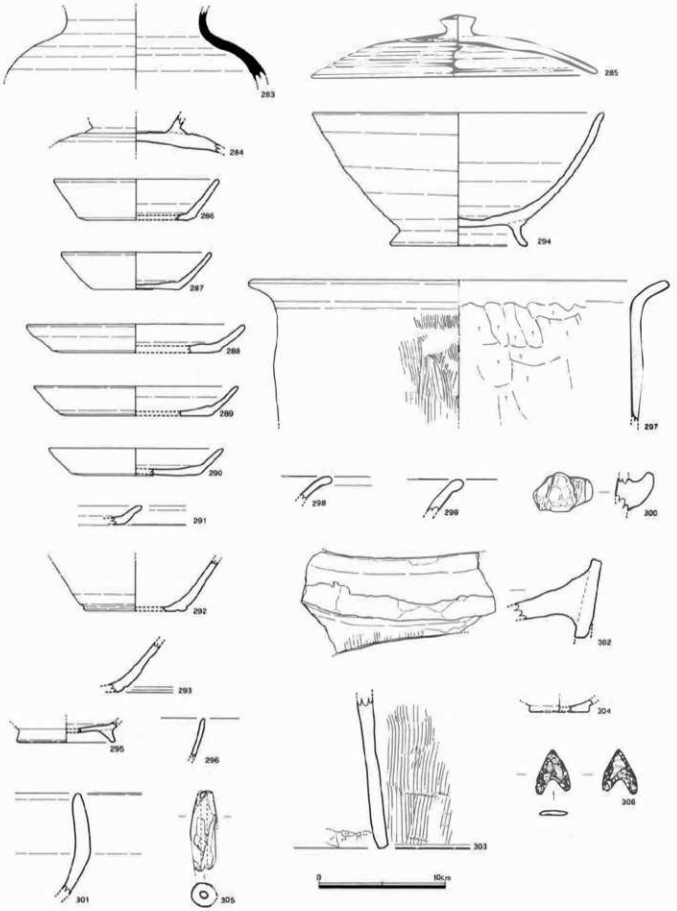


Fig.48　淡黒灰色土　出土遺物実測図（1/3）石器（1/2）

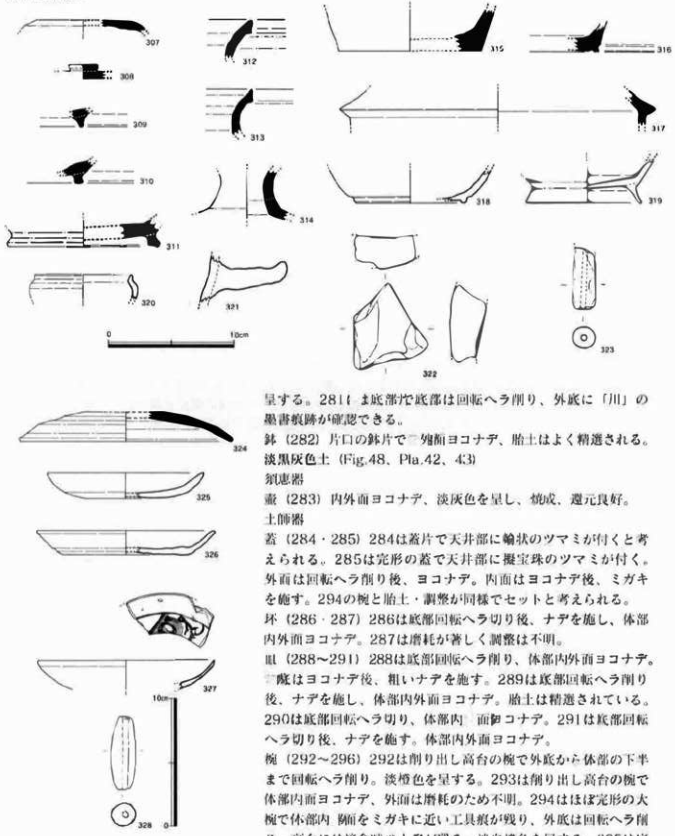


Fig.49　路面直上淡黒茶色土
表土出土遺物実測図（1/3）

呈する。281は底部穴底部は回転ヘラ削り、外底に「川」の墨書痕跡が確認できる。

鉢（282）片口の鉢片で二次面ヨコナデ、胎土はよく精選される。淡黒灰色土（Fig.48、Pla.42、43）

須恵器

壺（283）内外面ヨコナデ、淡灰色を呈し、焼成、還元良好。

土師器

蓋（284・285）284は蓋片で天井部に輪状のツマミが付くと考えられる。285は完形の蓋で天井部に擬宝珠のツマミが付く。外面は回転ヘラ削り後、ヨコナデ。内面はヨコナデ後、ミガキを施す。294の椀と胎土・調整が同様でセットと考えられる。

坏（286・287）286は底部回転ヘラ切り後、ナデを施し、体部内外面ヨコナデ。287は磨耗が著しく調整は不明。

皿（288～291）288は底部回転ヘラ削り、体部内外面ヨコナデ。289は底部はヨコナデ後、粗いナデを施す。289は底部回転ヘラ削り後、ナデを施し、体部内外面ヨコナデ。胎土は精選されている。290は底部回転ヘラ切り、体部内外面ヨコナデ。291は底部回転ヘラ切り後、ナデを施す。体部内外面ヨコナデ。

椀（292～296）292は削り出し高台の椀で外底から体部の下半まで回転ヘラ削り。淡橙色を呈する。293は削り出し高台の椀で体部内面ヨコナデ、外面は磨耗のため不明。294はほぼ完形の大椀で体部内外面をミガキに近い工具痕が残り、外底は回転ヘラ削り、高台には接合時のナデが残る。淡白橙色を呈する。295は底部片で内底はヨコナデ、高台を取り付け接合時のナデが残る。296は体部片で口縁端部を若干摘んで調整する。口縁内外面に油

痕が残る。
甕（297～300）297は口縁から体部片で外面は縦方向のハケ目、内面は縦方向のヘラ削り、胴部より口縁径が大きいタイプである。298、299は口縁片で端部を若干丸く仕上げる。300は把手片で、手づくねで胴部に取り付けたと考えられる。
鉢（301）体部から口縁部にかけて内湾し、内外面ヨコナデ。胎土に角閃石を含む。
緑釉陶器
椀×皿（304）淡白灰色の胎土に薄い緑色の釉を施す。円盤状の高台を呈し、内外面に釉が掛かるが、一部剥離している。京都（洛北）産と考えられる。
土製品
竈（302・303）共に移動式竈片と考えられる。302は焚き口部分で鍔が取り付く。303は裾部片で端部を丁寧に面取りし、外面に縦方向のハケ目、内面端部に削りを施す。
土錘（304）一部欠損する土錘で径4mm～5mmの孔が貫通する。
石製品
石鏃（306）完形の黒曜石製石鏃である。重さ0.9gを測る。
路面直上淡黒茶色土（Fig.49、Pla.43、44）
須恵器
蓋（307・308）307は天井部回転ヘラ削り、内面はヨコナデ。308は扁平なツマミを取り付け、外面に接合時のナデを施し、内面はナデ。
坏（309・310）共に高台部片で外面には高台接合時のナデ、内面はヨコナデ。
壺（311～317）311は底部片で高台が取り付く。内面に不定方向のナデが残る。312、313は口縁片で端部を断面三角形に仕上げる。内外面ヨコナデ。甕の可能性あり。314は頸部片で内外面ヨコナデ。315は平底の底部片で外面にナデ、内面は不定方向のナデを施す。316は高台を削り出し、体部は回転ヘラ削り、内面は工具による不定方向のナデを施す。317は肩部片で屈曲部に断面三角形の突帯を取り付けたと考えられる。
土師器
椀（318・319）
318は削り出し高台の椀片で、比較的小さめの高台部を削り出す。明橙色を呈し焼成不良である。319は細長い高台を取り付ける。淡白橙色を呈する。
小壺（320）体部が内湾し、口縁端部で外反する小壺片で橙色を呈する。
甕（321）鍔付きの甕片であると考えられ、鍔上面はヨコナデ後、指頭痕が残り、下面はハケ目と接合時のナデが残る。比較的粗いつくりである。
瓦
丸瓦（322）丸瓦片と考えられ、淡黄白色を呈する。磨耗が著しく調整等不明。
土製品
土錘（323）端部が若干欠損する。径約4mmの孔が長軸を貫通する。
表土（Fig.49、Pla.44）
須恵器
蓋（324）天井部回転ヘラ削り、体部外面ヨコナデし口縁を断面三角形に仕上げる。
土師器
坏×皿（325・326）325は皿ないしは坏片で底部を手持ちヘラ削り、体部内外面をヨコナデ、外面に赤色顔料を塗布する。326は坏ないしは皿片で底部を回転ヘラ切り、体部内外面ヨコナデ。
磁器
染付皿（327）釉は薄い青灰色で内面に呉須で文様を描く。
土製品
土錘（328）ほぼ完形の土錘で径約4mmの孔が長軸に対して貫通する。

Ⅳ.SF220道路状遺構形成土壌の粒径分布について

1.目的

道路遺構において検出される各種の「道路痕跡」[注1]について，従来から機能や構造の推定が提示されている。それらの推定を検証していく基礎作業として，各種痕跡形成土壌について粒度測定を行い，古代における土木施工を推定する一資料を得るために行った。

今回は調査区各所の地山と帯状硬化部分等の道路痕跡に伴う土壌の相違点を抽出することを目的とした。なお，土種の相違については自然科学分析等による多角的な検討が必要であり，今回は限られた作業しか行うことができなかったため，結果は限定的に成らざるを得ない点を断っておく。

2.試料

調査区の5箇所から合計5サンプルを採取した（p15-Fig.11に採取地点掲載）。1サンプルについて約1kgを採取し，サンプルの中から無作為に100gを抽出し，計測を行った。

3.方法

筑紫野市教育委員会小嶋野亮氏の協力により，筑紫野市岡田地区遺跡群で行った方法に準じて作業を行った[注2]。最初に採取した土壌試料を乾燥状態にするために天日干しを行い，粉砕器で2～3秒間の粉砕後に5種のふるいにかけて各重量を計測した。試料のばらつきを勘案して計測は3回行い，併せてその平均値を表示した。

4.機材

粉砕器（フードカッター），ふるい[注3]（ケニス社製実験用ふるい）

5.結果

1）地山について

個別底部の地山では部分的に小礫を含んだ箇所が存在したが，採取した2箇所の粒径分布に大きな差は見受けられなかった。概ね20%前後の数値で平均的に分布している状況であり，3回の計測とも大きなばらつきは認められない。

2）帯状硬化覆土，帯状硬化部分と地山との比較

地山との比較をしてみると，両者共に地山計測値とは粒径が異なることがわかる。帯状硬化覆土については目視の段階で確認しているが，0.4cm以上の大きな径のものが54.1%～88.1%（平均値72.8%）と非常に多く，0.2cm以下の小さい径のものが3.5%～7.0%と非常に少ない。帯状硬化部分については0.4cm以上の径のものは24.9%～50.7%（平均値38.7%）と帯状硬化覆土よりやや少なくなるが，地山より粒径が大きい土壌が主体になっている。また，帯状硬化部分の3回の計測値に若干のばらつきが見られることや地山との粒径が異なることから，地山とは異にした客土の可能性が指摘できる。

3）西個別際の路面硬化部分と地山との比較

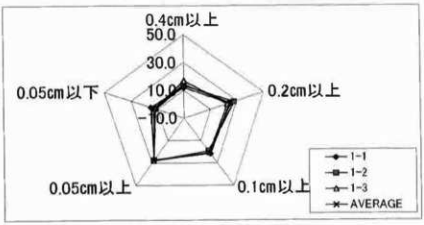
比較的粒径の分布範囲は近似しているが，0.05cm以下の小さな径のものが1.3%～8.6%（平均値4.6%）と地山の数値より非常に少なく，粒子が粗い土壌であったことが認められ，採取地点近くに波板状の連続土壌が存在していることから地山とは異なった土壌であった可能性が強いと考えられる。

6.考察

今回の測定では，作業に至るまでの過程であるサンプリングや試料数についての対象が部分的であり，全体を包括した結果が見い出せなかったことは残念である。しかし，部分的でありながらも道路跡と言われる各種痕跡に対する幾つかの問題点を提起する成果が挙げられた事を述べておく。

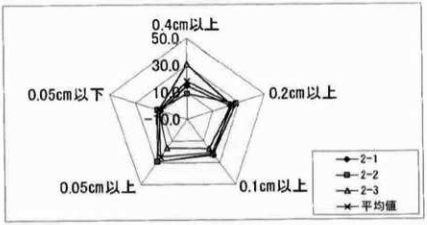
調査区北側地山

試料名	1-1	1-2	1-3	AVERAGE
0.4cm以上	12.0	13.4	17.0	14.1
0.2cm以上	24.2	27.7	22.7	24.9
0.1cm以上	21.6	19.3	20.6	20.5
0.05cm以上	27.1	27.9	27.6	27.5
0.05cm以下	15.1	11.7	12.1	13.0
				100.0



調査区南側地山

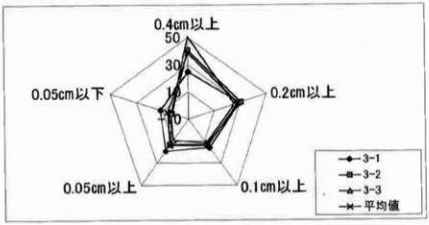
試料名	2-1	2-2	2-3	平均値
0.4cm以上	14.9	8.9	30.7	18.2
0.2cm以上	23.0	27.7	23.9	24.9
0.1cm以上	22.7	21.9	16.9	20.5
0.05cm以上	28.5	28.4	16.1	24.3
0.05cm以下	10.9	13.1	12.4	12.1
				100.0



帯状硬化部分

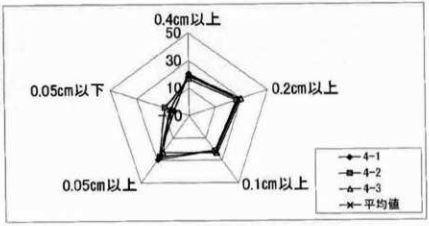
試料名	3-1	3-2	3-3	平均値
0.4cm以上	24.9	40.6	50.7	38.7
0.2cm以上	29.2	30.4	25.3	28.3
0.1cm以上	15.8	12.8	11.7	13.4
0.05cm以上	18.8	13.2	9.0	13.7
0.05cm以下	11.3	3.0	3.3	5.9
				100.0

※鉄分・マンガン粒を顕著に含む。



西側側溝際硬化部分

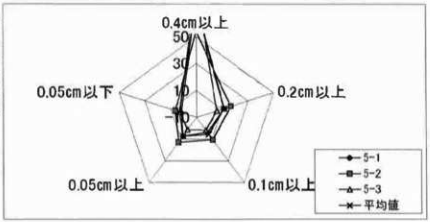
試料名	4-1	4-2	4-3	平均値
0.4cm以上	20.4	16.5	19.6	18.8
0.2cm以上	27.6	26.3	29.6	27.8
0.1cm以上	21.4	21.3	23.6	22.1
0.05cm以上	29.3	27.3	22.8	26.5
0.05cm以下	1.3	6.6	4.4	4.8
				100.0



帯状硬化層土

試料名	5-1	5-2	5-3	平均値
0.4cm以上	76.1	54.1	88.2	72.8
0.2cm以上	11.7	16.5	5.9	11.4
0.1cm以上	3.6	10.6	1.9	5.4
0.05cm以上	7.1	12.6	1.2	7.0
0.05cm以下	1.5	6.2	2.8	3.5
				100.0

※鉄分・マンガン粒を顕著に含む。



まず、帯状硬化部分に関しては調査時の目視、ないしは測量時に地山と非常に近似した土壌として考えていたが、粒径に差が生じた結果から地山と異なる土壌であった可能性が導き出された。その根拠となる2つの問題提起をしておく。1点目は粒径の大きなものの多さについては帯状硬化直上には覆土として小礫を多く含む層が覆っており、仮に転圧などの行為（踏み締め等の人為的行為）が行われていたとするならば硬化部分に覆土の一部が押し込められた可能性も考えられる。サンプル採取時に帯状硬化覆土と考えられた部分については若干の締まりを確認しており、これらを実証するためには硬化部分の硬度測定や自然科学的な分析での判断が必要になってくる。2点目として粒径の小さいものが地山と比べて平均値で半分以下であったことである。これは明らかに地山とは粒径が違うことを意味しており、地山切り通しの路面に何らかの手を加えたことが窺える資料となった。

西側側溝際硬化部分に関しても地山に近似している土壌であると調査時には判断していた。しかし、帯状硬化部分と同様で粒径の小さいもの（0.05cm以下）が非常に少なく、他の粒径分布は近似値を示しているが地山との違いを指摘できる数値結果となった。これも土壌の違いを示すものとして考えられ、他の分析方法での検証、追認作業が必要である。

今回測定を行った箇所は調査区中央から南部分の地山を浅く切り通して道路造成を行っている部分であり、当市で初めての丘陵上の道路跡調査であった。今までの調査事例では八女丘陵と矢部川に挟まれた低地部分での検出であり、当調査区から南へ約900mの標高13mの低地に存在する山ノ井川口遺跡等では波板状の連続土壌や突き固め痕と称される痕跡が多く残り、当遺跡と比較するとその痕跡量の違い顕著である。この痕跡量の違いは低地上と丘陵上での道路敷設に違いがある可能性を示唆するものとして考えられている。その中で今回の粒度測定から導かれた結果を一つの資料として当市の道路跡を検討しなければならない。

註1.山村信榮「古代道路の構造」『古代交通研究』第10号2000年
　小澤毅亮「古代の官道-筑紫野市域における調査-」『筑紫野市史』資料編（上）考古資料2002
註2.筑紫野市教育委員会『岡田地区遺跡群II』筑紫野市文化財調査報告書第56集1998
註3.筑紫野市教育委員会から借用。粒度は0.05cm以下、0.05cm以上、0.1cm以上、0.2cm以上、0.4cm以上の5種
註4.『筑後市内遺跡群IV』筑後市教育委員会　2002

V.まとめ

(1)西海道跡（SF220）

a.両側溝の対応パターン

調査区からは東西側溝を合わせて9本検出している。西側溝を4本、東側溝を4本確認しているが、調査区南北で本数に違いがある。これは遺構本文で述べたとおり（P25）、1.調査区北半分が北へ緩やかに下がる斜面であること。2.調査区南半分は丘陵頂点部分であり道路部分の地山カット（切り通し）であること。3.側溝を部分的に掘り直しを行った箇所が存在すること等、調査区の地形の違いや側溝掘削の違いによるものと考えられ、調査区各地点での検出状況も異なっている。

以上の事柄をふまえ、調査区各地点の両側溝を「切り合い関係上」、または「埋土の状況」等から対応パターンを抽出してみると、以下のパターンが考えられる。

西側溝　東側溝

●SD030 - SD225
②SD035 - SD050
③SD055 - SD050
④SD055 - SD060
⑤SD035・055-SD050
⑥SD035・055-SD060
⑦SD135 - SD065
⑧SD070 - SD050
⑨SD070 - SD060
⑩SD070 - SD065

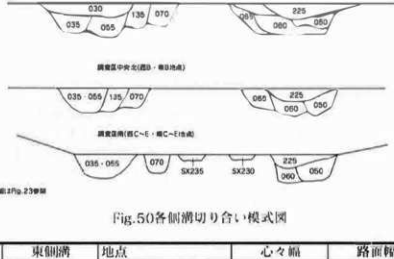


Fig.50各側溝切り合い模式図

対応パターン	西側溝	東側溝	地点	心々幅	路面幅
①	SD030	SD225	西A、東A地点付近	約11m	-
②	SD035	SD050	西A、東A地点付近	約11.5m	-
③	SD055	SD050	西A、東A地点付近	約10.8m	-
④	SD055	SD060	西A、東A地点付近	約10.3m	約9.5m
⑤	SD035・055	SD050	西B、東B地点付近	約10.5m	-
	〃		西C、東D地点付近	約9.8m	-
	〃		西D、東E地点付近	約10.0m	-
	〃		西E～地点付近	約9.8m	-
⑥	SD035・055	SD060	西B、東B地点付近	約10.0m	-
	〃		西C、東D地点付近	約9.5m	約8.5m
	〃		西D、東E地点付近	約9.4m	約8.3m
	〃		西E～地点付近	約9.4m	約8.1m
⑦	SD135	SD065	西B、東B地点付近	約8.7m	約7.8m
●	SD070	SD050	西B、東B地点付近	約9.2m	-
	〃		西C、東D地点付近	約8.8m	-
	〃		西D、東E地点付近	約8.5m	-
	〃		西E～地点付近	約8.6m	-
⑨	SD070	SD060	西B、東B地点付近	約8.9m	約7.7m
	〃		西C、東D地点付近	約8.6m	約7.7m
	〃		西D、東E地点付近	約8.0m	約7.2m
	〃		西E～地点付近	約8.0m	約7.4m
⑩	SD070	SD065	西B、東B地点付近	約8.0m	約7.4m

※切り合いで削平されている溝は復元溝幅を考慮して計測している。

Tab.5　側溝対応パターン法量表

次に各パターンの可能性や状況を述べる。

①SD030=SD225（心々約11m）

共に切り合い上、一番新しい溝である。SD030は調査区北端でのみの検出であるが、西側の古代の整地層（淡黒灰色土）を明らかに切り込んでいる為、溝として扱っている。SD225は部分的に途切れながらも調査区全体で検出している。共に埋土が灰褐色系で近似している。しかし、部分的な検出であり、検出幅も広く道路側溝としての役割を果たす「溝」であるには疑問が残り、消理没の流み込みによる後世の埋土である可能性も考えられる。

②SD035=SD050（心々約11.5m）

⑤SD035・055=SD050（心々約9.8m～10.5m）

共に切り合い上、二番目に新しい溝である。このパターンは北端ではSD035とSD055が独立しているため分層できるが、調査区中央から南側では同一化しているため分層が困難である。北端で検出した部分はSD035が溝全体のラインから西側に膨らんでおり、そのために約11.5mと心々幅が広くなる。北端が斜面のため特異的な数設であるとすれば、またはSD035・055の溝が同じ部分で掘り直されたと仮定すると約9.8m～10.5mという数値が基本になると考えられる。

④SD055=SD060（心々約10.3m）

⑥SD035・055=SD060（心々約9.4m～10m）

共に切り合い上、三番目に新しい溝である。北端部のSD055が全体のラインから若干西側へ膨らんでおり。状況は②・⑤パターンと同様である。

⑦SD135=SD065（心々約8.7m）

SD135は二番目に古く、SD065は最も古い溝である。共に調査区北半分のみの検出で、埋土は黒色系で近似している。共に斜面での検出であるため、部分的な掘り直しの溝である可能性が考えられる。

⑧SD070=SD050（心々約8.5m～9.2m）

SD070 は最も古い溝で、SD050は二番面に新しい溝である。共に茶褐色系の埋土で一部に硬下層をもつ点が共通する。心々幅の数値にばらつきがあるのはSD070が直線的でなく若干蛇行気味に敷設されているためである。

⑨SD070=SD060（心々約8.0m～8.9m）

調査区南側では共に最も古い溝（調査区北側ではSD060は二番目に古い）である。溝幅がSD070で約30cm、SD060で約70cm以上であるため規模に差異がある。心々幅の数値にばらつきがあるのは⑧と同様の理由である。

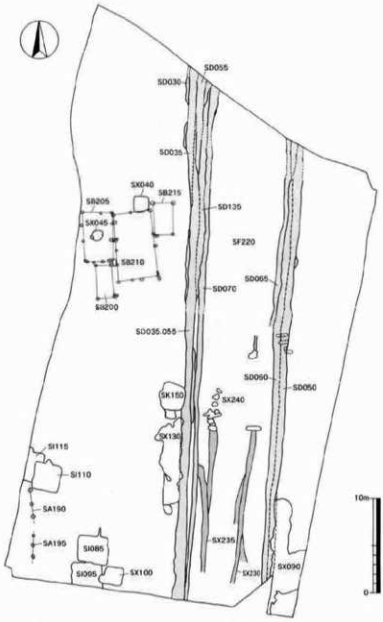
⑩SD070=SD065（心々約8.0m）

共に調査区北半分では最も古い溝である。埋土が近似しており、残存状況と底の標高がほぼ同じである。しかし、SD065は調査区南側では検出していない点が問題である。

以上のことから、比較的可能性が高いと考えられるパターンを切り合い順に並べると次のような変遷が考えられる。

《古い　→　新しい》

⑩SD070=SD065⇄⑨SD070=SD060→④SD055=SD060→②SD035=SD050→①SD030=SD225



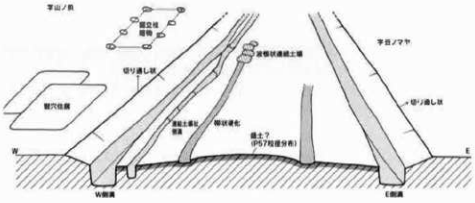


Fig.51　調査区南部分　路面模式図

b.道路状遺構の各種の痕跡について

今回検出した道路状遺構（SF220）からは両側溝以外に各種の痕跡が検出されている。これらの痕跡は「官道」と称される道路だけでなく「生活道」等を含めた各地の道路状遺構から検出されており、調査事例の増加に伴って、各痕跡についての分類や道路施工タイプ等が研究されている。

SF220で検出された各痕跡については

1.側溝
2.路面（硬化した面）
3.連続土壙（波板状の連続土壙）
4.帯状に硬化した面（帯状硬化面）
5.帯状の硬化面を覆う小礫や土器微少片（帯状硬化覆土）
6.突き固め痕跡（鋲突状痕跡）

これらの各痕跡についての名称は官道等の調査から研究諸氏により提示されており、その痕跡を生む施工行程の復元についても提示されている。

以下に当遺跡で検出された各痕跡について本文と重複する部分もあるが、状況・所見を述べる。

1.側溝

前述のとおり、東西両側溝を9本検出しているが、ここでは側溝の敷設環境と施工について述べる。

調査区北半分の緩やかな斜面地形部分（調査区北端部）では西側溝であるSD035、055が西へ膨らんでおり、この部分のみが側溝全体のラインから若干ずれている。これは1.路面幅を意図的に広げるため、2.調査区北側が斜面、南側が切り通しのため排水及び路面嵩上げを有効に行うため、3.調査地が駅家推定地であり、道路外の諸施設との関係（これについては後述する）等が考えられる。

側溝の底については調査区北側は斜面に従って北へ低くなる。調査区南側はフラットであるが、部分的に僅かな高低が見受けられる。この高低の原因については、1.側溝の切り合いのため、2.側溝施工時の掘削単位のため等が考えられる。

SD070に関しては調査区南半分では溝ラインが一定でなく若干蛇行した形状をなしている。埼玉県所沢市東の上遺跡の道路側溝と同様の形態で、連結した土壙状を呈しており、テラス状の部分については1.出入口、2.側溝施工時の掘削単位等が考えられるが調査区北側では全く検出されていないため不明な点が残る。また、この側溝は一番古い側溝と考えられ、当市調査例とは側溝の切り合い上等から逆の様相を呈している。この状況から道路面は拡幅された可能性があり、平安期に路面が縮小傾向にあるという諸例とは異なる。しかし、兵庫県赤穂郡落地遺跡や宇部宮市上野遺跡等では駅周辺地域の路面が拡がる傾向が指摘されており、関連を窺わせる資料である。

2.路面（硬化した面）

調査区南半分の2/3 程度で路面を確認している。硬化した面は両側溝間のほぼ全面（側溝の立ち上がり部分から）で、竪穴住居の床面のように硬化しており、道路使用時、若しくは路面形成の為の地業の痕跡と考えられる。また、この路面に何らかの圧力が加えられ帯状に硬化した面（帯状硬化面）も確認している。

路面で他の事例と異なるのが、路面中央部が高くなっている事である。東の上遺跡等の事例では廃絶時の路面は中央部が低くなり、掘り鉢状を呈した部分に盛り土を行っている状況が確認されており、今回検出した路面の一部は逆で、路面の一部分であるが断面がカマボコ状を呈する（Fig.23東D-西E地点）。この高い部分の両側に帯状硬化面が検出されている。また、検出した高い部分は地山を切り遺した部分であり、路面の硬化がかなり脆弱でほぼ地山と考えられるものであった。

3.連続土壙（波板状の連続土壙）

道路状遺構の調査では、路面や側溝内に円形や楕円形、または溝状に連続した土壙列が検出される。これらを「波板状の連続土壙」「波板状圧痕」「波板状の凹凸面」等として報告されており、道路の施工

や使用に関する痕跡として扱われている。この痕跡の機能については、1.路面上に存在していた構造物としての評価「枕木痕」等、2.路面築造時の「路床」とする地ならしをした痕跡、3.1.2両者が必要性において各々存在していたと考えられる「機能分別」4.路面使用時等の「補修」とする2次的な痕跡等が考えられている。今回検出したSX240は調査区南側の路面が削平された地山面から検出しており、計10個のピット状の連続土壙である。他の痕跡（路面、帯状硬化面、側溝）との先後関係が不明である。検出したピットの南端で帯状硬化面が検出されており、帯状硬化面を含む路面が削平されていたと仮定するならば、連続土壙は路面下層に存在していると考えられる。しかし、路面や帯状硬化面の下層から は連続土壙が検出されていない事や他の部分での検出が無かった事から推定として留めておきたい。

4.帯状に硬化した面（帯状硬化面）

調査区南半分でSX230・235の2条検出してる。幅約30cm～40cmを測り、SX230については南北に走り、途中でラインから着干外れる部分も検出している。SX235は北側でSD070に合流していく部分と直線的にSX240の連続土壙に繋がる部分を確認している。

これらの帯状硬化面の機能に関しては「歩行」「地業の為の痕跡」等が提示されており、今回のケースが何れの機能であるか、または他の機能なのかについては検討する必要がある。

5.帯状の硬化面を覆う小礫や土器片少片（帯状硬化覆土）

帯状硬化面検出時の覆土は小礫や土器片少片を含む埋土であった。遺構直上の埋土は淡茶黒土であったため、意図的に充填されたものであると考えられる。また検出したこれらの覆土は帯状硬化面に限らず路面直上で部分的に確認している。

6.突き固め痕（刺突状痕跡）

検出された痕跡は1面の道路跡（SF010）の路面や周辺の整地層で確認しているが（Fig. 9）、SF220に関しては一部側溝内の硬化土（覆土）について推定される部分があるが、路面、連続土壙、帯状硬化面等では確認していない。

c.SF220の時期について

各側溝から出土した土器を概観しておく。年代観については、他地域である筑前（太宰府）、北筑後（久留米、小郡）、肥後（荒尾・熊本）の編年から導いた「目安」として捉えたものである。

いずれにしても側溝出土遺物のため自然埋没や人為的埋め立てに伴う遺物であるため、時期的な出土傾向や出土状況を合わせて述べる。

東側溝

SD030　出土遺物が小片（土師器）のため不明である。しかしこの溝に切られる整地層（淡黒灰色土）出土遺物に土師器大甕、大椀、緑釉陶器があり、これらを9世紀前半とするならば、それ以降の時期が考えられる。

SD035　埋土最上層で黒色土器A類椀片を出土している。他の遺物も8世紀後半から9世紀前半の遺物である。また、筑後地域に出土傾向が集中する、筑後特有の土器と考えられる削り出し高台の椀（8世紀後半から9世紀前半）も出土している。

SD055　坏を1点しか報告していないが、他に甕片と甕片を出土している（出土遺物台帳参照）。坏は底部を手持ちヘラ削りした坏で8世紀前半から中頃までの土器と推定される。SD035・055出土遺物については高坏が着干古い感じがするが、概ね8世紀後半から9世紀前半にかけての遺物と考えられる。

SD070　肩部に三角の突帯を貼り付ける壺が出土しており、9世紀前半の遺物と考えられる。

西側溝

SD050　須恵器蓋、壺等から8世紀後半代以降と考えられる。

SD060　須恵器坏は着干古い感じがあるが、甕、壺から8世紀代から9世紀前半までが考えられる。ミガ

キの入る甕については特異な遺物である。

帯状硬化遺構　須恵器は8世紀代から9世紀前半までのもの と考えられる。

次にSF22について側溝パターンと時期についてまとめると、以下 ような変遷が推定できる。

《古い　→　新しい》

遺構パターン	⑩		⑨		④		②		①
遺構	SD070-SD065	→	SD070-SD060	→	SD055-SD060	→	SD035-SD050	→	SD030-SD225
出土遺物時期	8世紀代～9世紀前半		8世紀代～9世紀前半		8世紀代～9世紀前半		8世後半～9世紀前半		9世紀前半以降

また、SD 35・55はSX13 に切られ、SD 50はSX 9 に切られており、後述するがSX 9・13 の出土遺物が9世紀前半（SX 9 は8世紀代 遺物有 ）と考えられるため、①SD 3 =SD225以外の 各側溝パターンは9世紀前半までに埋没した溝として考えられる。特に土師器坏に関しては底部手持ち ヘラ削りの坏より底部ヘラ切り、ないしはヘラ削り 坏の出土傾向が強く、8世紀中頃以降から9世紀前 半 遺物が出土していると考えられる。

(2) 掘立柱建物

調査区東北、SF22 西側で4軒 掘立柱建物を検出している（方位・規模についてはTab.6参照）。4 棟共に座標北からN-5° -Wより内で収まり、SF220に近い方位を取る。各ピットの検出は II 面の淡茶橙 色土で行ったが、建物以外のピットを含めた切り込み状況は II 面と考えられる整地層（淡黒灰色土）か らの切り込みと、II 直上 えられる淡茶橙色土に切り込むも とが存在している（Fig.4）。この事は整 地層を切り込むのか否かで建物の時期に違いが生じてくるため、検出 業を行っていない為、推測 かでき ない が、各ピットの出土遺物から時期を推定すると8世紀後半～9世紀前半までが考えられ、仮に整地 を行ってからの建物の構築であれば前述したとおり9世紀前半代以降 年代を推定することとなる。

(3) 竪穴住居、竪穴

調査区北西で1軒、南西で5軒の計6軒を検出している。（方位・規模につ てはTab.6参照）。切り合い関係 38軒以上が考えられる。方位についてはSI 5のみ僅かであるが西に振れてお 、他 住居は 5°-E以内に収まる。規模については竪穴住居については検出幅が約3m前後を測る。竪穴について

掘立柱建物				
遺構名	南北軸の座標北からの振れ	面積（㎡）	面積（坪）	備考
SB200	N-14° 2′ 10″ -W	5.78㎡	1.75	
SB205	N-0° 57′ 17″ -W	14.94㎡	4.52	
SB210	N-7° 0′ 59″ -W	28.424㎡	8.61	
SB215	座標北	7.33㎡	2.22	
竪穴住居、竪穴				
遺構名	南北軸の座標北からの振れ	東西長	南北長	備考
SI085	N-2° 17′ 26″ -E	3.2m	2.94m	
SI095	N-1° 17′ 20″ -W	3.19m	-	屋内、住居内土壙
SI110	N-14° 55′ 53″ -E	2.81m	2.91m	カマド、屋内土壙
SI115	N-14° 2′ 10″ -E	3.18m	3.18m	カマド、白色粘土
SX040	N-3° 21′ 59″ -E	1.63m	1.61m	床面被熱
SX100	N-11° 10′ 54″ -E	1.95m	1.86m	カマド、床面被熱
柵列				
遺構名	南北軸の座標北からの振れ	ピット数	総距離	備考
SA190	N-5° 42′ 38″ -E	3	2.8m	
SA195	座標北	3	2.2m	

Tab.6　掘立柱建物、竪穴住居、竪穴、柵列計測値一覧

は約2m弱を測る極端に小規模なものであるため「竪穴」として報告している。

a.カマド

SI110、115の北壁、SX100の西壁検出している。住居から突出したタイプでSI110、115についてはカマド内が床面より低くなる形状を呈する。カマド内からは焼土・白色粘土等を検出している。煙道は確認していない。

b.床面

全ての住居で硬化した床面を確認している。SI115では床面で一部色調の異なる土を、SX40、100では焼け面を確認している。また、SI095では甕を、SX100では坏、SI115では椀・坏が床面に置かれた状態で出土している。

c.住居内土壙（壁際土壙）

住居壁面から外方向へ掘り込む遺構で、SX095の東壁で検出している。壁を掘り込み、底部は床面より低くなる。類例は筑後市前津中ノ玉遺跡、甘木市宮原遺跡で報告例がある。硬化した床面が全面的に貼られているが、土壙端部には及んでおらず、意図的に避けている状況であるため、住居使用時に存在しているものと考えられる。遺物は前津中ノ玉遺跡出土遺物と同様で、住居覆土の遺物より若干古い様相を呈しており、住居使用時に近い時期の遺物として考えられる。機能について諸例では「カマド火種置き場」「カマド灰置き場」等が推定されている。

d.屋内土壙（床下土壙）

住居床面である硬化層を除去した段階で検出される遺構で、SI095、110で検出している。何れも住居中央より外れた部分（SI095は住居東端の住居内土壙部、SI110は住居東北端）で検出している。これらの土壙は市内遺跡で検出された竪穴住居から比較的頻繁に検出されており、住居使用時前の築造時の痕跡である。機能について「地鎮（祭祀）」「湿気除去」等が推定されている。

e.出土遺物

住居覆土遺物と床面出土ないしは付設遺構出土遺物から概観してみる。

SI085　覆土遺物の土師器坏や削り出し高台の椀から8世紀後半から9世紀前半の遺物と考えられる。貼床下出土遺物は須恵器坏が若干古い感じがするが、他の遺物から見ても覆土遺物と大差ないと考えられる。

SI095　覆土遺物の土師器については8世紀代から9世紀前半の遺物と考えられる。住居内土壙の遺物の土師器坏、皿については8世紀前半から中頃の遺物と考えられる。

SI110　床面出土の坏と削り出し高台の椀から8世紀後半から9世紀前半の遺物であると考えられる。

SI115　覆土出土の土師器坏から8世紀後半から8世紀末の遺物と考えられる。

SX040　遺物が少ないが、土師器に関しては9世紀前半の遺物と考えられる。

SX100　土師器坏から7世紀後半から8世紀末の遺物と考えられる。

f.切り合い関係と時期

検出された遺構と遺物から右図のような状況を呈する。これらの中で同時期に存在していた住居の組み合わせを推定するには至らないが、概ね8世紀末から9世紀前半が埋没の時期に推定される。

切り合い関係	古い		新しい
Aグループ 遺構 出土遺物時期 方位	SI095 8世紀中頃～9世紀前半 N-1° 17′ 20″ -W	→	SI085 8世紀後半～9世紀前半 N-2° 17′ 26″ -E
		→	SX100 7世紀後半～8世紀末 N-11° 10′ 54″ -E
Bグループ 遺構 出土遺物時期 方位	SI115 8世紀後半～8世紀末 N-14° 2′ 10″ -E	→	SI110 8世紀後半～9世紀前半 N-14° 55′ 53″ -E
Cグループ 遺構 出土遺物時期 方位			SX040 9世紀前半 N-3° 2′ 59″ -E

g.竪穴遺構について

今回検出した遺構の中でもSX040、100は一辺が約2ｍ未満の極端に小型の遺構であった。これらを「小竪穴」「小型竪穴」等と呼ばれ、検出例が報告されている。

SX040、100の特徴を列記すると

1.硬化した床面をもつ。

2.床面に被熱痕跡を確認している。

3.柱穴を検出していない。

4.SX100についてはカマドが付設される。

5.出土遺物が8世紀後半から9世紀前半の遺物である。

これらの特徴は筑紫野市の岡田地区遺跡群で報告されている遺構と幾つかの共通点があり、1.床面に被熱痕跡が残る、2.時期が8世紀後半から9世紀初頭である、3.官道沿いであるという類似点をもっている。また、当市でも前畑中ノ玉遺跡で一辺が約2ｍの小型住居（SI150）を検出している。

これらの小型の竪穴については、6世紀から始まる竪穴住居の縮小化現象の中での位置付けされたものと、ある一定の時期と場所で出現する竪穴住居と一線を画した機能を持つ遺構という位置付けが考えられ、前者は掘立柱建物への移行段階での機能分別（炊事場的施設など）や古有空間が縮小しない建築方法（住居外の柱配置や屋根の葺き方の変化）、後者は官衙関連遺跡で検出される例があるためそれらの施設との関連性が考えられる。

今回検出したSX040、100については市内における検出例増加や周辺市町村での検出例を待って遺構の機能や必要性の問題を検討しなければならない。

(4) SX090、130について

両遺構共にSF220側溝を壁かに切る遺構である。両側溝埋没後に形成されており、壁底の凹凸が激しく「土取り遺構（粘土採掘坑）」と考えられる。また、SF220側溝を壁かにしか切っていないため、道路遺構との関連が考えられる。SX090 出土遺物の土師器椀外底に「上妻大」の墨書土器を出土しており、「上妻」は筑後国上妻郡の郡名と同じ文字である。SF220の官道を境界にして東側を「上妻郡」、西側を「下妻郡」ないしは「三瀦郡」という推定がされており、出土した遺構、遺物はSF220東側、小字が「丑ノマヤ」という駅家推定地であることから、それらとの関連が考えられる。他の出土遺物も概ね8世紀後半から9世紀前半の遺物であり、側溝埋没後期に近い時期のものであると考えられる。

②歴史地理学、文献史学で推定された駅路（官道）、駅家、条里に関する考察

古代道路研究に関しては歴史地理学、文献史学からのアプローチによって各地で路線や諸施設の推定がなされ、それを考古学的手法である発掘調査や研究によって検証が行われている。

筑後国（当市域）については高橋誠一、木下良、日野尚志、松村一良氏により駅路（官道）、駅家、条理の推定・復元が行われている。駅路（官道）については「位置と環境（p2、3）」で述べたとおり、市北部の字境界によって推定ラインが設けられた。駅家については日野氏が大字「和泉」付近ないしは推定駅路の東側の花家、山ノ井川護河地点付近を、日野、木下氏が小字名「丑ノマヤ」付近を、松村氏は「丑ノマヤ」北隣にある字「車路」付近を『延喜式』記載の「葛野駅」として推定している。条里については日野氏による復元案が提示されており、駅路を郡境として東側を「上妻郡」、西側は広川町の広川流域を「三瀦郡」、筑後市南部の矢部川左岸流域を「下妻郡」に比定している。また、「三瀦郡」「下妻郡」の郡境は筑後市に流れる花宗川流域を想定している。

駅路については平成5年に鴨田中市ノ塚遺跡で両側溝を伴う道路状遺構を検出し、以後、鴨田木屋ノ角遺跡、鴨田牛ヶ池遺跡、山ノ井川口遺跡で同様の道路状遺構を検出した事により市南部域にほぼ一直線の道路が存在していた事が確認された。

今回の調査地は、当市調査例（鴨田中市ノ塚遺跡、鴨田木屋ノ角遺跡、鴨田牛ヶ池遺跡、山ノ井川口遺跡）の中で最北部の丘陵上の調査であった。また、大字界が南北に直線状に延びる推定ライン上に位

置する事から道路状遺構の存在を当初から想定し、両側溝を伴う道路跡が検出されたことにより当遺跡から鴨田中市ノ塚遺跡までの約3.3kmの遺跡が直線道路であったと確認された。

調査区内では Fig.3に示したとおり、東側に大字界が南北に延びる。調査結果照らし合わせると、調査区北端では東側溝付近に字界が位置し、調査区南端では西側溝付近に字界が位置する。また、調査区北端のSF220路面中央を南北に走り、調査区中央部で西に折れ曲がるSD025は中世の溝と考えられる事から、古代道路廃絶後、何らかの境界や区割り（条里に準じた）として後世まで残存し、現在の境界として残ったと考えられる。

駅家については、今回の調査地東部分が木下、日野氏の指摘する駅家推定地である字「丑ノマヤ」であり、検出されたSF220の東側一面しているが、駅家の根拠となる遺構は検出されていない。唯一、SX090から「上妻大」の墨書土器を出土したことは、その土器を評価する上で関連性を考える資料となる。また、SF220西側（字由ノ前）で検出した竪穴住居からも墨書土器を数点出土していること等から、官道沿いの住居群のあり方や駅家推定の手がかりとして検討しなければならない。更に前述したSF220側溝の新しい溝の方が外側に敷設される（路面が拡幅する）現象は、今後駅家との関係を検討する問題として考えなければならない。

条里については、当市域では日野氏が条里復元を提示しており、郡境が官道（道路）ラインと考えられている。これによると官道東側が上妻郡、西側が下妻郡、三瀦郡として提示され、筑後市一条や下妻地区では条里を復元している。また、西海道では余剰が確認されていないため、条里地割りに道路が敷設、または規制を受けて敷設されたと考えられているが、それを検証できる当市での考古学的成果は未だ確認していない。

③羽犬塚山ノ前遺跡

当市では今回の調査を含め道路状遺構（官道）を、市内で5遺跡、8調査目を数える。当市を南北に貫いていたと考えられる古代道路は八女丘陵や矢部川流域の低地でもほぼ一直線に走っていた事が調査から判明してきた。また、駅家跡に累しては全国的にも検出例が少なく、当市においても推定地が数箇所存在しており、今回の調査でも遺構に関しては実証できる資料が提示できなかった。しかし、墨書土器や市内でも出土例がほとんどない緑釉陶器等を出土したことは駅家（磯野駅家）を考える上での貴重な資料となった。今後、字車路や字丑ノマヤの調査で明らかになる事に期待したい。

当市での律令期の遺跡は検出例も報告例も少ない。古代官道に関しては前述したように調査実績が徐々に積み上げられ報告されてきたが、それに伴う拠点集落や住居の変遷、条里、土器の年代観等に関しては不明な点が多く、問題は山積している。市内に点在する古代遺跡が「線」として、または「面」として捉えられるまでは調査の成果と事実関係の積み上げが必要である。また、調査された遺跡の歴史背景や地域性、周辺遺跡を視野に入れ広域的な「面」として復元できることを今後に期待したい。

(注、参考文献)
1. 山村信榮「古代道路の構造」『古代交通研究』第10号　2000年
2.山口村信榮「大宰府周辺の古代官道」『九州考古学』第68号　1993年
3. 飯田充晴「道路築造方法について～埼玉県所沢市東の上遺跡の道路跡を中心にして～」『古代交通研究』第2号　1991年
4 「筑後市内遺跡群Ⅳ」筑後市文化財調査報告書第45集　筑後市教育委員会　2002年
小林勇作「筑後市内における西海道関連遺跡の概要」西海道古代官衙研究会資料　2002年
5. 木下良「日本の古代道路」『古代文化』Vol47-4　1995年
6. 3に同じ
7. 小鹿野亮「四　古代の官道－筑紫野市域における調査－」『筑紫野市史』資料編（上）考古資料　筑紫野市　2001年
8. 北郷泰道「東大寺盂樂と日向－神話化の構造」『えとのす』32　1987年
「道路状遺構」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-13-小郡市所在薬師堂東遺跡の調査』中巻　福岡県教育委員会　1988年

早田泉「古代道路に残された圧痕」『東京考古』第9号　1991年
9．3に同じ
10．近江俊秀『古代道路遺構の構造』『文化財学論集』文化財学論集刊行会　1994年
11．「岡田地区遺跡群Ⅱ」筑紫野市文化財調査報告書第56集　筑紫野市教育委員会　1998年
12．1に同じ
13．山本信夫「統計上の土器－歴史時代土師器の編年研究によせて－」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古希記念論集刊行会　1990年
山本信夫古代の土器研究会第1回シンポジウム資料　1992年
14．「下見遺跡」『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財報告書第4集』久留米市教育委員会　1985年
松村一良「筑後国府の調査」『古代文化』第35巻第7号　1983年
15．「干潟遺跡」福岡県文化財調査報告書第59集　福岡県教育委員会　1980年
16．「生産遺跡調査報告書Ⅱ」熊本県文化財調査報告書第48集　1980年
「大江遺跡群Ⅱ-大江遺跡群第3次調査区発掘調査報告書」　熊本市教育委員会　1993年
網田龍生「古代肥後の土器」『先史学・考古学研究　熊本大学文学部考古学研究室創設20周年記念論文集』龍田考古会　1994年
17．一般的に使用される「竪穴住居」とは明らかに異なると考えられるため「竪穴」と表記をしているに過ぎない。
18．「前津甲ノ上遺跡Ⅱ」筑後市文化財調査報告書第22集　筑後市教育委員会　1999年
19．「宮原遺跡Ⅱ」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財報告書-17-』　福岡県教育委員会　1990年
20．18に同じ
「熊野塚根遺跡」「筑後市内遺跡群Ⅲ」筑後市文化財調査報告書第44集　2002年
「狐犬塚中道遺跡」筑後市文化財調査報告書第47集　2003年
21．11に同じ
22．小田和利「北部九州のカマドについて」『文化財学論集』文化財学論集刊行会　1994年
23．11に同じ
24．網田龍生「肥後における竪穴住居の終焉」『肥後考古』第10号　肥後考古学会　1997年
25．高橋誠一「第二節　筑後国」『古代日本の交通路Ⅳ』大明堂　1979年
26．木下良「『車路』考－西海道における古代官道の復元に関して－」『歴史地理研究と都市研究』上　大明堂　1978年
5に同じ
木下良「古代の交通路」『講座古代の考古地理学』5（生産と流通）学生社　1989年
27．日野尚志「筑後国　上妻・下妻・山門・三毛　四郡における条里について」『佐賀大学教育学部研究論文集』第26集（1）　1978年
日野尚志「筑後国の郡家について」『佐賀大学教育学部研究論文集』第36集　1988年
28．松村一良「筑後地方を縦断する古代駅路」『MUSEUM　KYUSHU第9号』　博物館等建設推進九州会議　1983
29．日野尚志「筑後国上妻郡家について－『筑後国風土記』逸文の内容を中心として－」『広島史学研究会』広島史学研究会　1972年

参考文献

『古代官道・西海道肥前路』佐賀県教育委員会　1995年
『東遺跡』『岡田地区遺跡群Ⅰ』筑紫野市文化財報告書第51集　筑紫野市教育委員会　1996年
『高瀬遺跡－第18次調査－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第699集　福岡市教育委員会　2002年
『筑後国府跡・国分寺跡』久留米市文化財報告書第59集　久留米市教育委員会　1989年
『久留米市史』第十二巻　資料編　考古　歴史時代②　久留米市　1994年
『大善田村ノ前遺跡発掘調査報告書』都城市文化財調査報告書　第14集　都城市教育委員会　1981年
『歴史の空間構造』　藤岡謙二郎　矢守一彦　足利健亮　大明堂　1976年
『古代交通研究』第3号　古代交通研究会　1994年
『季刊考古学』第46号　雄山閣　1994年

Tab.7　羽犬塚山ノ前遺跡遺物観察表

【単位はcm、（）は復原値、*は残存長】

遺構	S-番号	Fig.	番号	R番号	名称	器種	口径	器高	底径	残存	備考
SD020	020	27	1	001	須恵器	坏	(15.0)	6.05	(9.3)	1/3	
SD020	020	27	2	002	瓦質土器	鍋脚	-	3.4*	-	脚片	
SD005	005	27	3	002	土師器	小皿	-	1.70	-	破片	
SD005	005	27	4	001	土師器	小皿	-	0.8*	-	破片	
SD005	005	27	5	004	磁器	白磁碗	-	1.4*	3.60	底部完形	
SD005	005	27	6	003	磁器	染付碗	(11.6)	1.5*	-	口縁1/6	
SD022	022	27	7	004	須恵器	壺	-	3.7*	(11.8)	底部1/6	
SD022	022	27	8	001	土師器	小皿	8.8	1.30	(7.9)	口縁1/2	
SD022	022	27	9	002	土師器	小皿	-	1.1*	(7.1)	底部1/7	
SD022	022	27	10	005	瓦塼	丸瓦	-	-	-	破片	
SD 22	022	27	11	003	縄文土器	深鉢	-	5.4*	-	破片	押型文土器
焼茶褐色土		27	12	013	須恵器	壺	-	6.5*	-	把手片	
焼茶褐色土		27	13	004	須恵器	壺	-	3.65*	-	胴片	
焼茶褐色土		27	14	001	土師器	皿	(15.05)	2.00	(12.0)	1/4	
焼茶褐色土		27	15	002	土師器	椀	-	12.0)	(8.0)	脚片	
焼茶褐色土		27	16	012	土師器	椀	-	2.4*	(8.8)	底部1/3	
焼茶褐色土		27	17	003	土師器	椀	-	2.2*	-	細片	
焼茶褐色土		27	18	005	瓦質土器	鍋り部	-	5.5*	-	細片	
焼茶褐色土		27	19	011	瓦質土器	こね鉢	-	4.6*	-	細片	
焼茶褐色土		27	20	008	磁器	皿	-	1.3*	-	細片	
焼茶褐色土		27	21	006	磁器	椀	-	2.1*	-	細片	
焼茶褐色土		27	22	007	磁器	椀	-	3.1*	-	細片	
焼茶褐色土		27	23	009	磁器	皿	-	1.4*	-	細片	
焼茶褐色土		27	24	010	石製品	石鏃	-	-	-	両脚欠	
SB300	111	28	25	001	土師器	甕	-	2.5*	-	細片	
SB 10	091	28	26	001	土師器	坏	(13.15)	3.10	(8.0)	1/3	
SX210	052	28	27	001	土師器	坏	-	3.75*	-	口縁部細片	
SX215	076	28	28	001	土師器	坏	-	0.8*	(10.15)	細片	
S 085	085	28	29	003	須恵器	坏	12.90	3.30	9.20	5/6	
S085	085	28	30	025	須恵器	甕	-	9.6*	-	口縁1/3	
S085	085	28	31	0 8	土師器	蓋	(13.0)	2.1*	-	口縁1/3	
S10 5	085	28	32	004	土師器	蓋	14.55	2.90	-	完形	
S085	085	28	33	013	土師器	蓋	15.40	2.8*	-	口縁1/4	
S10-5	085	28	34	001	土師器	坏	12.65	3.60	8.95	完形	
S1085	085	28	35	016	土師器	坏	(12.9)	4.00	9.2)	底部1/2	
S1085	085	28	36	002	土師器	坏	(12.80	3.75	9.50)	2/3	
S1088	085	28	37	011	土師器	坏	(13.2)	4.30	(8.0)	底部1/2	
S1085	085	28	38	019	土師器	坏	(13.2)	3.50	(7.4)	底部完形	
S1085	085	28	39	018	土師器	坏	(12.8)	3.20	(8.6)	底部1/4	
S1085	085	28	40	017	土師器	坏	(13.3	2.90	(9.8)	底部1/4	
S1085	085	28	41	015	土師器	坏	(12.9)	3.00	7.70	底部1/3	
S1085	085	28	42	007	土師器	坏	(13.10	3.00	8.20	底部完形	
S1085	085	28	43	012	土師器	皿	(15.4)	2.25	(13.0)	底部2/5	
S1085	085	28	44	020	土師器	皿	(16.4)	1.70	(13.6)	口縁1/3	
S1085	085	28	45	005	土師器	皿	(16.1)	2.35	(12.0)	3/5	
S1085	0 5	28	46	006	土師器	椀	(17.3)	6.75	9.20	3/5	
S1085	085	28	47	009	土師器	椀	(14.5)	5.80	(8.7)	高台部1/4	
S10 5	085	28	48	023	土師器	椀	-	1.6*	(9.0)	底部1/4	
S1085	085	28	49	010	土師器	高坏	(18.8)	3.1*	-	口縁1/5	
S1085	085	29	50	022	土師器	甕	(23.6)	5.4*	-	口縁1/12	
S1085	085	29	51	021	土師器	甕	(22.4)	12.9*	-	口縁1/10	
S1085	085	29	52	024	土製品	土錘	幅3.6	幅4.0	孔2.5	-	
S10 5遺体下	085	30	53	028	須恵器	坏	-	2.8*	-	口縁部片	
S1085貼床下	085	30	54	027	土師器	蓋	-	2.0*	-	口縁部片	
S1085貼床下	085	30	55	026	土師器	坏	(13.0)	2.9*	-	口縁部片	
S1095	095	31	56	001	土師器	蓋	-	2.7*	(18.0)	1/8	
S1095	095	31	57	003	土師器	皿	(17.9	(2.05)	(11.8)	1/4	
S1095	095	31	58	002	土師器	皿	-	7.0*	(12.0)	脚片	

SI095	095	31	59	004	土師器	皿	-	1.4*	-	細片	
SI095	095	31	60	005	土師器	椀	-	2.1*	(9.1)	1/4	
SI095	095	31	61	014	土師器	甕	10.90	8.70	-	完形	
SI095	095	31	62	015	土師器	甕	11.70	10.85	-	完形	
SI095	095	31	63	016	土師器	甕	(18.5)	10.45	-	口縁部1/2欠	
SI095	095	31	64	006	土師器	壺	(26.0)	6.7*	-	1/7	
SI095	095	31	65	017	土師器	甑	26.40	23.90	11.40	ほぼ完形	
SI095	095	31	66	007	金属製品	耳環	-	-	-	完形	
SI095貼床下	095	31	67	008	土師器	坏	-	2.5*	-	細片	
SI095住居内土壙	095	31	68	009	土師器	坏	(14.0)	2.6*	(8.4)	細片	
SI095住居内土壙	095	31	69	010	土師器	皿	-	1.4*	-	細片	
SI095住居内土壙	095	31	70	012	土師器	鉢	-	7.25*	-	細片	
SI095住居内土壙	095	31	71	011	土師器	甕	-	2.05*	-	細片	
SI110	110	32	72	007	土師器	皿	(17.0)	1.15	12.20	1/4	
SI110	110	32	73	004	土師器	皿	(18.55)	2.20	(13.0)	1/5	
SI110	110	32	74	003	土師器	皿	(18.9)	2.30	(14.6)	1/5	
SI110	110	32	75	001	土師器	甕	-	2.6*	-	細片	
SI110	110	32	76	002	土師器	甕	-	5.7*	-	細片	
SI110床面	110	32	77	009	土師器	坏	13.40	3.25	9.40	完形	墨書土器
SI110床面	110	32	78	008	土師器	椀	15.70	6.40	9.55	完形	墨書土器
SI110貼床下	110	32	79	012	土師器	坏	3.6*	-	-	細片	
SI110堀内土壙	110	32	80	005	土師器	皿	-	2.05*	-	細片	
SI110堀内土壙	110	32	81	006	土師器	甕	-	7.6*	-	細片	
SI115	115	33	82	001	須恵器	坏	-	1.3*	-	細片	
SI115	115	33	83	006	土師器	皿	(13.15)	3.15	(8.0)	1/3	ヘラ書き「米」
SI115	115	33	84	002	土師器	坏	(13.4)	3.45	(9.0)	1/5	
SI115	115	33	85	005	土師器	皿	(16.1)	2.45	(12.0)	ほぼ完形	
SI115	115	33	86	004	土師器	鉢	(25.8)	10.1*	-	1/6	
SI115カマド	115	33	87	007	須恵器	坏	-	3.25*	-	細片	
SI115カマド	115	33	88	008	土師器	坏	-	3.85*	-	細片	
SX040	040	34	89	003	須恵器	壺	(7.6)	3.0*	-	口縁部1/4	
SX040	040	34	90	002	土師器	坏	(12.8)	3.50	(7.2)	1/4弱	
SX040	040	34	91	001	土師器	椀	-	1.9*	(7.4)	底部1/3	
SX100	100	35	92	006	弥生土器	壺	-	2.6*	(5.0)	1/4	
SX100	100	35	93	007	須恵器	蓋	-	1.4*	(18.0)	細片	
SX100	100	35	94	002	土師器	坏	12.80	3.80	7.60	1/2	
SX100	100	35	95	003	土師器	坏	(13.0)	3.5*	-	細片	
SX100	100	35	96	005	土師器	甕	-	5.9*	-	細片	
SX100	100	35	97	004	土師器	甕	-	3.05*	-	細片	
SX100床面	100	35	98	010	土師器	坏	12.95	4.20	7.55	1/4欠	
SX100淡茶褐色土	100	35	99	013	土師器	坏	(14.0)	3.0*	-	1/5	
SX100淡茶褐色土	100	35	100	011	土師器	甑	-	3.35*	-	細片	
SX100淡茶褐色土	100	35	101	012	土師器	甕	-	3.35*	-	細片	
SX100淡黒茶色土	100	35	102	001	土師器	坏	15.80	2.70	12.60	完形	
SX100淡黒茶色土	100	35	103	008	土師器	甕	-	3.8*	-	細片	
SX100淡灰黒色土	100	35	104	009	須恵器	壺蓋	-	1.7*	(12.0)	細片	
SX100カマド	100	36	105	019	土師器	椀	(16.10)	6.6*	(10.6)	1/4	暗文土器
SX100カマド	100	36	106	017	土師器	坏	(16.0)	3.0*	-	細片	
SX100カマド	100	36	107	020	土師器	甑	20.50	30.00	-	ほぼ完形	
SX100カマド	100	36	108	016	土師器	甕	-	2.5*	-	細片	
SX100カマド	100	36	109	018	土師器	甕	-	2.0*	-	細片	
SK045	045	37	110	001	土師器	坏	(12.0)	3.2*	-	口縁1/14	
SK045	045	37	111	002	須恵器	坏	(13.2)	1.5*	-	口縁1/16	
SK064	064	37	112	001	土師器	坏	-	1.8*	(8.4)	底部細片	
SK064	064	37	113	002	土師器	坏	-	1.45*	-	細片	
SK125	125	37	114	002	土師器	坏	-	0.85*	-	口縁部片	
SK125	125	37	115	001	土師器	蓋	-	1.0*	-	口縁部片	
SK150	150	37	116	001	土師器	椀	-	2.0*	(7.9)	底部1/7	
SK150	150	37	117	002	土師器	土鍋	-	2.3*	-	口縁片	
ST120	120	37	118	001	鉄製品	刀子	長38.1*	厚さ0.3	~厚さ0.6	刀身部	

SD035	035	38	119	006	須恵器	坏	-	2.7*	-	口縁細片	
SD035	035	38	120	005	須恵器	壺	-	4.2*	-	肩部細片	
SD036	036	38	121	001	土師器	蓋	-	1.75*	(18.0)	1/8	
SD035	035	38	122	002	土師器	坏	-	1.2*	(7.0)	細片	
SD035	035	38	123	003	土師器	椀	-	4.3*	(9.0)	1/3	
SD035	035	38	124	004	土師器	甑	-	4.2*	-	細片	
SD035	035	38	125	008	黒色土器	椀	-	1.8*	-	底部のみ	?
SD035	035	38	126	007	石製品	砥石車	-	-	-	縁は完形	重石製60.1g
SD055	055	38	127	001	土師器	坏	-	3.0*	-	口縁底部片	
SD035・055	155	38	128	016	須恵器	蓋	-	1.6*	-	破片	
SD035・055	155	38	129	018	須恵器	坏	(14.1)	4.80	(8.8)	底部1/4	
SD035・055	155	38	130	006	須恵器	坏	(12.45)	4.05*	(7.5g)	1/3	
SD035・055	155	38	131	014	須恵器	小皿×坏	-	0.8*	(7.1)	底部1/5	
SD035・055	155	38	132	007	須恵器	坏	-	1.1*	-	細片	
SD035・055	155	38	133	023	須恵器	皿	(13.0)	1.80	(10.0)	1/6	
SD035・055	155	38	134	024	須恵器	甕	-	2.25	-	細片	
SD035・055	155	38	135	017	須恵器	甕	-	3.0*	-	口縁部片	
SD035・055	155	38	136	020	須恵器	甕	(30.2)	8.3*	-	1/3	
SD035・055	155	38	137	021	須恵器	甕	(18.2)	4.0*	-	1/5	
SD035・055	155	38	138	019	須恵器	甕	-	7.9*	-	破片	
SD035・055	155	38	139	009	土師器	蓋	-	1.7*	-	ツマミのみ	
SD035・055	155	38	140	003	土師器	坏	(13.90)	3.05*	(9.1)	1/2	
SD035・055	155	38	141	010	土師器	坏	14.50	3.85	9.40	口縁1/2	
SD035・055	155	38	142	001	土師器	坏	(13.95)	2.3*	-	1/7	
SD035・055	155	38	143	008	土師器	坏	-	1.1*	8.40	底部4/5	
SD035・055	155	38	144	025	土師器	坏	-	2.8*	-	細片	
SD035・055	155	38	145	022	土師器	皿	(14.8)	1.45	(11.7)	1/8	
SD035・055	155	38	146	015	土師器	皿	(18.0)	2.0*	(16.4)	口縁部1/9	
SD035・055	155	38	147	002	土師器	椀	-	1.65*	(9.2)	1/4	
SD035・055	155	38	148	011	土師器	高坏	-	4.1*	-	脚片	
SD035・055	155	38	149	004	土師器	鉢	-	4.5*	-	細片	
SD035・055	155	38	150	013	土師器	甕	(25.0)	5.1*	-	口縁十	
SD135	135	39	151	001	土製品	土錘	-	-	-	完形	
SD070	070	39	152	002	須恵器	甕	-	-	-	細片	
SD070	070	39	153	003	須恵器	甕	-	-	-	細片	
SD070	165	39	154	002	須恵器	壺	-	4.1*	-	細片	
SD070	166	39	155	001	須恵器	壺	-	1.6*	(8.0)	1/5	
SD070	070	39	156	001	土師器	坏	(12.7)	2.3*	-	口縁部細片	
SD070	070	39	157	004	石製品	砥石	-	-	-	完形	安山岩製
S 3050	050	40	158	003	須恵器	蓋	-	1.7*	-	口縁部片	
S 3050	050	40	159	002	須恵器	小壺	(6.8)	1.0*	-	口縁1/7	
SD050	050	40	160	004	須恵器	壺	-	1.7*	-	破片	
SD050	050	40	161	005	須恵器	甕	-	10.3*	-	破片	
SD180	160	40	162	009	土師器	蓋	-	2.0*	ツマミ径5.6	1/4	淡黒灰色土
SD050	050	40	163	001	土師器	甕	-	1.8*	-	口縁部片	
SD050	050	40	164	006	土師器	甑	-	7.9*	(22.0)	底部1/10	
SD060	160	40	165	007	須恵器	坏	-	1.8*	-	高台部片	
SD060	160	40	166	006	須恵器	壺	(12.4)	2.0*	-	口縁部片	
SD060	160	40	167	008	須恵器	甕	(31.0)	6.6*	-	口縁部片	
SD060	160	40	168	005	須恵器	甕	-	7.6*	-	口縁部片	
SD060	160	40	169	004	土師器	甕	-	5.2*	-	口縁部片	
SD060	160	40	170	010	土師器	壺	-	-	-	細片	
SD050	160	40	171	011	土製品	土錘	径5.6*	厚1.85	孔3.7	若干欠損	
SD060	060	40	172	001	土製品	土錘	径5.6	孔厚0.8	孔3.7	縁は完形	重さ15.6g
帯状硬化層上⑧		41	173	003	須恵器	坏	-	1.5*	-	細片	
帯状硬化層上②		41	174	002	須恵器	皿	-	0.8*	(6.0)	底片	
帯状硬化層上①		41	175	002	須恵器	壺	(11.0)	4.05*	-	口縁部片	
帯状硬化層上⑥		41	176	001	須恵器	壺	-	2.6*	(12.0)	底部片	
帯状硬化層上④		41	177	001	須恵器	甕	-	2.7*	-	肩部細片	
SD025	025	42	178	003	須恵器	甕	-	5.5*	-	胴下	

SD025	025	42	179	002	土師器	甕	-	1.2*	-	細片	
SD025	5	42	180	001	土師器	甕	-	8.95	(5.05)	細片	
SD080	080	42	181	001	土師器	坏	(15.0)	3.25	(10.0)	1/8	
SD08	80	42	182	002	土師器	土製	-	3.7*	-	細片	
SX078	078	43	183	004	須恵器	壺	-	2.6*	(12.0	1/4	
SX075	075	43	184	005	須恵器	甕	-	8.2*	-	細片	
SX075	075	43	185	002	土師器	甕	-	2.1*	-	細片	
SX075	075	43	186	001	土師器	小皿	(9.25)	1.25*	(7.95)	1/8	
SX075	075	43	187	003	瓦質土器	擂り鉢	-	5.1*	(11.5)	1/6	
SX124	124	43	188	005	須恵器	壺	-	7.4*	-	頸部片	
SX124	124	43	189	003	須恵器	壺	-	3.4*	-	破片	
SX124	124	43	190	004	須恵器	甕	-	3.5*	-	破片	
SX124	124	43	191	001	土師器	小皿	-	1.10	-	片	
SX124	124	43	192	002	土師器	小皿	-	0.8*	(6.6)	底部1/7	
SX 90	090	44	193	0	須恵器	坏	(14.0	2.9*	-	1/8	
SX090	090	44	194	008	須恵器	坏	-	2.25*	(10.0)	破片	
SX090	090	44	195	011	須恵器	甕	-	3.7*	-	細片	
SX090	090	4	196	007	須恵器	甕	-	7.8*	-	底部細片	
X090	0	44	197	010	須恵器	甕	-	5.0*	-	肩部片	耳付き
SX090	090	44	198	002	須恵器	甕	(19.6)	5.5*	-	1/4	
SX090	090	44	199	005	土師器	蓋	-	2.95*	-	天井部片	ツマミ径2.7
SX 90	090	44	200	017	土師器	坏	12.70	3.80	7.70	1/2	
SX0	90	44	201	019	土師器	坏	11.80	3.25	6.70	1/2	
SX090	090	44	202	014	土師器	坏	(10.9)	3.75	(7.0)	1/3	
SX090	090	44	203	018	土師器	坏	13.30	4.00	8.80	2/3	
SX090	090	44	204	6	土師器	坏	-	1.6*	(12.0)	1/4	
SX090	090	44	05	015	土師器	坏	12.30	3.10	7.60)	ほぼ完形	
SX090	090	44	206	001	土師器	坏	12.60	3.00	7.35	ほぼ	
SX090	090	44	207	016	土師器	坏	13.00	3.05	7.45	1/2	
SX090	090	44	208	012	土師器	皿	(15.4	1.80	(12.4)	1/4	
S 090	090	44	2 9	013	土師器	皿	(15.9)	1.90	(12.4)	1/4	
SX090	090	44	210	020	土師器	椀	15.40	6.10	8.40	1/2	墨書「上妻大」
SX090	090	44	211	3	土師器	甕	(19.25)	5.9*	-	1/4	
SX130	130	45	212	020	須恵器	蓋	(16.6)	1.5*	-	口縁部1/6	
SX130	130	45	213	023	須恵器	坏	-	6.1*	-	頸部片	
SX130	130	45	214	022	須恵器	壺	-	6.1*	-	口縁部片	
SX130	130	45	215	021	須恵器	甕	-	1.7*	-	口縁部片	
SX130	1 0	45	216	017	土師器	蓋	(13.95)	1.55*	-	1/8	
SX130	13	45	217	018	土師器	蓋	(17.0)	2.25	-	1/	
SX130	130	45	218	008	土師器	坏	(12.55)	3.85	(8.5)	1/2	
X130	130	45	219	002	土師器	坏	(15.2)	4.55	8.05)	1/	
SX130	130	45	220	0	土師器	坏	(13.50)	3.95	(7.55)	1/4	
SX130	130	45	221	009	土師器	坏	(13.10)	3.45	(7.45)	1/3	
SX130	130	45	222	012	土師器	坏	-	1.75	(8.15)	1/5	
SX130	130	45	223	004	土師器	坏	(13.75	3.30	(7.8)	1/3	
X130	130	45	224	006	土師器	坏	(14.4)	2.85	(8.0)	1/5	
X130	130	45	225	007	土師器	坏	(15.1)	3.30	(8.0)	1/5	
SX130	130	45	226	005	土師器	坏	(13.2)	2. 0	(8.0)	1/4	
SX130	130	45	227	014	土師器	皿	(16.30)	1.75	(12.0)	1/4	
SX130	1 0	45	228	013	土師器	皿	(14.55)	1.85	(12.0)	1/5	
SX130	130	45	229	11	土師器	皿	(15. 0)	1.75	(12.05)	1/8	
S 130	130	45	230	016	土師器	皿	(15.30	1.95	(11.85)	1/4	
SX130	130	45	231	019	土師器	皿	15.60	1.90	12.00	ほぼ完形	
SX130	130	45	232	015	土師器	皿	(17.30)	1.60	(13.20)	1/5	
SX130	130	45	233	003	土師器	椀	-	1. 5*	.9.0)	1/2	
SX130	130	45	234	001	土師器	椀	(11.85)	5.70	(8.0)	2/3	
SX130	1 0	45	235	025	土師器	鉢	(17.0)	5.5*	-	口縁1/10	
SX130	130	45	2 6	026	土師器	鉢	(16.6)	4.9*	-	口縁1/10	
SX130	130	45	237	024	土師器	鉢	(15.3	2.3*	-	口縁1/8	
SX130	130	45	238	0 0	土師器	鉢	(30.0	6.9*	-	口縁1/7	

SX130	130	45	239	031	土師器	甕	(25.6)	6.7*	-	口縁1/6	
SX130	130	46	240	029	土師器	甕	(22.0)	6.5*	-	口縁1/6	
SX130	130	46	241	032	土師器	甕	(20.6)	8.0*	-	口縁1/3	
SX130	130	46	242	027	土師器	甕	-	9.0*	-	口縁片	
SX130	130	46	243	028	土師器	甕	-	8.5*	-	口縁片	
SX105	105	47	244	002	土師器	皿	-	1.7*	-	細片	
SX105	105	47	245	001	土師器	皿	-	0.7*	-	細片	
SP147	147	47	246	002	土師器	大蓋	-	1.9*	-	口縁片	
SP147	147	47	247	001	土師器	坏	-	2.4*	-	口縁片	
SP037	037	47	248	001	土師器	坏	-	2.35*	-	細片	
SP099	099	47	249	001	土師器	坏	(6.0)	2.65*	-	細片	
SP099	099	47	250	002	土師器	皿	(15.10)	1.90	(11.2)	1/4	
SP043	043	47	251	001	土師器	坏	(13.2)	3.70	(7.4)	底部1/4	
SP114	114	47	252	001	土師器	坏	(13.55)	2.60	(9.0)	1/4	
SP114	114	47	253	002	土師器	坏	-	3.3*	-	細片	
SP153	153	47	254	001	須恵器	坏	-	2.5*	(8.5)	底部1/6	
SP159	159	47	255	005	須恵器	壺	-	4.7*	(9.0)	1/4	
SP159	159	47	256	003	土師器	蓋	(16.0)	2.4*	-	細片	
SP159	159	47	257	002	土師器	皿	(15.4)	3.55	(8.0)	1/4	
SP159	159	47	258	001	土師器	皿	(15.85)	2.20	(10.9)	1/4	
SP159	159	47	259	004	土師器	甕	-	3.7*	-	細片	
SP178	178	47	260	001	土師器	坏	(12.6)	3.20	(7.6)	口縁部1/7	
SP178	178	47	261	002	土師器	坏	(12.7)	3.00	(7.8)	口縁部1/6	
SP178	178	47	262	003	土師器	坏	(15.3)	3.10	(8.3)	口縁部1/4	
淡茶黒土		47	263	007	須恵器	甕	(11.3)	3.95*	-	口縁部1/4	
淡茶黒土		47	264	004	土師器	蓋	-	1.45*	-	細片	
淡茶黒土		47	265	006	土師器	坏	-	1.8*	-	ツマミ	
淡茶黒土		47	266	002	土師器	皿	-	2.25*	-	底部～体部片	
淡茶黒土		47	267	001	土師器	椀	(13.4)	2.05	(10.0)	1/6	
淡茶黒土		47	268	005	土師器	椀	-	1.5*	(7.0)	底部細片	
淡茶黒土		47	269	003	土師器	鉢	-	1.9*	-	細片	
淡茶黒土		47	270	008	石製品	石	-	-	-	ほぼ完形	
SD050上淡黒茶色土	050	47	271	008	須恵器	坏	-	1.4*	(6.7)	底部1/2	
SD050上淡黒茶色土	050	47	272	007	須恵器	坏	-	3.0*	(6.4)	底部1/4	
淡黒茶色土②		47	273	001	須恵器	坏	-	1.0*	(8.0)	底部細片	
SD050上淡黒茶色土	050	47	274	010	須恵器	甕	(21.7)	4.2*	-	口縁部1/11	
SD050上淡黒茶色土	050	47	275	009	須恵器	甕	-	2.7*	-	口縁部片	
SD050上淡黒茶色土	050	47	276	012	須恵器	壺	-	6.8*	-	破片	
SD050上淡黒茶色土	050	47	277	011	須恵器	壺	(14.9)	2.3*	-	口縁部1/10	
SD055上淡黒茶色土	055	47	278	002	土師器	坏	-	2.85*	-	口縁細片	
淡黒茶色土②		47	279	002	土師器	坏	-	2.3*	-	細片	
淡黒茶色土②		47	280	003	土師器	坏	(13.5)	3.70	(7.7)	1/4	
淡黒茶土①		47	281	001	土師器	坏	-	-	-	底部細片	
淡黒茶土①		47	282	002	土師器	片口鉢	-	4.1*	-	口縁部細片	
淡黒灰色土		48	283	003	須恵器	壺	-	5.6*	-	破片	
淡黒灰色土		48	284	001	土師器	蓋	-	3.0*	-	ツマミ口縁欠	
淡黒灰色土		48	285	021	土師器	蓋	22.60	5.00	-	3/4	
淡黒灰色土		48	286	009	土師器	坏	(13.1)	3.30	(9.3)	底部1/6	
淡黒灰色土		48	287	012	土師器	坏	(11.9)	3.00	(6.8)	底部1/2	
淡黒灰色土		48	288	010	土師器	皿	(17.2)	2.20	(12.6)	底部1/7	
淡黒灰色土		48	289	025	土師器	皿	(16.2)	2.35	(12.2)	1/4	
淡黒灰色土		48	290	011	土師器	皿	(13.8)	2.20	(10.2)	底部2/5	
淡黒灰色土		48	291	008	土師器	皿	-	1.5*	-	口縁部片	
淡黒灰色土		48	292	013	土師器	椀	-	4.1*	(8.2)	底部1/6	
淡黒灰色土		48	293	023	土師器	椀	-	4.0*	-	細片	
淡黒灰色土		48	294	019	土師器	大椀	23.00	10.60	10.80	口縁1/2欠	
淡黒灰色土		48	295	007	土師器	坏×椀	-	1.7*	-	高台1/3	
淡黒灰色土		48	296	026	土師器	椀	-	3.15*	-	細片	
淡黒灰色土		48	297	002	土師器	甕	(33.2)	11.3*	-	口縁部1/8	
淡黒灰色土		48	298	022	土師器	甕	-	1.9*	-	細片	

黒褐灰色土		48	299	024	土師器	甕	-	2.6*	-	細片	
淡黒灰色土		48	300	015	土師器	甕	-	-	-	把手のみ	
淡黒灰色土		48	301	017	土師器	鉢	-	8.1*	-	口縁部片	
淡褐灰色土		48	302	018	土製品	壺	-	6.25*	-	底片	
淡黒灰色土		48	303	016	土製品	壺	-	12.00	-	底部片	
淡黒灰色土		48	304	004	緑釉陶器	椀	-	1.1*	(4.8)	底部1/5	
淡黒灰色土		48	305	014	土製品	土錘	-	-	-	3/4	
淡黒灰色土		48	306	005	石製品	石鏃	-	-	-		黒曜石製
黒褐直上淡茶色土		49	307	010	須恵器	蓋	-	1.0*	(7.8)	底部細片	
黒褐直上淡茶色土		49	308	015	須恵器	蓋	-	1.2*	-	ツマミ片	
黒褐直上淡茶色土		49	309	007	須恵器	坏	-	1.5*	-	高台部片	
褐直上淡茶色土		49	310	008	須恵器	壺	-	1.8*	-	高台部片	
黒褐直上淡茶色土		49	311	012	須恵器	壺	-	2.25*	(12.0)	底部細片	
黒褐直上淡茶色土		49	312	014	須恵器	壺	-	3.0*	-	口縁部細片	
黒褐直上淡茶色土		49	313	013	須恵器	壺	-	3.9*	-	口縁部細片	
黒褐直上淡茶色土		49	314	004	須恵器	壺	-	4.0*	-	頸部のみ	
黒褐直上淡茶色土		49	315	011	須恵器	壺	-	3.35*	(11.4)	底部1/3	
黒褐直上淡茶色土		49	316	009	須恵器	壺	-	2.0*	-	高台部片	
黒褐直上淡茶色土		49	317	016	須恵器	壺	-	2.9*	-	肩部細片	
黒褐直上淡茶色土		49	318	003	土師器	椀	-	2.65*	(8.9)	底部1/5	
黒褐直上淡茶色土		49	319	002	土師器	椀	-	3.5*	9.20	底部3/4	
黒褐直上淡茶色土		49	320	001	土師器	小皿	(7.9)	2.0*	-	口縁部1/10	
黒褐直上淡茶色土		49	321	017	土師器	甕	-	3.8*	-	把手部	
黒褐直上淡茶色土		49	322	018	瓦	丸瓦	-	-	-	細片	
黒褐直上淡茶色土		49	323	005	土製品	土錘	-	-	-	一部欠損	
表土		49	324	005	須恵器	蓋	(16.9)	2.4*	-	1/4	
表土		49	325	001	土師器	坏×皿	(12.4)	2.05	(8.8)	細片	
表土		49	326	002	土師器	坏	(14.1)	1.90	(10.0)	細片	
表土		49	327	004	緑釉	皿	(14.0)	2.3*	-	1/4	
表土		49	328	003	土製品	土錘	長35.9	幅1.95	孔径0.45	完形	

S-1	須恵器	坏片、甕片
	土師器	坏×皿片、甕片
S-2	土師器	坏片、甕片、片
S-3	土師器	片
S-4	土師器	坏×皿片、甕片、甕把手片
S-5	須恵器	坏片、蓋片、甕片
	土師器	坏片、小皿片（糸切り）、甕片
	磁器	椀片、染付皿×椀片
	土製品	粘土塊
	その他	滓
S-6	土師器	坏片（手持ちヘラ）、坏×皿片、甕片
S-7	土師器	坏×皿片、甕片
S-8	土師器	坏×皿片
	陶器	擂り鉢
S-9	須恵器	坏片
	土師器	坏片、小皿片（糸切り）
	磁器	白磁片
	その他	滓
S-11	須恵器	甕片
	土師器	甕片、片
S-12	須恵器	甕片
	土師器	坏×皿片、甕片
	土製品	土錘
S-13	土師器	甕片、片
S-14	土師器	甕片、坏×皿片
S-15	土師器	甕片、片
S-16	須恵器	甕片
	土師器	坏×皿片、片
S-17	土師器	坏×皿片、甕片
S-18	土師器	甕片
S-19	土師器	甕片
S-20	須恵器	坏片、甕片
	土師器	坏×皿片、小皿片（糸切り）、甕片 鍋片、甕把手片
	磁器	白磁片
	瓦質土器	擂り鉢片
	土製品	鞴片？
	その他	滓
S-21	なし	
S-22	須恵器	坏片、甕片、壺片
	土師器	坏片（糸切り）、小皿片（糸切り） 甕片
	黒色土器	A類椀片
	磁器	染付片
	瓦器	丸瓦片
	縄文土器	押型文土器
	その他	滓
S-23	須恵器	甕片
	土師器	片
S-24	土師器	坏×皿片
S-25	須恵器	坏片、甕片
	土師器	坏片（糸切り）、小皿片（糸切り） 甕片
	その他	滓
S-26	なし	
S-27	土師器	坏片（ヘラ削り）
S-28	なし	
S-29	土師器	坏×皿片
S-30	土師器	甕片
S-31	土師器	坏片
S-32	土師器	坏片、片
S-33	土師器	甕片
S-33	土師器	甕片
S-34	土師器	坏×皿片
S-35	須恵器	坏片、甕片、壺片
	土師器	坏片、蓋片、椀片、高坏片 鍋片、甕把手片、坏×皿片
	黒色土器	A類椀片
	石製品	滑石製紡錘車
	その他	滓
S-36	土師器	坏片
S-37	土師器	坏片（底部）、甕片
S-38	土師器	坏片
S-39	土師器	坏片（ヘラ削り）
S-40	須恵器	壺片、甕片
	土師器	椀片、坏片（体部穿孔）、甕片
S-41	土師器	片
S-42	土師器	坏片（体部までヘラ削り）
S-43	須恵器	壺片
	土師器	坏片
S-44	土師器	坏×皿片
S-45	須恵器	坏片
	土師器	坏片、甕片
S-46	土師器	坏片
S-47	土師器	坏片
	その他	粘土塊
S-48	土師器	坏片、甕片
S-49	土師器	坏片
S-50	須恵器	坏片、蓋片、小壺片、甕片
	土師器	坏×皿片、甕片、鍋片、坏片
S-51	土師器	坏片
S-52	土師器	坏片
S-53	土師器	坏片、甕片
S-54	土師器	片
S-55	土師器	坏片（手持ちヘラ）、甕片、鍋片
S-56	須恵器	坏片
S-57	土師器	片
S-58	土師器	甕片
S-59	土師器	坏片、甕片
S-60	土師器	甕片
	土製品	土錘
S-61	土師器	片
S-62	土師器	坏片、甕片
S-63	土師器	片
S-64	土師器	坏片（墨書？）、甕片
	その他	粘土塊
S-65	なし	
S-66	土師器	甕片、片
S-67	土師器	坏×皿片、甕片
S-68	土師器	坏片、甕片
S-69	土師器	坏×皿片、甕片
S-70	須恵器	甕片
	土師器	坏片
	石製品	砥石？
S-71	土師器	坏×皿片、甕片
S-72	土師器	坏×皿片、高坏片
S-73	土師器	坏×皿片
S-74	土師器	坏×皿片
S-75	須恵器	蓋片、坏片、甕片、壺片
	土師器	坏片（糸切り）小皿片（糸切り）甕把手
	瓦質土器	擂り鉢片
	その他	滓
S-76	土師器	坏片、片
S-77	土師器	坏×皿片（ヘラ）、高坏片、壺片、甕片
S-78	土師器	甕片
S-79	土師器	甕片
S-80	須恵器	甕片
	土師器	坏片（ヘラ）、甕片、土錘片
S-81	土師器	坏片、甕片
S-82	土師器	坏×皿片
S-83	土師器	坏×皿片、甕片
S-84	土師器	坏片、片
S-85	須恵器	坏片、甕片
	土師器	坏片（ヘラ削り）、椀片、皿片、甕片 蓋片、高坏片
	土製品	移動式カマド
	その他	粘土塊
S-85貼床下	須恵器	坏片、壺片
	土師器	坏片、蓋片、甕片
S-86	須恵器	壺片
	土師器	甕片
	磁器	染付片
S-87	須恵器	甕片

Tab.8 出土遺物一覧表(1)

遺構	種別	内容
S-88	土師器	坏×皿片、甕片
	土師器	甕片、片
S-89	土師器	片
S-90	須恵器	坏片、甕片
	土師器	蓋片、皿片、坏（ヘラ削り・切り）椀片（墨書）、甕片
S-91	土師器	坏片
S-92	その他	粘土塊
S-93	土師器	坏片、甕片
S-94	土師器	坏片、片
S-95	土師器	坏片、皿片、蓋片、椀片、甕壷片、瓶片
	磁器	染付
	金属製品	耳環
	その他	粘土塊
S-95貼床下	土師器	坏片
S-95住内土壙	土師器	坏片（手持ちヘラ）、皿片、鉢片、甕片
	その他	粘土塊
S-96	土師器	片
S-97	土師器	坏×皿片、甕片
S-98	土師器	坏片
S-99	土師器	坏片、蓋片、皿片
S-100	弥生土器	壷片
	須恵器	蓋片、甕片
	土師器	坏片（墨書）、坏片、皿片、甕片
S-100暗黒茶色土	土師器	甕片
S-100淡褐茶色土	須恵器	片
	土師器	坏片
	その他	粘土塊
S-100淡黒茶色土	須恵器	甕片
	土師器	坏片、坏×皿片、甕片
	その他	粘土塊
S-100淡灰黒色土	須恵器	壷片、甕片
	土師器	坏片、甕片
S-100淡茶褐色土	須恵器	甕片
	土師器	坏片、甕片、瓶片
	その他	粘土塊
S-100床面	土師器	坏
S-100カマド	土師器	坏、椀片（暗文あり）、甕×瓶片
S-101	土師器	坏×皿片
S-102	なし	
S-103	土師器	坏片、甕片
S-104	土師器	甕片
S-105	須恵器	坏片、甕片
	土師器	椀片、小皿片（糸切り）、甕片
	磁器	白磁片
S-106	なし	
S-107	土師器	坏片、甕片
S-108	なし	
S-109	土師器	片
S-110	土師器	皿片、甕片、瓶片？
	土師器	坏×皿片、甕片
	土製品	土錘
	その他	粘土塊
S-110楕円土壙	土師器	坏×皿片、甕片
S-110カマド前	土師器	皿片
S-110袖部	土師器	椀（削り出し高台）、坏
S-110カマド	土師器	甕片
	その他	粘土塊
S-110貼床下	土師器	坏片（手持ちヘラ）、甕片
S-111	須恵器	甕片
	土師器	坏×皿片、甕片
S-112	土師器	片
S-113	土師器	片
S-114	土師器	坏片（体部墨書あり）、皿片、甕片
	その他	粘土塊
S-115	須恵器	坏片
	土師器	坏片、皿片、高坏片、鉢片、瓶片？
S-115カマド	須恵器	坏片
	土師器	坏×皿片、坏片、甕片（丹塗り）
S-116	土師器	甕片
S-117	その他	粘土塊
S-118	土師器	坏片、甕片
S-119	土師器	坏×皿片、甕片
S-120	須恵器	甕片
	土師器	片
	磁器	染付片
	鉄製品	刀子
S-121	土師器	坏×皿片、甕片
	その他	粘土塊
S-122	須恵器	壷片
	土師器	坏×皿片
	その他	粘土塊
S-123	土師器	坏×皿片
S-124	須恵器	坏片、甕片、壷片
	土師器	坏片（糸切り）、小皿片（糸切り）甕片
	その他	滓
S-125	須恵器	坏片
	土師器	蓋片、坏片
S-126	土師器	片
S-127	土師器	片
S-128	土師器	坏片、甕片
S-129	須恵器	甕片
	土師器	坏片
S-130	須恵器	坏片、瓶片、壷片、甕片
	土師器	坏片、椀片、蓋片、鉢片、皿片、甕片
	土製品	移動式カマド
S-131	土師器	甕片
S-132	土師器	甕片
S-133	須恵器	甕片、坏×蓋片
	土師器	甕片
S-134	須恵器	甕片
	黒色土器	A類椀片
	磁器	青磁椀片、染付片
	陶器	片
	石製品	石鏃
	その他	粘土塊
S-135	土製品	土錘
S-136	土師器	片
S-137	須恵器	坏片
	土師器	甕片、片
S-138	なし	
S-139	土師器	蓋片
S-140	須恵器	甕片
	土師器	坏×皿片、片
S-141	土師器	坏片、甕片
S-142	土師器	片
S-143	土師器	坏×皿片
S-144	土師器	甕片
S-145	なし	
S-146	土師器	坏片
S-147	須恵器	甕片
	土師器	坏片、鉢片、蓋ツマミ片、甕片
S-148	土師器	坏片、甕片
S-149	磁器	白磁片
S-150	須恵器	壷片
	土師器	坏×皿片（糸切り）椀片、甕片、土鍋片
S-150 I層	土師器	坏片、土鍋片、甕片
S-150 II層	須恵器	甕片
	土師器	坏×皿片、甕片
S-151	土師器	片
S-152	土師器	甕片
S-153	須恵器	坏片
S-154	土師器	坏片、坏×皿片
S-155	須恵器	坏片、蓋片、甕片、壷片、皿片
	土師器	坏片、坏×皿片、甕片、瓶片、高坏片椀片、鉢片
S-155淡黒灰色土	須恵器	甕片
	土師器	片
S-155暗黒色土	須恵器	皿片、甕片
	土師器	皿片、甕片
S-155暗黒灰色土	土師器	坏片（外面丹塗り）、甕片、片

Tab.8 出土遺物一覧表(2)

S-156	
土師器	坏片、片
S-157	
土師器	片
S-158	
土師器	坏片、甕片
S-159	
須恵器	甕片、壺片
土師器	坏片、蓋片、皿片、甕片
S-160	
須恵器	坏片、甕片、壺片
土師器	坏×皿片、椀片、甕片、甕起手片 坏片、壺片
土製品	土錘
S-161灰黒灰色土	
土師器	坏片、坏×皿片、蓋片、甕片
S-161淡茶色土	
須恵器	壺片、甕片
S-161	
土師器	片
S-162	
土師器	片
S-163	
土師器	甕片
S-164	
なし	
S-165	
須恵器	坏片、蓋片、甕片、壺片
土師器	坏×皿片、甕片、甕起手
S-166	
なし	
S-167	
土師器	坏片
S-168	
なし	
S-169	
須恵器	甕片
土師器	坏片、甕片
S-170	
須恵器	甕片
土師器	坏×皿片、甕片
S-171	
土師器	片
S-172	
土師器	坏×皿片、片
S-173	
須恵器	甕片
土師器	坏片、坏×皿片
S-174	
須恵器	甕片
土師器	小皿片
磁器	青磁椀
S-175	
なし	
S-176	
須恵器	甕片
S-177	
須恵器	甕片
土師器	坏片
S-178	
土師器	坏片
S-179	
須恵器	坏片、甕片
土師器	片
S-180	
須恵器	坏片、甕片
土師器	坏×皿片、甕片、片
S-181	
土師器	甕片
S-182	
土師器	坏×皿片
S-183	
土師器	甕片
S-184	
土師器	坏片
S-186	
土師器	坏×皿片

S-187	
須恵器	甕片
土師器	坏片、片
S-188	
土師器	片
S-189	
土師器	片
S-191	
土師器	片
S-192	
土師器	坏片、片
S-193	
土師器	蓋片
路面突き固め	
須恵器	坏片、甕片、壺片
土師器	甕片、坏×皿片、甕起手片
須恵器	坏片、甕片、壺片
土師器	坏片、皿片、蓋片、甕片、甕起手片
淡灰灰色土	
須恵器	短頸壺、坏片
土師器	坏片、椀片、甕片、蓋片、大椀、鉢片 甑片、鉢片
磁器	染付片
陶器	緑釉陶器片
土製品	土錘、移動式カマド片
その他	粘土塊
Ⅱ面整地層	
①明黒灰色土	
②淡茶黒色土	
土師器	小皿（赤切り）
②淡茶黒色土	
須恵器	坏片、蓋片、甕片
③淡茶褐色土	
須恵器	甕片、壺片
土師器	椀片、坏×皿片、甕片
磁器	白磁合子蓋片？
瓦質土器	鉢片
④明茶黒色土	
須恵器	坏片、甕片
土師器	坏片、甕片
その他	浮
⑤明茶黒色土	
⑦淡黒褐色土	
土師器	坏片（赤切り）
⑨淡褐茶色土	
須恵器	片
⑩淡茶褐色土	
須恵器	坏片、甕片、壺片
土師器	坏片（赤切り）、椀片、蓋片 皿片、甕片
磁器	青磁片、染付片
陶器片	片
瓦質土器	擂り鉢片
その他	粘土塊
⑪淡灰色土	
須恵器	坏片、甕片、壺片
瓦質土器	擂り鉢片
表土	
須恵器	坏片、甕片、蓋片、壺片
土師器	坏片、椀片、甕片、鍋片
黒色土器	A類椀片
瓦器	椀片
磁器	青磁片、染付片
陶器	片

Tab.8　出土遺物一覧表(3)

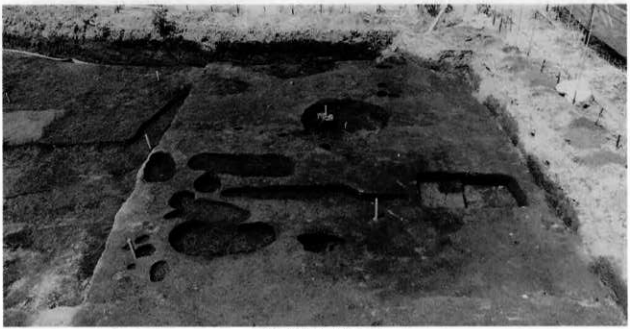
P L A T E

凡例

遺物写真右下の番号は、以下のとおりである。

I 面検出状況（南から）

I 面硬化部分検出状況（南から）



I 面完掘状況（南から）

I 面硬化部分土層観察（南から）

I 面硬化部分土層観察（南から）

II 面完掘状況（真上から）

II面完掘状況（南から）

SF010西側完掘状況（北側溝SD020は未掘）（東から）

SF010西側完掘状況（北側溝SD020は未掘）（東から）

SF010路面b-b'間土層観察（東から）

SF010路面a-a'間土層観察（東から）

SD001土層観察（西から）

SD020土層観察（西から）

SD022（g-g'間）土層観察（西から）

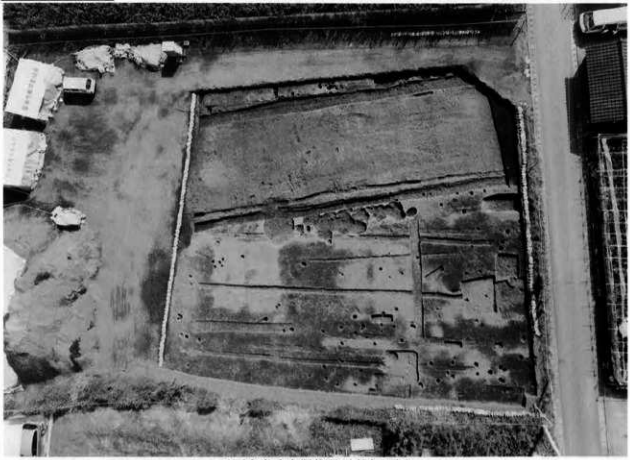
SD022（h-h間）土層観察（西から）

Pla.6

Ⅲ面北半分完掘状況（真上から）

Ⅱ面北半分完掘状況（南から）

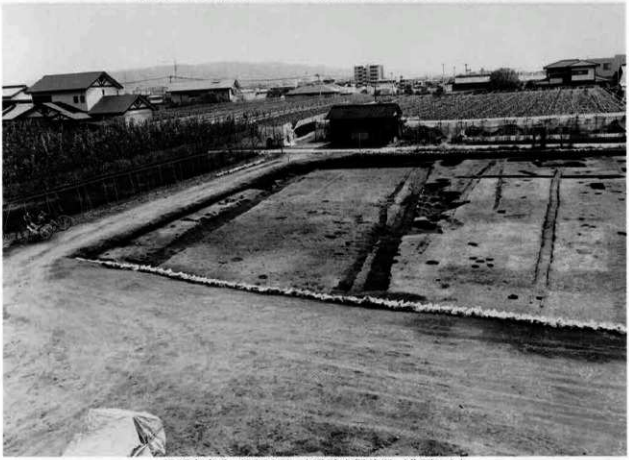
Ⅲ面北半分ピット群完掘状況（南から）



Ⅲ面南半分完掘状況（真上から）

Ⅲ面南半分（SF220）官道跡完掘状況（北から）

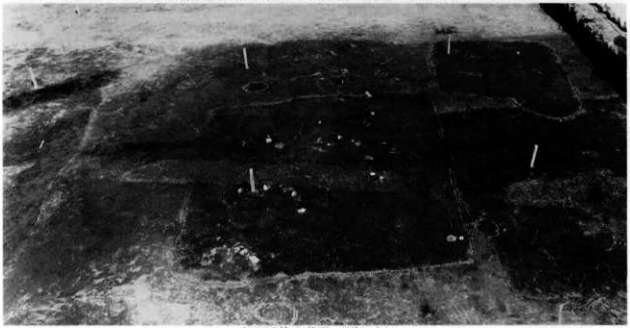
Ⅲ面南半分調査区遠景（左上の体育館が割犬塚中遺跡）（東から）



Ⅲ面南半分（SF220）官道跡完掘状況（北西から）

SI085、095、SX100検出状況（西から）

SI085、SX100完掘、SI095床面状況（東から）



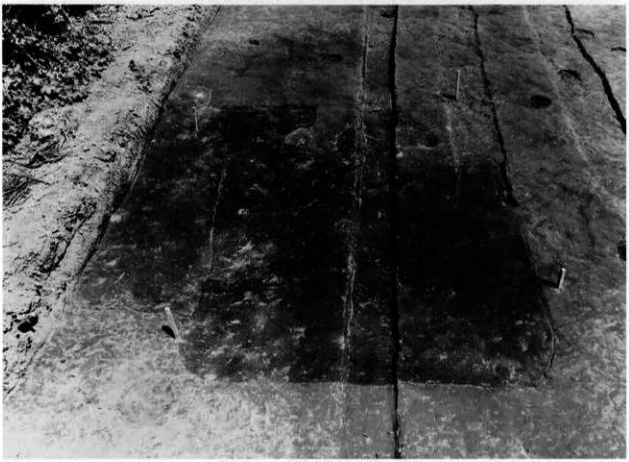
SI085検出状況（西から）

SI085、095床面検出状況（東から）

SI095甕出土状況（東から）

SI095耳環出土状況（西から）

SI095住居内土壙完掘状況（西から）

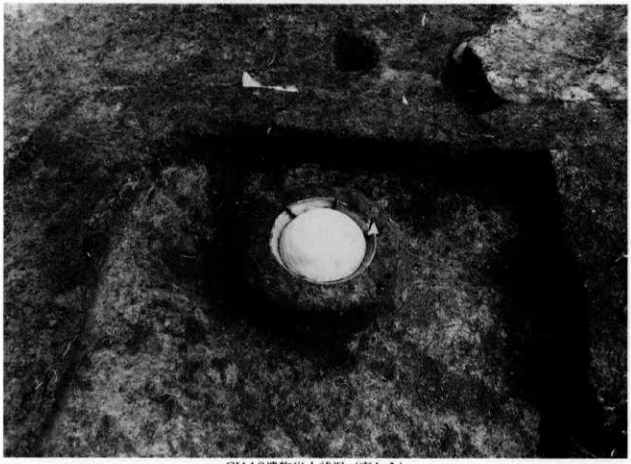


SI110、115検出状況（南から）

SI110、115床面検出状況（南から）

SI110堀内土壙土層観察（南から）

SI110、115完掘状況（南から）



SI110遺物出土状況（南から）

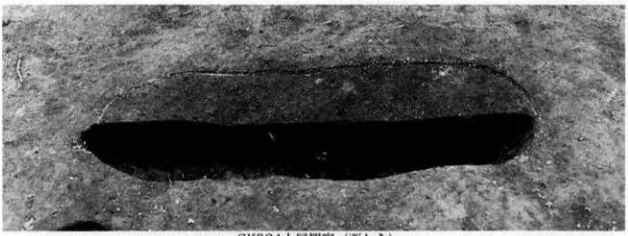
SX115カマド状況（南から）

SI115遺物出土状況（北東から）

SX100カマド遺物出土状況（東から）

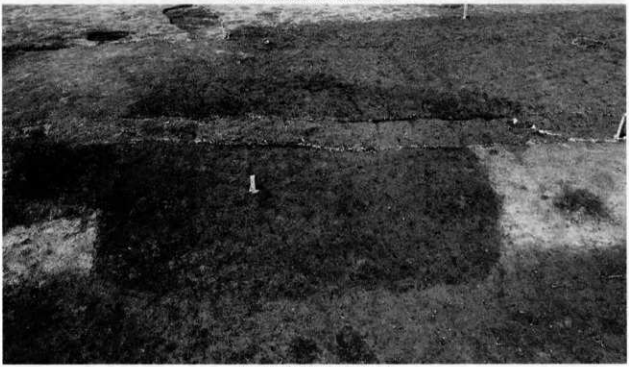
SX045検出状況（南から）

SX045土層観察（東から）

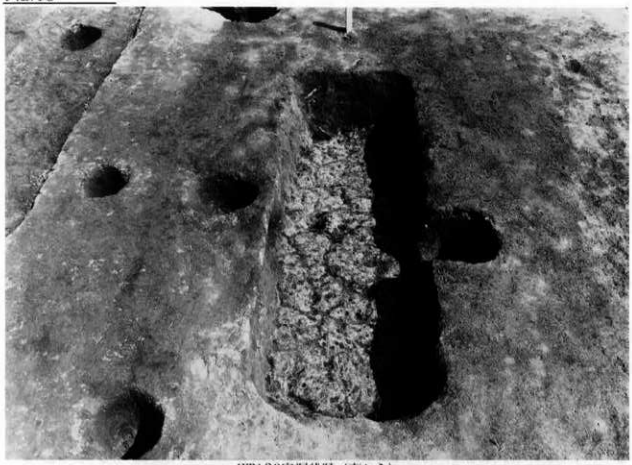


SK064土層観察（西から）

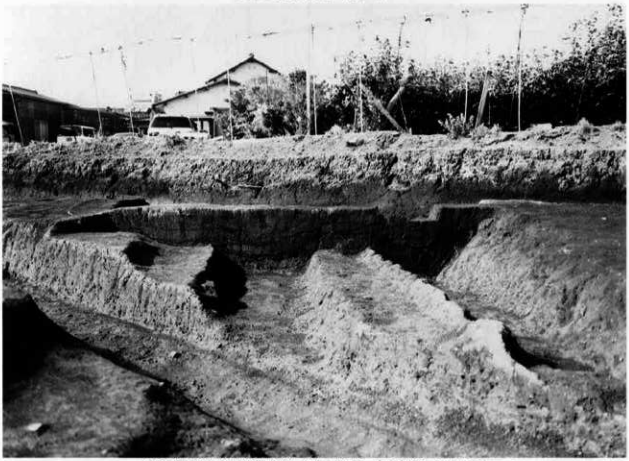
SK125完掘状況（南東から）



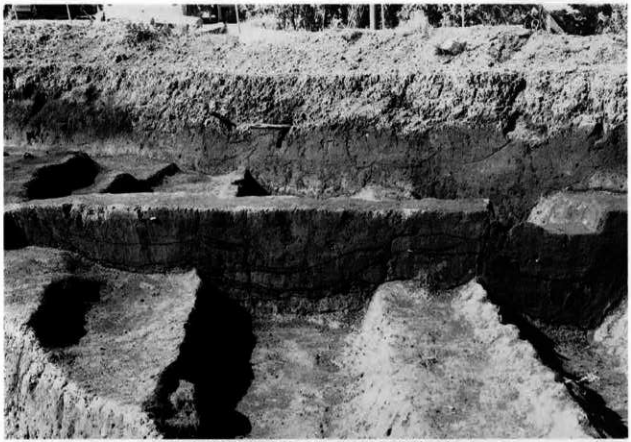
SK150検出状況（西から）



ST120完掘状況（南から）



SF220官道跡西側溝北端（西A地点）土層観察（南から）



SF220官道跡西側溝北端（西A地点）土層観察（南から）

SF220官道跡西側溝（SD030）検出状況（南から）

SF220官道跡西側溝（SD035）検出状況（南から）

SF220官道跡西側溝（SD035）完掘状況（南から）

SF220官道跡西側溝（SD035）土層観察（北から）

SF220官道跡西側溝（西B地点）土層観察（南から）

SF220官道跡西側溝（SD030、035、055、135）完掘状況（南から）

SF220官道跡西側溝北半分完掘状況（南から）

SF220官道跡西側溝南半分完掘状況（北から）

SF220官道跡西側溝南半分完掘状況（北から）

SF220官道跡西側溝南半分（西E地点）土層観察（北から）

SF220官道跡東側溝北端（東A地点）土層観察（南から）

SF220官道跡東側溝（東B地点）土層観察（北から）

SF220官道跡東側溝（SD225、050、060）完掘状況（南から）

SF220官道跡西側溝南半分（SD225、050）完掘状況（南から）

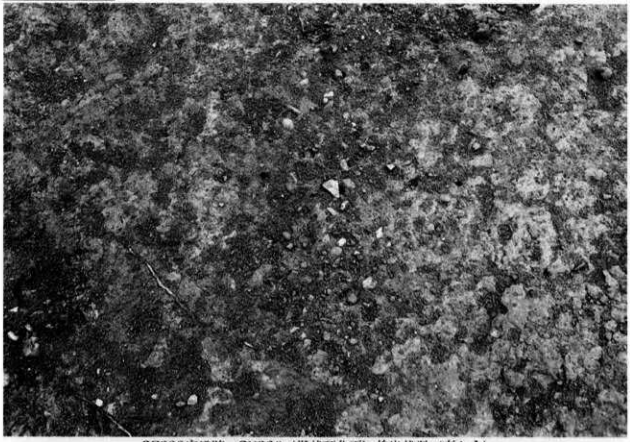
SF220官道跡東側溝南半分完掘状況（南から）

SF220官道跡東側溝南半分（東D地点）土層観察（北から）

SF220官道跡東側溝南半分（東E地点）土層観察（北から）

SF220官道跡南半分路面（硬化面）検出状況（南から）

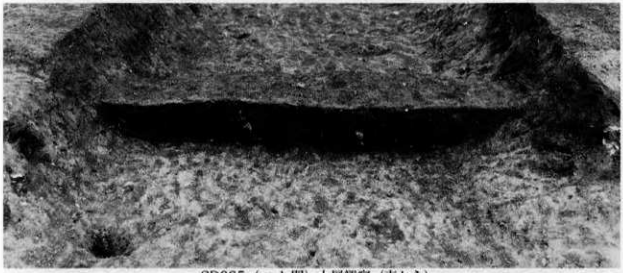
SF220官道跡　SX230（帯状硬化面）完掘状況（南から）



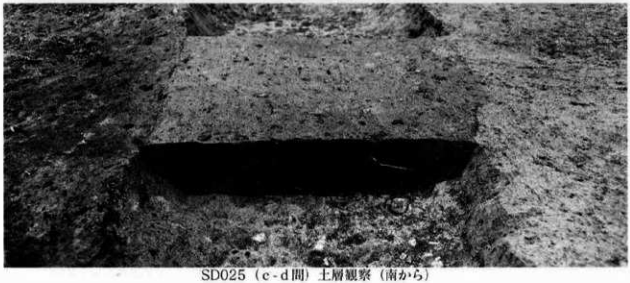
SF220官道跡　SX230（帯状硬化面）検出状況（南から）

SF220官道跡　SX235（帯状硬化面）完掘状況（南から）

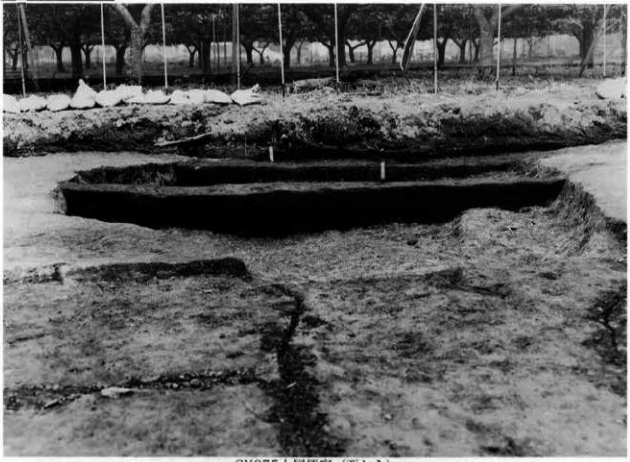
SF220官道跡　SX240（連続土壙）完掘状況（南から）



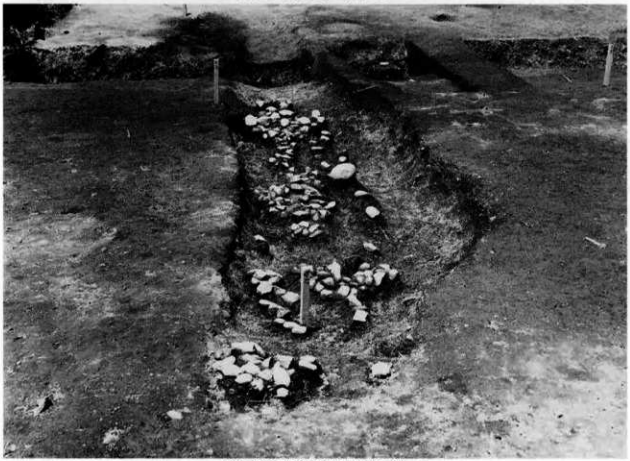
SD025（a-b間）土層観察（南から）



SD025（c-d間）土層観察（南から）



SX075土層観察（西から）

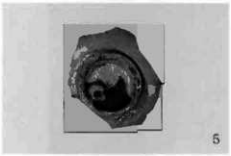


SX124集石検出状況（東から）

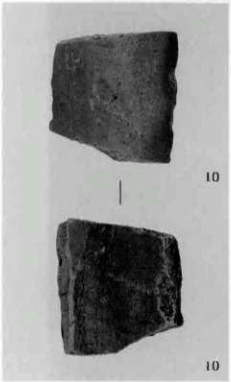
SX090完掘状況（南から）

SX090遺物出土状況（南西から）

1


5

7


10

10

11

12

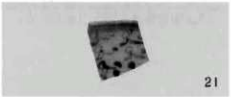
13

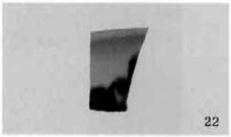
15

18

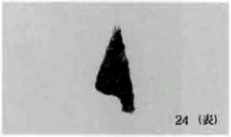
19

20

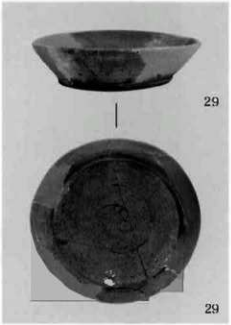

21


22

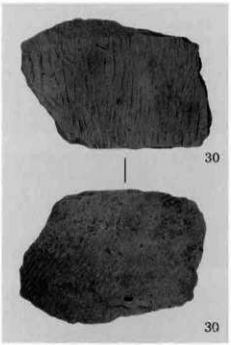
23 (内)


24 (底)

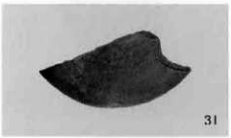
26

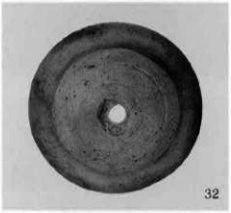

29

29


30

30


31


32

33

34

36

37

38

41

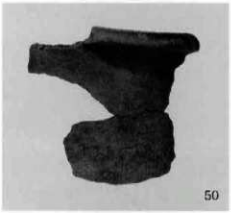
42

44

45

46

48


50

51

52

57

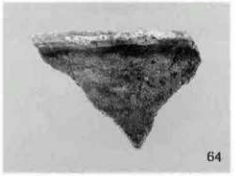
58 (IA)

59

61

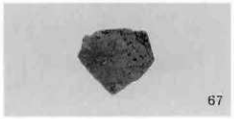
62

63


64

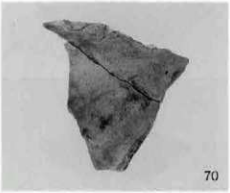
65

66


67

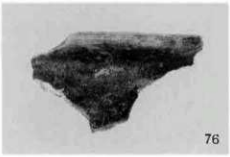
68

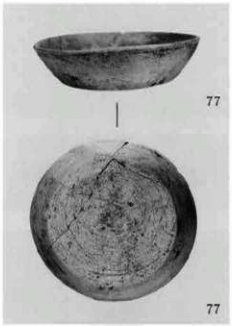
69

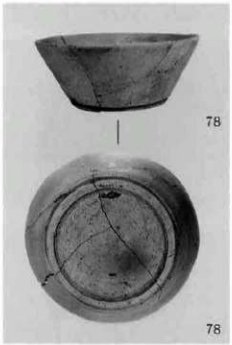

70

71

72

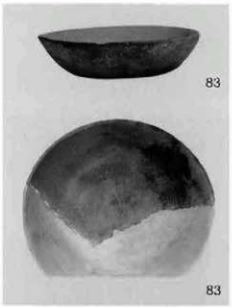

76


77

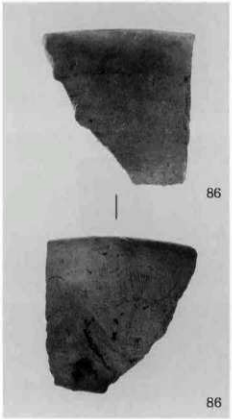

78

79

81


83

85


86

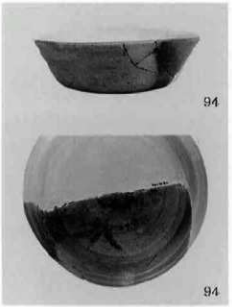
87

88

89

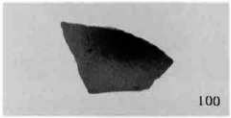
90

92


94

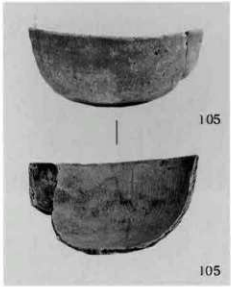
96

98


100

102

104


105

105

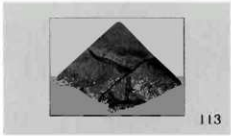
106

107

109

110

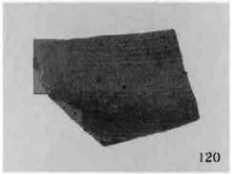
111


113

117

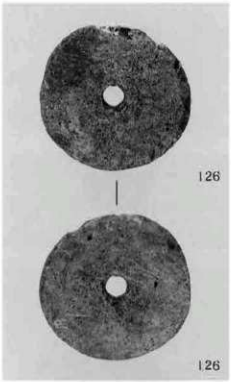
118

119


120

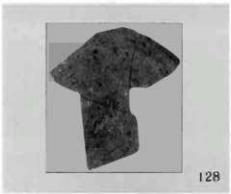
123

124


126

126

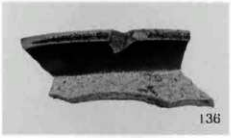
127

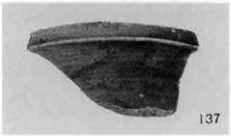

128

130

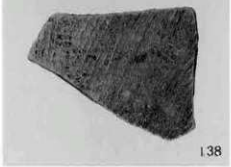
134

135

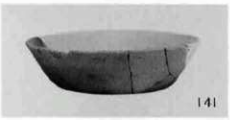

136

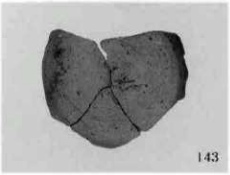

137

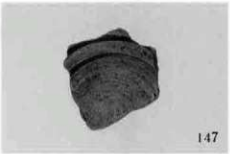
138


138

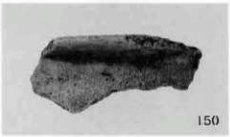
140


141

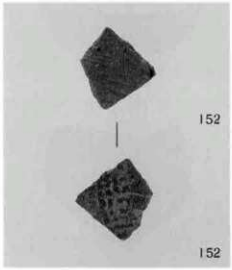

143


147

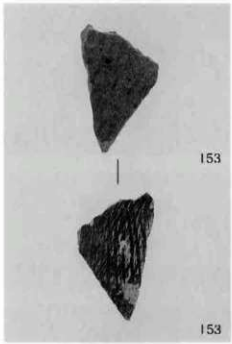
148


150

151


152

152

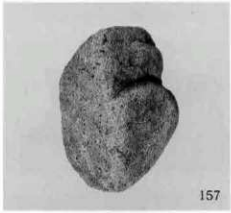

153

153

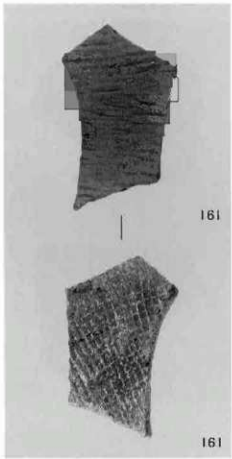
154

155

156


157

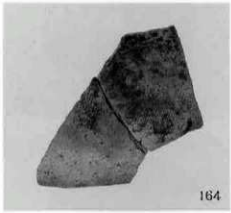
159


161

161

162

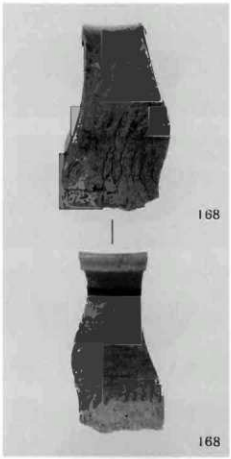
163


164

165

166

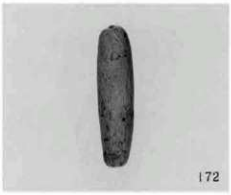
167


168
168

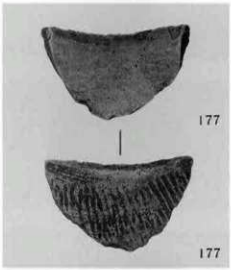
169

170

171


172

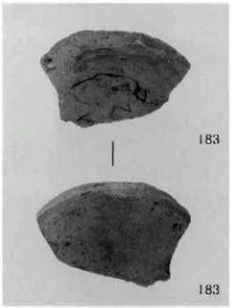
175

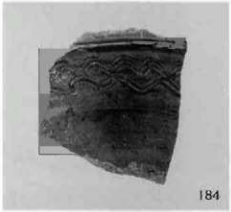

177
177

178

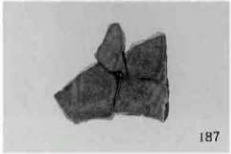
179

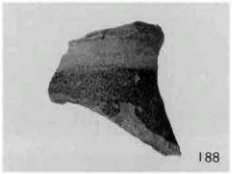
182


183
183

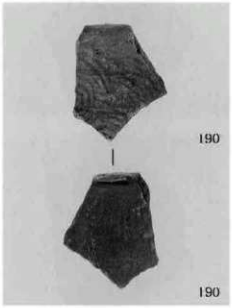

184

186

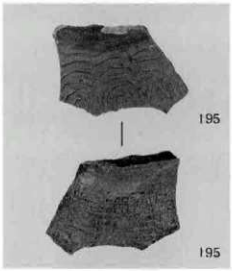

187


188

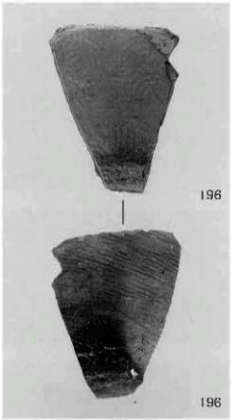
189


190

190


195

195


196

196

197

198

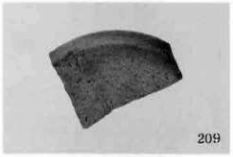
199

200

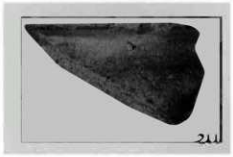
201

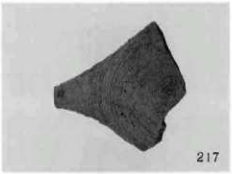
203

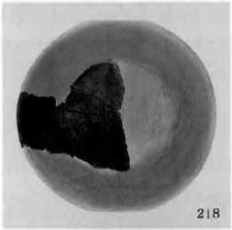
205


209

210


211


217


218

220

221

223

225

227

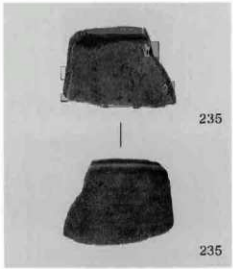
228

230

232

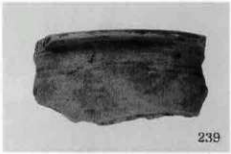
233

234

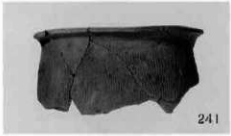

235

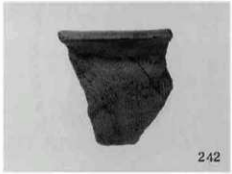
235

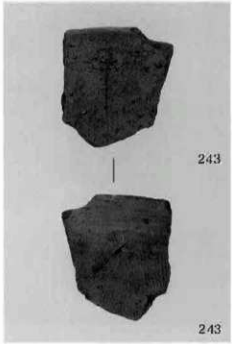
238


239

240


241


242


243

243

245

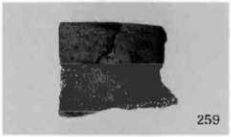
250

253

254

255

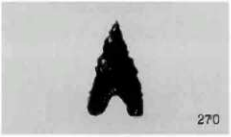
258

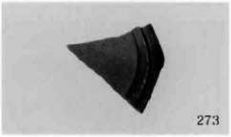

259

260

261

262


270


273

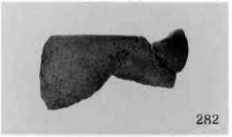
274

275

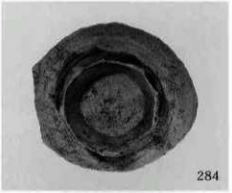
276

277

281


282

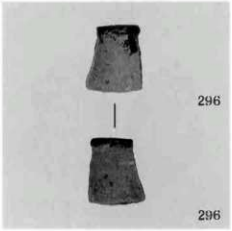
283


284

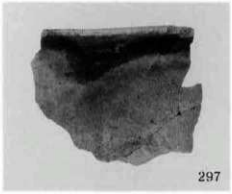
285

292

294

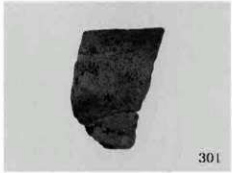

296

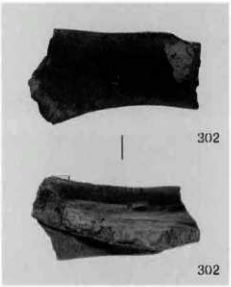
296


297

298

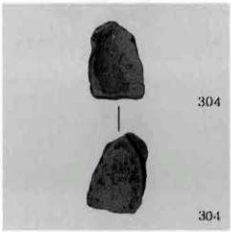
299


301


302

302

303


304

304

305

306

312

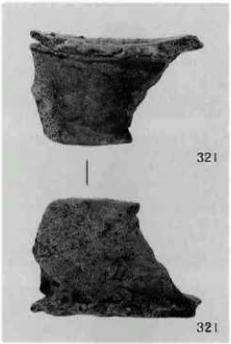
314

315

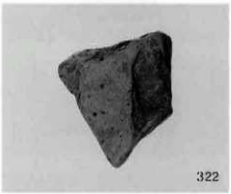
317

319

320


321

321


322

323

325

327

328

SI095 住居内土壙　粘土塊

SX100　粘土塊

SX100　甑片

SX124　滓

SX124　滓

羽犬塚山ノ前遺跡
筑後市文化財調査報告書
第48集

平成15年3月31日
発行　筑後市教育委員会
筑後市大字山ノ井898
印刷　（資）四ヶ所印刷
福岡県甘木市大字馬田336

SD035
SD055
SD135
SD070
SD030
X24,045
SK064
SP043
SP037
SP114
SP099
SX040
SB215
SK045
SB205
SB210
SB200
SD050
SD060
SD065
SD025
X24,030
SX124
SX138
SX134
SX133
SX136
SX075
SK150
SX240
SX130
SD080
X24,015
SI116
SI110
ST120
SA190
SP153
SK145
SX125
SK140
SX235
SX230
Y-45,810
X24,000
SP159
SP147
SA185
SK085
SK095
SX100
SX105
SP178
SX090
Y-45,840
0
10m
Y-45,825